

巻頭言

会長 木村高久

「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく、山際少し明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。」は、清少納言の枕草子の冒頭である。

確かに春の明け方は素晴らしいものだ。だが、春の光、そよぐ風、そして道端のレンゲソウ等も引けを取らない美しさがある。いずれも我々に生氣と歓喜を与えてくれる。

しかし、今春は手放しては喜べない。それは、言うまでもなく新型コロナウイルスが収束していないためである。3月21日、一都三県の緊急事態宣言が解除されたが、感染者が増加しておりリバウンドの恐れが十分ある。しかも感染力が強く、死亡率も高い変異ウイルスが蔓延してきているのだ。解決の鍵はワクチン接種である。2月17日東京医療センターで、わが国初めての接種が行われた。今後は計画的に接種されるようだが、安全に速やかに接種が進展して欲しいと願うものである。

さて、新型コロナウイルスの死者が欧米に比して日本を含むアジアの一部は少ないのが事実だ。この要因をノーベル賞受賞者の山中伸弥京大教授が「ファクターX」と呼んだ。

この「ファクターX」についていくつかの仮説が提起されている。(1)人種による遺伝子の差である。(2)過去にアジアで同様のコロナウイルスがはやったため

免疫が出来ている。(3)BCG接種の影響等である。そして、2020年9月、ドイツ研究チームが新型コロナウイルス感染症の重症者の一部にネアンデルタール人から受け継がれた遺伝子が関連している可能性がある」と発表した。真偽や詳細は不明であるが人類史にも関係してきたことは興味深いものである。今後の研究成果を待ちたいと思う。

次に本会の活動に関しては1月11日に委任状主体で参加者少数による総会を実施した。その後新型コロナウイルス感染者数の増加などから2月、3月の研究発表会は休会とせざるを得なかったが、当宣言が解除されたので4月から再開する運びとなった。今後の計画事業は、新型コロナウイルス感染症の動向をみながら進めていきたいと考えている。

終わりに、来年は本会創立四十周年という輝かしい節目の年を迎える。また新型コロナウイルスは恐らく収束に至るものと思われる。よって盛大な祝典を挙行したいものである。



作画・藤盛詔子氏 作

令和三年定期総会開催

会場 横浜市開港記念会館講堂

(令和三年一月十一日)

広報担当 高尾 隆

新型コロナウイルス感染の急拡大による首都圏の第二回目の緊急事態宣言が発令された中で、令和三年定期総会が開催された。最大限のリスク回避の下、会員の皆様のご協力と賛意により議題の決議が無事行われました。この変則的開催に各班長を通じ、委任の同意を示された会員の皆さま並びに直接会場へ足をお運び頂いた25名の皆さまに深謝いたします。

また、当初、第二部として予定していた柴裕之先生による新春講演会は四月例会日への延期となりました。

総会の出席者は委任状を含め158名中148名でした。

上野事務局長の司会で高尾常任理事による資格確認、続いて宮崎理事による開会の言葉で開始され、木村会長挨拶の後、議事が予定通り進行された。すなわち、

第一号議案(令和二年度の総括および今年度の展望)、第二号議案(令和二年度の活動報告)、第三号議案(令和二年度の収支決算報告および監査報告)、第四号議案(会報の発行)、第五号議案(令和三年度活動計画)、第六号議案(令和三年度収支予算)、第七号議案(規約改正)、第八号議案(役員異動)、報告事項(会員表彰)などが議決、満場一致で承認され、加藤名誉会長の閉会の言葉で無事に終了しました。

なお、第八号議案で承認された役員異動は以下です。

〔新任・異動役員〕
令和三年一月二日付
副会長 上野隆千(事務局長退任)

副会長 熊本修一(常任理事・事務局次長・会計退任)

副会長 高尾隆(常任理事退任)

事務局長・事務局次長兼務 村島秀次(理事退任)

常任理事 藤盛詔子(理事退任)

常任理事 高島治(理事退任)

常任理事 竹内章二(理事退任)

会計 石井昭徳(理事退任)

理事 真野信治(新任)

理事 小林道子(新任)

〔役員退任〕

令和二年十二月三十一日付

副会長 三誓行雄

常任理事 藤平玲子

理事 佐藤好子

〔顧問新任〕 藤平玲子
〔顧問退任〕 堀江洋之

緊急事態宣言下での定期総会



▲挨拶される木村会長



▲(左上) 常任理事・藤盛詔子さん(右上) 常任理事・高島治さん(下左) 常任理事・竹内章二さん(下右) 会計・石井昭徳さん



▲閉会挨拶をされた加藤名誉会長



▲(上左) 副会長・上野隆千さん(上右) 熊本修一さん(下左) 副会長・高尾隆さん(下右) 事務局長・村島秀次さん



▲新理事の(左) 真野真治さん。(右) 小林道子さん

会員研究

女帝北条政子の実像と

義時の陰謀を検証する 加藤 導男

はじめに

前号八十一号では「比企氏の乱」を探り上げました。この乱の首謀者である北条一族の時政は、後妻牧の方と共に謀し、実朝を殺害し、娘婿の平賀朝政を將軍にと画策したが、政子・義時によって未然に発覚して防止した後に、時政は伊豆国に追放されたのです。

今号では、政子・義時の姉弟にスポットをあて、検証したいと思えます(なお、来年の大河ドラマは「義時」が主人公とのこと最近知りましたが、今回の投稿は、それを意図したものではありません)。

○北条政子

イ. 流人頼朝と熱愛結婚……
嫉妬深く、力カア殿下

「平治の乱」(一一五九年)で、平清盛と戦った源義朝は敗死し、

息子の頼朝は捕らえられ、極刑も考えられたが、清盛の義母・池禅尼の必死な助命の訴えによって、

伊豆の蛭ヶ小島に流刑となった。その平家の監視役が豪族の北条時政で、その娘・政子との運命の出会いとなり、恋におちたのです。

ただ、時政は流人である頼朝との仲を認めなかったものの、政子は雨の夜、頼朝のもとへ駆け込んだのである。やっと、時政も結婚を許した。

頼朝は流人でありながら、意外に自由で、多くの女性と浮名を流していた。有名な話であるが、「亀の前」という女性との浮気が判り、政子は家臣に命じ、彼女の邸宅を打ち壊したのである。

それに対して、頼朝は政子には何も言わずに、関係した御家人を叱るだけであった。

流人であった頼朝は身内はおらず、頼るは北条一族であり、政子

との争いは避け、必然的にやはり力カア殿下になったのか……

□. 夫や子供達に先立たれる……

ただし、子女には優しくかつた

源頼朝は正治元年(一一九九)死去。その以前に子女二人が病没している。

○長女・大姫(二十歳病没)

○長男・頼家(二十二歳暗殺)

○次女・三幡(さんまん・

通称乙姫 十四歳病没)

○次男・実朝(二十六歳暗殺)

次女の三幡については、一般的には馴染みがないが、幼少から病弱で、『吾妻鏡』には、七箇所の記事があり、「温氣(高熱)」とか、「日を追ひて憔悴したまふ」、「京都より医師参著す」等々、手を尽くした様子が覗えるものの、十四歳で死去する。

長女大姫は七歳の頃、父頼朝の

従兄弟の木曾(源)義仲の子の義高が、養子婿として鎌倉に入る。

人質的扱いではあったが、幼いどうし、大変仲睦まじい間柄であったという。

だが、源平合戦が始まったばかりであったが、義仲は破竹の勢いで平

が、「北条政子」の特集があった。

これは、来年の大河ドラマの番宣の為かとも感じたが……。

この中で、政子は日本三大悪女

(「日野富子」「淀君」とそれと「北条政子」)の一人というものの、意外に鎌倉幕府を守った人として擁護していた。

前記二つの番組の監修したのは東大史料編纂所本郷和人教授で、『比企氏の乱』で孫の一幡が殺害されたことには触れず、この乱の直後に政子によって頼家は拘束され、將軍を剥奪し、伊豆修善寺に監禁された。頼家の家臣との面会も許されず、母政子に書状を出すことも禁じられたのであるが、このことも触れていない。

『吾妻鏡』には、翌年、元久元年の七月十九日の条に、「伊豆國飛脚参著す。左金吾禅閣(頼家)當國修禅寺において薨じたまふの由」と、頼家の死去したこのみ記されている。

他の文献によれば……

「北条時政が郎党の善時藤馬を送り、頼家を殺そうと機をうかがっていたが、頼家は用心深く、なかなか近づけなかったものの、浴室にるところに繩を飛ばし首にかけ、

家を打ち破りながら京に上り、名をはせるも、後白河法皇と反目、源範頼・義経の西上軍のため、壊滅し、元暦元年(一一八四)近江粟津で討死したのである。

父義仲の敗死により、頼朝は後に憂いがあったてはならぬとの思いから、その三ヶ月後に、義高殺害を決める。

大姫については『吾妻鏡』に二十六箇所の記述があるが、前記の通り、頼朝が義高討伐を決めた三ヶ月後の四月二十一日、大姫は義高を逃がすため女装させ、屋敷から逃亡させたが、夜明けには露見し、頼朝は追手を探索に向かわせ、五日後に入間河原(現在の埼玉県入間市)にて、義高は郎従により殺害された。

この報告があつて、大姫は憔悴して重湯さえも食べられない体調となる。

政子は義高殺害に憤慨し、二カ月後、追手だった堀藤親家や他を鳩首させる。大姫は日を追って、病気がちで床に臥す事が多くなったのであった。

その後、大姫はお見合いの話等があったものの、許婚であった義高への思慕が強く、悉く断つた。『吾妻

捕らえて刺殺したと報告があった」とされている。この暗殺された件も番組では触れなかった。

頼家は、一年前は妻の若狭局や子息・一幡が殺され、母親の政子からも見捨てられ、本当に気の毒な最期と考える。

二. 三代將軍の実朝は、武人ではなく文人、儂い一生を……

建仁三年、二代將軍頼家が廃され、実朝が十二歳で將軍職を継ぐ。

しかし、実権は時政・政子・義時が握り、傀儡でしかなかった。

『愚管抄』には、「北条方世二関東八成テ、イマダヲサナク若キ実朝ヲ面(おもて)ニ立テ云々」と指摘している。

実朝が將軍在位中に、畠山氏と和田氏を討伐する事件が発生した。

いずれも、北条氏の主導で行われたもの。冒頭の『はじめに』で、時政が後妻の牧の方と結託し、事件を起こしたことを記したが、自分の孫を犠牲にして、將軍の座を画策しようとした時政はどうしようもない人物である。

実朝は正室(信子、公卿坊門信

鏡』には「御不例(病氣)」「御祈禱」等の言葉が多く見られる様になってくる。

頼朝は大姫を後鳥羽上皇の後宮(こうきゅう＝側室)にすべく、政子と共に、京都の清水寺に参詣したことも記されている。

しかし、後宮になることなく、病状は悪化し、大姫は手厚い看護のいかにもなく、建久八年(一一九七)に二十歳の若さで他界した。

大姫のお墓は大船の常楽寺にあって、同寺には許婚者であった義高のお墓も少し離れた場所にある。

八. 『比企氏の乱』で孫の一幡を焼死、長男頼家を見殺しに……

初代鎌倉幕府將軍の源頼朝死去した後は、長子頼家が二代將軍を継ぐ。

前号で述べたが、建仁三年(一一二〇三)八月、頼家が重病となり、『吾妻鏡』には、二十七日の条に「関西三十八ヶ国の地頭職を舎弟千幡君(後の実朝)に、関東二十八ヶ国を長子一幡君に充てられる。

ここに外祖比企能員憤怒し、謀反を擬す」との事が記されており、いよいよ『比企氏の乱』の当日(九

清の娘)がいたが、子はなく、「源氏の正統は自分で終わるので、せめて高い官位に就いて家名を上げたい」と述べ、次々に官位昇進を望む。

そして、「蹴鞠」をやり、「和歌」については藤原定家に師事し、自身『金槐和歌集』(きんかいわかしゅう)「金」は鎌倉の「かねへん」を表わし、「槐」は「大臣」という意味から、『鎌倉の右大臣』の家集の意)を編纂し、六六三首が掲載されている。

建保四年(一一二六)、東大寺の再建を行った宋人の僧・陳和卿(ちんなげい)が鎌倉に来て、実朝に「貴客は昔宋朝医王山の長老たり、時に我その門弟に列す」と述べ。実朝も同じ夢が現れたことから、宋に渡宋を思い立ち、翌年、由比ヶ浜で船を曳かせたが、浮かばず、砂浜に朽ち損じた。

その後、実朝は昇進を重ね、右大臣に任じられ、建保七年(一一一九)一月二十七日、鶴岡八幡宮で拝賀を迎え、その夜、甥の公暁(頼家の第二子)に襲われ落命した(これについては次の項「北条義時」に記す)。

天皇制は衰退し、建武の新政(一三三四〜六)に一時的に天皇権力は復活したが、室町、江戸時代を経て、尊皇論が台頭した明治維新までの六百数十年間、天皇の権威は失われてしまったのである。

□・義時の死。その真相は？

北条義時は承久の乱の三年後、元文元年(一一二四)六月十三日、六十一歳で急死した。

『吾妻鏡』には「日頃は脚気で、霍乱も併せた症状とあるが、霍乱とは猛烈な腹痛、下痢、嘔吐などを催す急性胃腸炎である。七転八倒の苦しみのなかで、念仏を数十回唱えてから亡くなった」。

通常の病気による往生とのことであるが、やはり不自然で合点がない。

藤原定家の『明月記』には、義時が死んだ三年後の一一二七年六月十一日の条には次のように記されている。

「承久の乱の、京方の首領の一人だった二位法印尊長が捕らえられた。自害しそこなった尊長は、京都六波羅探題に引き出された際に、『早く首を斬れ、さもなければ

ホ・北条政子を総括する

頼家は十八歳で二代將軍に就任したが、若き故、武家政権の鎌倉幕府を開設した父頼朝の器量と比較するのは無理としても、母子との関係であれば、政子は子頼家の成長する姿を見る余裕さえ無かったのであろうか？

そして、比企氏の乱で孫の一幅を焼死させたのは、考えられない非情さを覚える。

実朝については、武人の道に不向きだったが、公暁による暗殺は次に述べる通り、義時が首謀者であると推測されるが、政子は義時より事前に聞かされていなかったとは考えにくい。

また、鶴岡八幡宮で静御前が舞った際、源義経を思慕する内容を頼朝が怒ったことを、政子が庇ったとのお話があるが、後日、静御前は義経の子を産み、男子だったために源氏の血脈を考え、由比ヶ浜に埋め殺されたと伝えられている。娘については前述した通り母親として普通の対応であるが、有名な『承久の乱』(後述)の際に御家人へ檄をとばしたのは、鎌倉幕府、

義時を擁護するもの。いや北条一門を守るものであったと考えられ、子や孫の死等を考慮すれば、北条政子は前述の「日本三大悪女」の汚名は拭いきれないものと思慮する。

○北条義時

イ・実朝暗殺、承久の乱も

主因は義時……

北条義時は、比企氏の乱や梶原氏・畠山氏・和田氏等一族の御家人一掃作戦等の事件や数々の戦いを首謀していた。

前項でふれた甥の公暁に暗殺された実朝であるが、その際、拝賀式で気分が悪くなったとして、その場を離れた義時の代わりに御剣の役を努めさせられた文章博士もんじょうはかせ)の源(中原)仲章も公暁に殺害したとされているが、公暁が殺害したのは実朝だけで、仲章は数人の男によるものとの文献があり、詳しいことは『吾妻鏡』には記述されていない。

文章博士とは漢文学や中国の正史を教授する役職であるが、仲章は実朝の教育係であり、後鳥羽上皇との連絡係でもあった。在京御

家人として、実朝に気に入られ御所の近くの小町に邸宅をも賜ったのである。

時折上京し後鳥羽上皇に奉仕して幕府内部の情報を伝える等、今日でいう「二重スパイ」の役目を果たしていたのだ。

一般には北条義時と間違えられ殺されたとしているが、私は実朝と仲章も同時に抹殺する計画ではなかったかと思慮する。

この事があって、後鳥羽上皇は仲章の仇をとることも併せて、義時追討の宣旨を発給した「承久の乱」となったのだ。ただし、仲章の仇討が目的であるとは明文化できなかったのだ。それは仲章がスパイであったからである。

承久の乱は、実朝暗殺の二年後、発給され、上皇側は「朝敵となれば、義時に参じる者は千人もいないだろう」と樂觀的であったが、幕府軍は総勢十九万騎が京に攻め上がり、公家政権は上皇の思惑とは相違して兵は集まらず、惨敗であった。後鳥羽、順徳上皇は配流となり、討幕計画に反対していた土御門上皇は自ら望んで土佐に配流となった。

そしてこの承久の乱により、古代

「鎌倉興亡史・比企一族の乱」

加藤 蕙 秋田書店

「訓読 明月記」

今川 文雄

「保暦間記」

佐伯 真一

「鎌倉事典」

白井 栄二

東京堂出版

義時の妻が義時に飲ませた薬で俺を早く殺せ」と叫び、武士達を驚かせたという」。

義時の妻とは後妻伊賀の方のことであり、義時の死後、嫡子の泰時を退けて実子の政村を執権にすえようと謀った女性である。

また、室町時代に書かれ、鎌倉幕府の事も多く掲載されている『保暦間記(ほうりやくかんき)』には「義時ハ、思ノ外二近ニ召仕ケル小侍二ツキ殺サレケル」とある。

鎌倉幕府第二代執権として権力を駆使し、絶大な地位に就いていた北条義時の最期は何故か、単なる病死ではなかったのか、謎めいている。

(完)

【参考文献】

「吾妻鏡」

貴志 正造

「甦る比企一族」

清水 清

「鎌倉北条氏の興亡」奥富 敬之

吉川弘文館

「陰謀の日本中世史」

吳座 勇一

角川書店



会員研究

ノーベル賞を逃した科学者

高峰譲吉

長谷川 憲司

もう一人の日本人科学者・高峰譲吉

昨年研究発表会にて、「世界的細菌学者野口英世博士の実像」を紹介した折に、野口が黄熱病の研究でウイルスに感染し亡くなった後、遺体がアメリカに運ばれニューヨーク州のウッドローン墓地に埋葬された話をした。実はこの墓地にはもう一人同時代に活躍した日本人の科学者が眠っているのである。

彼の名前は高峰譲吉（一八五四―一九二二）である。医学や薬学を専門とする方にはかなりなじみのある科学者である。彼は生涯に渡り多くの事を成し遂げていく。この章では簡単に紹介するが、高峰譲吉は米国でタカジアスターゼを発見し、更にアドレナリンの抽出と結晶化に世界で初めて成功し、そして米国で巨万の財を成した人物である。

成功に繋がる青年期までの経歴

高峰譲吉は一八五四年（嘉永七年）現在の高岡市で漢方医（加賀藩の御典医）高峰精一の長男として生まれた。この年はペリーが再来航し、日米和親条約が締結された年である。当時は日本国中が鎖国から開国へと武士から農民に至るまで混乱が起きていた時代である。そんな中、昭和に至るまで一流の科学者として、また事業家として、そして日米の親善外交の橋渡し役として活躍した高峰譲吉が誕生したのである。

一八六五年（慶応元年）十二歳の譲吉は加賀藩藩校明倫堂在学中に長崎への留学生となり西洋の科学に直に触れて英語を習得した。その後、適塾（緒方塾）、大阪医学校で学び、一八七九年（明治十二年）工部大学校（現在の東京大学工学部）応用化学科を首席で卒業した。一八八〇年からは英国

へ留学し、帰国後は農商務省に入省し、一八八四年（明治十七年）米国ニューヨーク万国博に派遣され、その時に知り合った後の妻キャロライン・ヒッチと出会い、婚約した。帰国後は専売特許局に勤務し、局長の高橋是清を補佐し、特許商標制度の確立に尽力した。一八九〇年（明治二十三年）からは渡米し、その後は米国に永住することになる。

生涯に渡る業績

高峰譲吉には生涯に渡り数々の業績があるが、その中で一番に挙げられるのは、医薬品の発見であろう。現在も販売されている医薬品、発売以来百年を経ても使用されている医薬品は三つあるが、その中の二つは譲吉が発見し研究し作り上げたものである。一つは『タカジアスターゼ』であり、もう一つは『アドレナリン』である。

タカジアスターゼの発見

商品名「新タカヂア錠」として現在国内で第一三共ヘルスケア社から販売されているのが、高峰が発見したものは、デンプン分解力（広範囲のpH領域で効果を発揮）に

優れた「タカジアスターゼ」である。

ジアスターゼとは元来デンプンを加水分解する酵素アミラーゼの一種である。健康への効能効果としては、消化促進、消化不良、食欲不振、胃のもたつき、消化不良による胃部膨満感の改善のために用いられる。高峰は苦勞の末に、麴カビ（譲吉の母方が造り酒屋をやっていたので、酒の醸造には詳しいかった）の中から特に強いジアスターゼを生産する菌株を発見したのである。そしてこれを「タカジアスターゼ」と命名し、日本を含む世界各国で特許を取得している。当初米国ではパーク・デイビス社と契約を結び、一八九五年（明治二十八年）米国で粉末胃腸薬として販売を開始した。国内では設立したばかりの三共商店（ちなみに後の三共株式会社）の初代社長は高峰譲吉である）で一八九九年（明治三十二年）からは販売を開始した。

アドレナリンの単離と生理活性

高峰譲吉は一九〇〇年（明治三十三年）からニューヨークの高峰研究所において、日本から呼び寄せた弱冠二十三歳の助手の上中啓

三（一八七六一―一九六〇）と共に、アドレナリンの研究に取り組んだ。タカジアスターゼを商品化したパーク・デイビス社から依頼された新しい生理活性物質の研究であった。

副腎機能とアドレナリンについて簡単に説明する。生体内では腎臓の上部に副腎が乗っている構造である。副腎は外側部を副腎皮質と呼び、内側部を副腎髄質と呼ぶ。副腎皮質は副腎皮質ホルモン（ステロイドホルモン）を分泌し、主に三つのホルモンがそれぞれの機能を持つ。まず一つ目の糖質コルチコイドが生体内の糖の蓄積と利用を制御する。二つ目の鉱質コルチコイドは電解質のバランスを調節する。そして三つ目の男性ホルモン（アンドロゲン）は生殖機能に関与している。一方、副腎髄質はアドレナリン、ノルアドレナリンというホルモンを分泌し、身体のストレス調節を行うのである。アドレナリンが血中に放出されると心拍数や血圧を上げ、瞳孔を開きブドウ糖の血中濃度（血糖値）を上げる作用などがある。いわゆる、興奮性の刺激ホルモンである。

アドレナリンの歴史と結晶化

アドレナリンは一八九五年にポーランドの科学者によって初めて発見されている。しかし、純粋にアドレナリンのみの単離には成功していない。その後、高峰譲吉（当時四十六歳／工学博士）と上中啓三は一九〇〇年に牛の副腎からアドレナリンを純粋に単離し、結晶化することに世界で初めて成功し、一九〇一年（明治三十四年）に『The Journal of Physiology』に論文発表し、製法特許も取得した。発表者は研究所の主催者の高峰譲吉であるが、実際に実験を行ったのは上中啓三であった。この研究成果は欧米の学界に大きな衝撃を与えた。当時このアドレナリンの結晶体は人類が初めて手にしたホルモンの結晶体であったからだ。同年、『Adrenalin』という商標が米国で登録されパーク・デイビス社は全世界で発売を開始した。

ジョン・エイベルの無茶な主張

当時、動物の副腎を用いた生理活性物質の抽出研究は世界中で行われていたが、一八九七年にジョン・ホプキンス大学教授のジョン・エイベルは羊の副腎から分離した物質を「エピネフリン」と名付けた。

アドレナリンは英語、エピネフリンはギリシャ語でそれぞれ副腎を意味する語である。しかし、先頭を走っていたエイベルにとって、高峰らの成果はよほど悔しかったであろう。実際、エイベルが発見したエピネフリンは構造的に純粋のアドレナリンとは異なる物質（ベンゾイル誘導体）であったが、米国医学会の大御所のエイベルは、高峰たちの研究は自分の研究を『盗んだ』ものだと言いがかりをつけた。米国で著名な科学者の一人であったエイベルの主張（高峰泥棒説）は、米国で認められ、逆に高峰の研究は米国では認められなかった。しかし、後年実際に研究した上中の実験ノートが見つかり、エイベルの用いた方法とは異なる方法で純粋なアドレナリンを発見したことが証明されたのである。

間違いなくアドレナリンの最初の発見者は高峰譲吉と上中啓三であることは世界中で認められ確定された事実なのである。

現在ではアドレナリンもエピネフリンも同じ物質のことを指しているが、ヨーロッパでは高峰らの功績を認めて「アドレナリン」の名称が使われているが、米国医学界では今

でもエイベルの主張を受けて、このアドレナリンを「エピネフリン」と呼んでいるのである。

アドレナリンの臨床現場での効果は絶大なものである。

- (1) 急性低血圧の治療
- (2) 心停止や出血性ショックの際の治療
- (3) 気管支喘息の気管支麻痺の痙攣の治療
- (4) 百日咳の気管支痙攣の緩解

一九七〇年米国のジュリアス・アケセルロッドらはアドレナリンとノルアドレナリンの神経伝達物質としての働きを解明したとして、ノーベル医学生理学賞を受賞している。高峰のアドレナリン単離・結晶化の成果に難癖をつけ、高峰の研究業績を地に落とし入れたエイベルがなければ、高峰譲吉と上中啓三がノーベル賞に輝いていたかもしれない。

同時代を駆け抜けた日本人科学者最初に述べたように、野口英世と高峰譲吉はニューヨーク州ウッドローン墓地に埋葬されてい

る。しかし、墓石は高峰讓吉の墓の方が立派なように見える。これは恐らくは二人の財力の差によるものであろうか？ 高峰の墓石には (Father of modern biotechnology)

それ以上にマネージメント能力に優れ、ノーベル賞クラスの研究も優秀な部下に任せることができた。そして最後は実業家として巨万の富も得ることができた。当時、野口と高峰がニューヨークの日本人倶楽部と一緒に囲碁を打っていたという逸話も残っている。

敢えて著名な二人の日本人科学者を比較したのであるが、果たして自分はどのような研究者であったかをしめしめ思い返すこの頃である。

《主な参考文献》

- ・山嶋哲盛「日本の先駆者 高峰讓吉」岩波ジュニア新書
- ・飯沼和正他「高峰讓吉の生涯」朝日選書
- ・北国新聞社編集局「サムライ科 学者 高峰讓吉」時鐘捨新書
- ・飯沼信子「高峰讓吉とその妻」新人物往来社
- ・石田三男「ホルモンハンター アドレナリンの発見」京都大学学術出版会
- ・梶井美弘「アドレナリン発見者 上中啓三の足跡を辿る」(2) 徳島科学史雑誌、39, 57-65, 2020



▲科学者・実業家 高峰讓吉



▲切手になった高峰讓吉



▲アドレナリンを渡米半年で結晶化した立役者 上中啓三

会員研究

つらかった貫之さん 大歌人の没落人生と『土佐日記』 に隠された真実

小林 道子

一・はじめに

紀貫之といえば三十六歌仙のひとつで『土佐日記』を書いた人物として有名だが、その生涯はあまり知られていない。以前平安時代の国司が通った古代官道を調査しただった紀貫之の帰路の旅について書くことにした。

律令制度下で国司は中央から派遣され、税の徴収や軍事、訴訟の処理などをおこなった。しかし平安時代中期以降は国司(受領)に地方行政の全てを任せただけで権限が強化され、私腹を肥やす者も多くなった。

『延喜式』には土佐国司が毎年2月に調・庸を朝廷に献上していたと記録されている。主な調貢品は綿・米・帛・紙・蘇・堅魚・亀

甲・押鮎・鯖などで、これらの搬送は海上輸送だったようだ。任期を終えた国司(受領)の復路も土佐で蓄えた財産の運搬のため海路をとったと思われる。

二・紀氏の没落

紀貫之は貞観十年(868)頃、紀望行の子として京都に生まれたが、その頃紀氏が没落するきっかけになった事件「応天門の変」が起る。貞観八年(866)に応天門が炎上し、大納言伴善男は左大臣源信の放火によるものと訴えたが、藤原良房らの工作により逆に伴善男と息子の中庸らが遠流に処された。伴善男の従者だった紀豊城の罪に連座して、肥後守紀夏井が土佐国、紀春道が上総国、紀武城が日向国へ配流となっている。

この事件で、名門氏族だった大伴氏や紀氏が朝廷の中枢から失脚し、藤原氏の摂関政治確立へとつながった。

藤原北家が台頭した時代、下級貴族の貫之には政界で出世の見込みはなかったため、和歌によって道を開くことにした。その才能が醍醐天皇に認められ、延喜五年(905)4月18日、『古今和歌集』の撰者のひとりとなる。当時貴族たちに屏風絵が大流行したため、貫之は屏風絵の主題に合わせた歌を依頼され、職業歌人として収入を得ていた。

延長八年(930)正月29日、60歳を過ぎて土佐守に任命されるが、その間醍醐天皇の勅により『新撰和歌集』を編纂する。承平四年(934)12月21日、土佐守の任を終えて帰京することに成り、このときの船旅の様子をフィクションとダジャレと皮肉とを交えて『土佐日記』に記している。

『土佐日記』
男もすなる日記といふものを、
女も書いてみる(とて、するなり)。
(男が書いている日記というものを女の私も書いてみる(とて)にする)

この時代の日記は男性官人による公務の記録であり漢文で書かれ、「仮名」は女性や和歌の贈答などに用いられていた。だが、貫之はもっと自由な立場で「仮名」の日記を書いてみたいと考えたのだろうか、自分を女性に託して書き綴っている。以下で、友人たちの盛大な見送りや船内の様子、海賊来襲の恐怖などを記した『土佐日記』の55日間の旅程を見ていくことにする。

三・土佐から京までの旅程
12月21日 戌の時(午後8時頃)に帰京のため国府(高知県南国市比江)を出立する。当時の出立日(吉日や吉方位)は陰陽師が卜占で決めていた。遅い時刻の出発は人目を避けるためか。

12月22日 大津泊(高知市大津戸)。藤原のときぎねからの餞別あり。馬で行くのではなく船で行く旅だが(馬のはなむけ)をす。みな酔っぱらって、海水の側で腐る(あぎる)はずがないのに腐ったように(あぎけ)あざれ(あつて)いる。(あぎる)は魚が腐ると(あぎけ)るの意味で、作者は気の利いた冗談を言う。

12月23日 大津泊。八木のやすのりから餞別あり。
12月24日 大津泊。国分寺の住職から餞別あり。

12月25日 国府泊。国司の館で後任国司（史実では島田公鑿）が催す送別会に出席する。

12月26日 大津泊。前日と同様に国司の館で後任国司のもてなしを受けるが、うわべだけのもてなしに楽しくない様子。

12月27日 大津の港から浦戸に向けて船出する。前国司が土佐国で死んだ娘を懐かしむ。ある人は、土佐は西国なのに東国の甲斐の民謡などを歌う。作者は矛盾を指摘している。この日は浦戸（高知市浦戸）に停泊。

12月28日 浦戸から大湊へ向かう。大湊（高知県南国市前浜）に停泊。山口のちみねから贈り物あり。

12月29日 1月8日まで大湊に滞在することになる。土佐国の医師より贈り物あり。

1月1日 菌固めの餅など、祝いの食べ物がなく土佐名物の押鮎の口を吸う。皆こぞって鮎の口吸い（接吻）をしている。押鮎の方も変な気持ちになっているのだろうか？

停泊。
1月29日 答島を出航し、船上で子の日を迎える。この日には爪を切らない。平安貴族は丑の日に手の爪を切り、寅の日に足の爪を切った。土佐泊（徳島県鳴門市鳴門町土佐泊浦）に寄港する。

1月30日 海賊を避けて夜中に出立し、神仏を祈り阿波の海峡を渡る。沼島を経て、ようやく和泉の灘に至り、海賊の危機を脱する。和泉灘に停泊。

2月1日 黒崎の松原を通る。海岸沿いに船を進めるが、箱の浦から船を綱で曳く。長旅に堪えかねて愚痴を吐く。和泉灘に停泊。

2月2日 雨風が止まず神仏に祈願する。和泉灘に停泊。

2月3日 この日も雨風のため、和泉灘に停泊。

2月4日 悪天候を理由に出航しないが、終日波は風立たず、天候も予測出来ない楢取を罵倒する。港で美しい貝や石を見て、船にいる人は亡き娘を恋しく思う。和泉灘に停泊。

2月5日 和泉灘を出航して小津の泊に向かう。松原が延々と続く風景を切なく思い、住吉では前国司の妻が松を見て亡き娘を偲ぶ。

記すので、作者は男であることがわかってしまう。大湊に停泊。
1月2日 国分寺の住職より贈り物あり。大湊に停泊。

1月3日 風波のため大湊に停泊。
1月4日 まさつらより贈り物あり。風のため大湊に停泊。

1月5日 人々が絶えず見舞いに訪れる。風波が止まらず大湊に停泊。
1月6日 大湊に停泊。

1月7日 「池」という場所に住む女性より贈り物あり。若菜と歌が添えられる。大湊に停泊。

1月8日 さし障りがあって、この日も大湊に停泊する。海に沈む月を見て在原業平の歌「山の端逃げて入れずもあらなむ」『伊勢物語』八二段を思い出す。

1月9日 ようやく大湊を出航。送別の人々と別れを惜しみ、いよいよ沖に漕ぎ出して奈半の泊を目指す。

1月10日 奈半（高知県安芸郡奈半利町）に停泊。

1月11日 奈半から室津に向けて出航。「羽根」という地名を面白がった子供を見るにつけ、前国司の妻が亡き娘を思い出して嘆く。
1月12日 ふむとき・これもち

突然暴風が吹き荒れたので、住吉明神に鏡を奉納する。濡標（大阪湾内の住吉津）に停泊。
2月6日 難波から河口に入り濡標に停泊。

2月7日 淀川を漕ぎ上るが、川の水が少なくてはおどらない。難波江口（大阪市東淀川区）に停泊。

2月8日 鳥飼御牧（大阪府摂津市）に停泊。
2月9日 夜明け前に出立。渚の院（大阪府枚方市渚元町）では在原業平の歌につけて過ぎ去った昔を偲ぶ。

世の中に 絶えて桜の咲かざらば 春の心はのどけからまし
『伊勢物語』第八二段「渚の院」に収録。この日は鶴殿（大阪府高槻市鶴殿）に停泊。

2月10日 鶴殿に停泊。
2月11日 川を遡り、石清水八幡宮の鎮座する男山を眺めながら山崎（京都府乙訓郡大山崎町）に到着する。

2月12日 山崎泊。
2月13日 山崎泊。

2月14日 山崎泊。京へ車を取りに行かせる。
2月15日 船を出てある人の家に移るが、前国司は丁重なもてな

両名の遅れた船が、奈良志津（室戸市浮津奈良師）より室津（室戸市室津）に到着する。20日まで室津に滞在。

1月13日 女たちが水浴をするため適当な場所に降りる。海神を怖れ船内で女は派手な衣は着ない。だが、船を降りたら目隠しにもならない葦の陰で、ホヤに合わせるアワビを思いもかけず海神たちに見せてしまっている。この記述は女の筆とは思えない。室津に停泊。

1月14日 前国司が節忌精進をする。午後は楢取が鯛を釣つてくると、それで精進落としをする。雨のため室津に停泊。

1月15日 小正月なのに恒例の小豆粥を煮ることができず口惜しがる。大津出立から20日余りが経過した。室津に停泊。

1月16日 この日も風波のため室津に停泊になり、早く室戸岬を通過したいと願う。乗船から25日も経ってしまったことを嘆く。

1月17日 未明に出航するが、天候の急変により室津に引き返す。
1月18日 荒波のため室津に停泊。
1月19日 天候が悪いため室津

しに当惑する。任国へ出発するよりに、任を終えて帰るときにのぼうが人々はもてなしてくれるのは任地で富を蓄えてきたと考えているからであろう。山崎泊。
2月16日 山崎を出立する。島坂（京都府向日市上植野町御塔）で、ある人の饗応を受けて夜更けに入京する。当時国司は夜更けに入京の風習があったようだ。自宅に到着すると、想像した以上に荒れ果てていた。（貫之の邸宅は左京一条四坊十二町）帰宅直後の騒々しい中で、前国司夫妻はひたすら亡き娘を懐かしむ。

延喜式の規定では土佐から陸路で租税を運搬する場合、陸路で往路35日復路18日、海路の場合には25日の規定だが、『土佐日記』の復路は55日もかかっている。航海しているより泊地での逗留している方が多いのは風波と海流の不具合や海賊の襲撃を避け航海したからである。当時瀬戸内海やその周辺では海賊が跳梁跋扈していた。

四. 帰京
ようやく危険な旅を終えて、京に帰って来た前国司たちを待っていたのは5年間も放置されたボロ家

に停泊。
1月20日 昨日と同様の理由により室津に停泊。航海がはかどらないことを嘆き、月を見ては阿倍仲麻呂の歌を偲ぶ。

青海原、かりさけ見れば春日なる三笠の山に 出でし月かも（日記では「天の原」を「青海原」に改変）

1月21日 卯の刻（午前6時頃）にようやく室津を出航する。前国司は海賊の報復を心配する。野根（高知県安芸郡東洋町）に停泊か。

1月22日 昨日の停泊地から別の泊を目指す。日和佐（徳島県海部郡美波町）に停泊。

1月23日 海賊襲来の怖れがあると聞いて神仏に祈願する。日和佐に停泊。

1月24日 日和佐に停泊。
1月25日 海賊が追って来るとの噂が絶えない。北風のため日和佐に停泊。

1月26日 海賊の追跡を怖れて夜中に出航。途中、神に幣を奉る。答島（徳島県阿南市津乃峰町）に停泊。
1月27日 風波のため答島に停泊。
1月28日 悪天候のため答島に

停泊。
1月29日 答島を出航し、船上で子の日を迎える。この日には爪を切らない。平安貴族は丑の日に手の爪を切り、寅の日に足の爪を切った。土佐泊（徳島県鳴門市鳴門町土佐泊浦）に寄港する。
1月30日 海賊を避けて夜中に出立し、神仏を祈り阿波の海峡を渡る。沼島を経て、ようやく和泉の灘に至り、海賊の危機を脱する。和泉灘に停泊。
2月1日 黒崎の松原を通る。海岸沿いに船を進めるが、箱の浦から船を綱で曳く。長旅に堪えかねて愚痴を吐く。和泉灘に停泊。
2月2日 雨風が止まず神仏に祈願する。和泉灘に停泊。
2月3日 この日も雨風のため、和泉灘に停泊。
2月4日 悪天候を理由に出航しないが、終日波は風立たず、天候も予測出来ない楢取を罵倒する。港で美しい貝や石を見て、船にいる人は亡き娘を恋しく思う。和泉灘に停泊。
2月5日 和泉灘を出航して小津の泊に向かう。松原が延々と続く風景を切なく思い、住吉では前国司の妻が松を見て亡き娘を偲ぶ。

だった。管理を任せていた隣人が世話を怠ったため、屋敷は言葉に出来ないほど荒れ果てていたのだ。家だけでなく、この家を預けておいた人の心も同じように荒れてしまったのだろうか？と落胆する。そんな屋敷の庭で亡くした我が娘のこのフリをしてまで書きたかったのは亡くした娘に対する追慕の念だったことがわかる。

生まれしも かへらぬものを わが宿に 小松のあるを見るが 悲しき

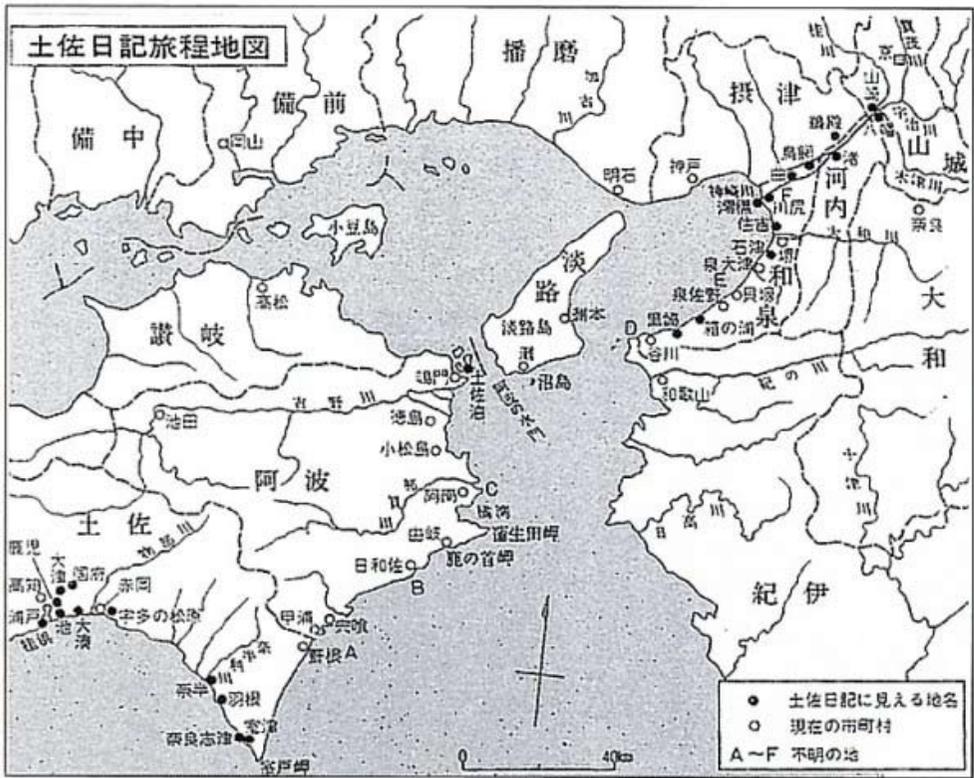
（この家で生まれた娘でさえ京へ帰って来ないのに、わが家に新しく小松が生えているのを見るのは悲しいことだ）

見し人の 松の千歳に見ましかば 遠く悲しき別れせまじや（亡くなった娘が、松のように千年の齢を保つと見ていたならば、永遠の悲しい別れをしたであろうか、そうはならなかったであろう。）
日記の最後には忘れがたく心残りはいなくさんあるが、とても書き尽くすことはできないので、（とにもかくにも、こんな日記は早く破って捨ててしまおう）と記している。

五. おわりに

紀貫之が任国にいた間、中央の庇護者である醍醐天皇や宇多法皇、主従関係を結んでいた藤原兼輔らが亡くなり、帰京しても頼る者がいなかった。だが散位のままではいられず、藤原忠平や実頼、師輔の庇護を受けることになる。やがて朱雀院別当の職に任ぜられるが、正規の官職の玄番頭に就いたのは天慶三年(940)のことである。同六年、従五位下から26年後にようやく従五位上に叙せられた。昇進したのは76歳頃だ。同年には大工権頭に任じられ、ほどなくして世を去った。貫之は紀氏が没落してからも『古今和歌集』の撰者として名をあげ、和歌の道を切り開いて大歌人となったが官僚としては不遇だった。亡くなる直前にこんな悲しい歌を詠んでいる。

手に結ぶ 水に宿れる 月影の
あるかなきかの 世にこそあり
けれ 『拾遺和歌集1322』
(手にすくった水に映っている月影のように、この世はあるかないかわからないような本当に儂い世の中であった)



▲「土佐日記」旅程地図(小学館日本古典文学全集より)



▲紀貫之像(五島美術館蔵)
(14)

〔主な参考文献〕
『土佐日記貫之集』新装版
(新潮日本古典集成) 木村正中
(校注) 新潮社
『歴史から読む土佐日記』
木村茂光(編) 東京堂出版
『土佐日記 全訳注』品川和子
講談社学術文庫
『紀貫之伝の研究』村瀬敏夫
桜楓社

以上

会員研究

大伯皇女 ～二上山に偲ぶ～

その一(移葬) 遠田 千代吉

一 はじめに

二上山は、今日も西に気高くそびえる。今、大津皇子の墓は、この二上山の山頂にあるとされている。このことは、このまま信じてよいのだろうか。時には、人々の抱く心情が積み重なり、あたかも「事実のこと」として語り伝えられ、今に残る。いわば人々の大津皇子に対する同情が、そうあって欲しいという願望となり、いつも眺める山頂に、皇子の奥つ城をおいたともいえる。本稿及び次稿(その二)では、ここに至る経緯を探ってみた。

二 亡骸の移葬

(一) 刑死による埋葬
朱鳥元年(六八六)十月三日、大津皇子は謀反の罪で刑死となった。皇子の身分でもあり、縊死

(註「一」であったとされる。死後亡骸は、どこに葬られたのだろうか。『日本書紀』をはじめ、伝わる史料には、刑死後の埋葬場所

(註「二」についての言及はない。ただ、一般論として言えることは、刑死による亡骸は粗略に扱われ、山中に埋められたということである。大津皇子についても例にもれず、飛鳥近傍の山中に埋められた可能性が高い。誰も近づかない山中の奥深い場所に、黒く土が盛りられ、枯れ葉が降り積もっている情景は、思うだに痛々しい。

(二) 移葬の嘆願と持統皇后の決断
同年十一月十六日、帰京した大伯皇女は、到着後、すぐに、大津皇子の葬られた場所を訪れたに違いない。何もしてやれなかった弟に対する、死後にまで及ぶひどい仕打ちを

埋葬の惨状にみて、悲しみにくれ

ながらも、心に固い決意を固めたと思われる。持統皇后に対する直訴である。大津皇子の謀反事件後、事態の推移を冷静にみていた皇后も、以下にみる諸要因も踏まえ、心を動かしていったと思われる。大津皇子の亡骸を、移葬に至らしめた要因として、次のことが挙げられる。

○姉大伯皇女の嘆願

持統皇后にとって、大伯皇女・大津皇子の母大田皇女は同腹の姉である。謀反により大津皇子を死に追いやったとはいえ、二人とも同じ血族の肉親である。皇子にとっては冷徹な皇位継承上の顛末で不幸な展開となったが、一人残された大伯皇女には、肉親として特別な計らいをしていかねばならない。ましてや、謀反事件の経緯を考えれば、うしろめたさも消えていない。この状況下において、姉大伯皇女から弟大津皇子の丁重な埋葬についての嘆願が出されたものと思う。今の埋葬の、ひどい惨状を、なんとしても変えるという皇女の固い決意が秘められている。ここに皇后は、心を動かされたと思う。

○同情、動揺の鎮静化

謀反事件後、人々の同情は大津

皇子に集まり、一人残された大伯皇女にも注がれた。さらに人心の動揺は、目に見えぬ形で広がっていったものと思われる。事件の一段落した今は、この事態を沈静化させる必要がある。すべてが終わった今、事態の鎮静化のため、なされることは、大津皇子の丁重な埋葬であり、死者に敬意を払うことである。

○太子路線の確立

謀反事件の落着により、草壁皇子の皇位継承にあたっての有力なライバルは消された。事件そのものが、対抗者を消し去ることが目的であったから、その目的を果たした今は、なんの憂いもなく、確立された路線を進むだけである。大津皇子の亡骸の埋葬のやり直しは、何ら支障にならない。

これらの要因を総体としてみると、諸要因のなかで、姉大伯皇女の強い嘆願、働きかけが、持統皇后の心を最も強く動かし、移葬につながったと思われる。

三 移葬を述べる万葉歌

(一) 万葉歌二首

大津皇子の亡骸が、移葬さ

れたことは、万葉集巻第一、一六五、一六六番歌にみる題詞及び歌の内容が裏付けとなっている。

「大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬る時に、大伯皇女の哀傷しびて作らず歌 二首

うつそみの 人にある我れや

明日よりは 二上山を

弟背と我れ見む (一六五)

磯の上に 生ふる馬酔木を
手折らめど 見すべき君が
在りと言はなくに (一六六)

このなかで、「葛城の二上山に移し葬る」が、移葬がなされたことを記し、手折ろうとする「馬酔木」が、移葬のなされた時季を示す。

(二) 移葬のなされた時季

「生ふる馬酔木を手折らめど」は、道すがら馬酔木がきれいに咲いており、手折って、亡き弟に見せてあげたいとの意であり、馬酔木の咲いている時季に移葬が行われた。馬酔木の開花時季は、春三月から四月頃である。ここから推定できることは、前年(旧暦十一月)の皇女の帰京後、持統皇后への嘆願

がなされ、翌春に移葬が行われたと考えるのが常識的と思われる。

(三) 万葉歌二首理解のために

ここでは、万葉歌二首を理解するうえで、必要となる言葉の理解を進めておきたい。

〇一六五番歌

「うつそみの」

「うつそみの」の万葉仮名表記は「宇都曾見乃」である。国語学者の大野晋(註「三」)氏は、上記「うつそみの」の語源は、「宇都志意美乃」にさかのぼり、『古事記』(以下『記』)に、その本来の意義を理解しやすい例があるとされる。

『記』は、下巻雄略天皇条で天皇の葛城山行幸を記す。その途上、一言主神に遭遇する。自己を崇高の権力者として認識していた天皇も、大神を恐れ、大神刀、弓矢をはじめ、百官人の衣服を脱がしめて献上した。このとき、天皇の発せられた言葉は、「恐し、我が大神、宇都志意美、有らむとは覚ざりき」であり、この「宇都志意美」の意味は、神は見えざるものと思っていたが、「この人間世界に形をあらわして見える」の意である。神が目の前に、はつきりと姿をあらわし

見えて、恐れ多く驚愕した言葉である。「うつそみの」は、この「う

つしおみの」が、音韻変化により生じた言葉である。従って一六五番歌の「うつそみの」の意は、「この人間世界に、形をあらわし、見えている」の意となる。なお、この「う

つそみの」は、万葉時代の表現でも古形であり、のちにさらに音韻変化をし、「うつせみの」(万葉仮名空蟬・虚蟬)となる。また、その意義も変化し、「現世、人間世界、世間」の意となっていた。また、万葉仮名の空蟬が、仏教の普及とともに無常観を連想させることから、「世のなか」や「世の人」にかかる枕詞として用いられるようにもなった。一六五番歌にみる「うつそみの」は、枕詞ではなく、実質的な意味を持つ言葉として捉えねばならない。

「弟世・いろせ」

次に「いろせ」は、「いろ」と「せ」の複合語である。一六五番歌の万葉仮名表記は、「弟世」であるが、これを「いろせ」と訓むことに多くの識者が一致している。「いろ」は、「同じ母に生まれた」との意であり、「せ」は男性を呼ぶ呼称である。従って、ここでは「同母の

弟」の意味である。この例証として、稲岡耕二(註「四」)氏は、『記』上巻にみられる、須佐之男命が大蛇退治の時、足名椎・手名椎に名の次の言葉を挙げています。「吾は、天照大御神の伊呂勢なり」。ここで、「いろせ」は、同じ母に生まれた弟としての意に用いられている。

これらを踏まえて考えれば、一六五番歌の現代文解釈は、次の通りとなる。

「この人間世界に、今も生きて姿をもつ人としての私は、移葬のなした姿の見えなくなった弟の身代わりとして、毎日眺めていこう」となり、「有」の皇女と「無」の皇子を対比した、深い意味合いを秘めた歌なのだと思う。

〇一六六番歌

「磯の上に」の「磯」

今は「磯」の字から、海辺の岩場を連想するが、古義では、山あるいは、小高い丘の「縁の、岩・石の転がっているところ」の意味もある。従って、ここでは道の辺の、岩・石が混じり合って、のぞめる山の斜面と考えるべきである。通りすがりに、この「磯」に、可憐に咲

く馬酔木が見えたのである。

「在りと言はなくに」

古代には、死者に逢ったことを述べて縁者を慰めてやる習慣(註「五」)があった。

悲しみに沈む縁者に向かい、「亡くなった誰それは、向こうの山の間にいる」、あるいは「誰それに、その野辺で逢った」といい、慰め元気づけるのである。しかし移葬が果たせた今も、罪人として刑死した弟をおもんばかって、誰も、皇女にこの慰めの言葉をかけてくれない。

「在りと言はなくに」は、皇女をとりまく、この寂寥感を詠っているのである。

これを踏まえて、一六六番歌の現代文解釈は次の通りとなる。

「進む路すがら、岩の目立つ斜面に、可憐に馬酔木が今を盛りと咲いている。この花を手折り、今は眠る弟に見せてあげたい。でも、その弟がこの世にいと、周りの誰もが言葉をかけてくれない」。私は、春に、可憐で小さな花房を、ひっそりと垂らす馬酔木を目にする度に、大伯皇女に思いを馳せるのである。

四 二上山

大津皇子の亡骸の二上山への移葬の詳細に入る前に、二上山の理解が必要である。

(一) 二上山への畏敬

人は誰も秀麗な山に畏敬の念を抱く。古来、大和に住む人々にとつても、二上山は特別な存在である。和田萃(註「六」)氏は、このことを次のように叙述している。

「奈良盆地の周縁をめぐる青垣の山々は、日頃見慣れた心安らぐ景観である。中でも、とりわけ東の三輪山と西の二上山の山容が秀麗で、人々の心を捉えて離さない」

ここにみるように二上山は、大和に暮らす人々が、西に畏敬の念をもつて毎日仰ぎ見る山となっているのである。

(二) 山容と創成

二上山は、奈良県と大阪府の府県境にある。標高五一七mの雄岳と四七四・一mの雌岳の二峰からなり、たおやかな姿態を見せる山である。このように雌雄二峰が相並ぶ姿であることから、男女二神が籠りいることを連想し、二上山を神聖視する観念が生じた。

二上山の特性は、山の創成が火

山活動によることである。この火山活動により創成された山としては、地域唯一の山である。もっとも二上山を創成した火山活動(註「七」)は、一三〇〇万年も前の、とほうもない昔のことであり、今の山容は、その後の侵食や地殻変動により形作られ、残ったものである。このように、二上山は火山活動により創成された山であるから、二上山には「サヌカイト」、「凝灰岩」等の、火山特有の石材資源が見いだされ、歴史的にも重要な役割を果たすことになる。

(三) 石材の産出

二上山は火山特有の石材を産出した。歴史上重要な役割を果たしてきた。

①サヌカイト

「サヌカイト」は、地下から地表に噴出したマグマが急冷してできた火山岩(噴出岩)である。色は黒く、非常に緻密で硬く、割れると光沢のある鋭い断口(割れ面)をみせるので、旧石器時代から黒曜岩(通称・黒曜石)とともに打製石器の石材として利用(註「八」)されてきた。

このサヌカイトは、二上山全域で

採掘できるということではなく、サヌカイトが生成されて、包蔵地となっている北西麓の「春日山一帯」と「石マクリ」地域に限定される。同地域には、二上山北麓遺跡群が、採掘・石器工房として点在し、旧石器時代から弥生時代に至る、重要な採掘場としての歴史を物語っている。日本列島において、サヌカイト産地は限られており二上山、香川県金山、佐賀県鬼ノ鼻山のみである。黒曜石産地(北海道・長野和田峠・伊豆箱根・九州)とともに、二上山は石器石材の供給地であったのである。

②凝灰岩

火山の爆発的噴火にともない火砕流が噴出する。この火砕流堆積物が固まった岩石が凝灰岩である。凝灰岩は岩石の中でも、採掘・加工が比較的やりやすい岩石である。この特性から墳墓の造成に利用され、石室・石櫛・石棺材として多用されてきた。二上山は飛鳥にも近く、そこに産する凝灰岩が、地域一帯の古墳造成の素材として利用されてきた。

この凝灰岩も二上山全域で採掘できるわけではなく、火砕流堆積層の残る北西山麓地域に限られる。岩

屋越えの峠の頂上の「岩屋」、さらに西に下った「鹿谷寺跡」は、飛鳥時代の石切場跡であり、凝灰岩の採掘場であった。

ここにみるように、二上山は石器古墳材と、時代を異にするとはいえ、ともに石素材の重要な供給地であった。

(四) 山の信仰

二上山の雄岳山頂には「葛木二上神社」が鎮座している。延喜式内社の葛木二上神社二座にあてられる古社である。古来、信仰の対象として崇められ、近世以降は「ダケの権現さん」として近在の信仰を集めている。このダケの権現を郷社として信仰する地域を「ダケ郷」と称している。このダケ郷には、毎年春四月二三日、人々は弁当を携えて山に登り、一日遊樂を尽くす「ダケのぼり」の習俗(註「九」)が残っていた。

また、二上山は大和から見れば、西方の日の入るかたにあり、落日も美しいことから、二上山と西方浄土が結び付けられやすい。しかしながら西方浄土信仰は、平安時代以降に生じたものであり、七世紀後半の飛鳥時代には、二上山と

西方浄土信仰は結び付かない。

五 おわりに

大津皇子は、この二上山の「地」に移葬された。以降、その「地」とは何処なのか、探っていききたい。

—了—

「註」

「一」香芝市教育委員会

『大来皇女と大津皇子』

香芝市二上山博物館

二〇〇一・九

「二」唯一『日本古代氏族人名典』

(吉川弘文館)には、「大津の

亡骸は、初め本薬師寺跡の地に

葬られ、後に葛城の二上山に

改葬された」と見える。

田村吉永氏は、薬師寺は二度

引越したと主張され、

浄御原宮に近い雷廃寺跡↓

藤原京の薬師寺跡↓

平城京現薬師寺である。

人名事典にいう本薬師寺跡が、

ここにいう浄御原宮に近い

雷廃寺跡であれば、一つの可能性として考えられる。

「三」大野晋「うつせみの語彙に就いて」『文学』

一九四六・一〇 岩波書店

「四」稲岡耕二「弟世と伊呂勢」

『萬葉』第五九号

一九六六・四

「五」伊藤博『萬葉解釋注一』

集英社文庫 二〇〇五・九

「六」和田萃「大津皇子の墓」

『鳥谷口古墳・調査報告書』

檀原考古学研究所 一九八三

「七」佐藤良二『サヌカイトに

魅せられた旧石器人 二上山北

麓遺跡群』新泉社 二〇一九

「八」「七」に同じ

「九」「六」に同じ

会員研究

司馬から忌むべき存在と名指しされた男

榎 良生

一. はじめに

長崎県の島原半島は有明海に向かつてげんこつを握ったような格好をしている。その中央には雲仙岳が噴出し、東海岸には島原市の街並みが広がっている。戦国時代にキリシタン大名の有馬晴信が支配していたころ、口之津には南蛮船が来航し、有馬にはセミナリヨ(神学校)が建てられて伊東マンショたちが学んでいたのであった。やがてキリシタン弾圧が始まると、晴信は追放されて新たな領主には大和から松倉重政が移封されてきた。彼は島原築城のために重税を課し、彼の死の七年後、寛永十四年(1637)十月に未曾有の大

一揆(島原の乱)が起こったのであった。二代目藩主勝家も苛政を続け、あまりの重税にたまりかねた農民達が立ち上がったのである。旧有馬藩の牢人を中心に天草四郎を盟主に仰いで、天草の一揆勢と

も合流して三万七千もの人々が原

城に立てこもった。幕府軍十二万に囲まれながらも良く善戦し、三か月の籠城ののち、翌寛永十五年(1638)二月二十八日ついに落城し一揆軍は全員殺害されたのであった。

島原名物の具雑煮(ぐぞうじ)は一揆軍が保存食の餅と魚、野菜を鍋で炊いて籠城に耐えたことに始まると伝わる。また、島原の乱後に人口が激減した半島に西国諸藩から移民を奨励したが、天領だった小豆島の人たちは半ば強制的に移住させられた。彼らが故郷で覚えた技術を生かして作り始めたものが、須川(すかわ)素麺である。冬に簾のように天日干しする風景には悲しい歴史が秘められていたのである。乱後に藩主松倉勝家は責任を問われて斬首となったが、大名が切腹ではなく一介の罪人として処断されたのは江戸時代を通して

でもこれ以外にはない。このような大乱を引き起こしたのは、父である重政にむしる原因があると思われる。これについて司馬遼太郎は『街道をゆく17島原・天草の諸道』の冒頭に「日本史のなかで、松倉重政という人物ほど忌むべき存在はすくない。・・・(中略)・・・愚かな息子とともに島原の乱を引き起こす原因をつくるにいたる。」と手厳しい。一方で、故郷・大和ではこれとは別に高い評価もあり、今回は大乱の七年前にその生涯を閉じた彼に焦点をあてて、従来のイメージに左右されることなく、その本当の姿を追ってみたいと思う。

二. 重政の生涯

それでは重政の生涯をざっと辿って行くことにしよう。彼は天正二年(1574)、大和の戦国大名筒井順慶の家老、松倉重信の長男として生まれた。筒井氏は興福寺一乗院の「衆徒(しゅと:僧兵)」で、これを束ねる「官符衆徒(かんばんしゅと)」であり、このころにはすでに強大な軍事力を持つ戦国大名となっていた。重信は右近とも呼ばれ、のちに石田三成を支え

た島左近とともに順慶を補佐していたのである。順慶が天正十二年(1584)、三十六歳の若さで病死すると、甥の筒井定次が跡目を継いだが翌年、伊賀・上野に転封となった。文禄二年(1593)、父の重信死去に伴い家督を継いだ。この時二十歳であった。慶長五年(1600)、関ヶ原の戦いで単身井伊直政隊に加わり、家康に認められて筒井定次の改易処分(慶長十三年)にあたり、大和の五条二見の城主として一万石を拝領、大名に取り立てられたのである。五条には八年ほどいたが、城下町の振興をはかり、五条市発展の基盤固めとなった。

慶長二十年(1615)大坂夏の陣では道明寺の戦いなどで軍功を認められて、元和二年(1616)、有馬晴信の旧領の肥前日野江に四万三千石に増加の上転封となった。元和四年(1618)、日野江城と原城を廃して新たに島原城の築城を開始した。廃城にする二つの城から石垣などを運ばせて七年後、寛永二年(1625)に島原城は完成した。破風などの飾り気こそないものの、五層の天守を抱く十萬石クラスの



大名の城にも勝るとも劣らないもので、領民の窮乏は推して知るべしであった。この年、三代將軍家光からキリシタンの取締りが手ぬると叱責されると、黙認から一転して残忍な拷問、処刑を積極的に推進したとされる。さらには幕府の歡心を買うためにキリシタンの拠点であるルソン島の攻撃を提案して、先遣隊まで出しているのである。その船が長崎を出航した直後、小浜温泉で急死したのであった。時に寛永七年（1630）十一月、享年五十七歳、死因は不明で暗殺されたとも伝わる。

三・重政の島原治政

それでは、重政の評判を大いに落とした島原の治政について検証していこう。島原城築城の経緯は先に述べたとおりだが、当時の島原について触れておく必要がある。有馬晴信は甲府へ追放されたが、重政の前に一旦この地は嫡男の直純に与えられた。父の晴信とは折り合いが悪く、家康に仕えていたこともあって彼自身はすでに棄教していたのである。しかし、キリシタンの弾圧が強まる中で父が熱心なキリシタン大名であったこともあり彼

はその立場には苦慮したのである。そのあたりを幕府が鑑みたら否かは不明だが、彼には加増の上日向・延岡に転封したのであった。その際には多数のキリシタンの家臣団は帰農して、延岡へは向かわず残留の道を選んだのである。これが後の島原の乱では一揆軍の中核を形成することになる。このような領地を治めるにはどのような人物が相応しいのか、幕閣もいろいろ考えたに違いない。重政の一旦決めれば、がむしやらにでも突撃してゆくような生真面目なところを評価されたのではあるまいか。

また、重政の時代に残忍な拷問がなされたと言われる。「穴吊り」という手法が編み出されたのもこのころであったらしい。後にフェレイラ神父は棄教し、中浦ジュリアンは殉教した。この陰惨な刑罰も元はと言えば「キリシタンに手ぬるい」と家光が重政を叱責したことが、信徒が苦しみ耐えかねて「転ぶ」ことを期待してのことだった。幕府へのアピールとしてルソン遠征としたところでこの男は舞台を降りた。後の人は彼を苛政を敷いた

大悪人と評するが、大乱勃発まではまだ七年もあったのである。若い勝家には酷だったが、重政が生きていれば農民と牢人を切り離し、婦女子や子供達までが立て籠るような無謀なことは避けられたのではないかと思うのである。

四・五条と島原から見えるもの

奈良県南部吉野川の流域に五条市が位置する。五条は大和と紀伊を結ぶ交通の要衝で伊勢街道、紀州街道の宿場町として発展した。旧新町筋は旧紀州街道の面影を色濃く残している。この界限は重要伝統的建築物群保存地区に指定されており、1kmにわたり白壁・堅格子の家並が美しい。その街道の西の入口・西方寺に「松倉豊後守重政の墓碑」がひっそりと佇んでいる。この台座の碑文に次のように刻まれている。「去る慶長十五年の冬、新町の諸税を免除していたが、その後天下公認となり、感謝のためこれを建てます」と。

また、同地では今でも「豊後様」、「豊後祭り」と称してその遺徳を高く評価しているのである。

今に伝わる名君と稀代の暴君、二つ顔を持つ重政とはどのような

人物だったのだろうか。最近亡くなった歴史作家の半藤一利さんがその著書に「歴史には意志がある。歴史の流れの中である一つの意志が働いて、こういう時にはこういう人がいいという適任者を用意することがある」と述べている。日本全体が鎖国に向かおうとするこの時期に、適任者に選ばれたのが外でもない重政だったのではあるまいか。関ヶ原や大坂の陣を生き抜いたこの男でなければ、小西・有馬の残党が蠢くこの地は治められぬと「歴史」が判断したのでだろう。しかし、そこに誤算があった。彼自身の寿命が先に尽きてしまったのである。

我々はともすれば人を善人と悪人というような単純な評価をしがちである。しかし、大抵は次の時代の人が前の為政者をわかりやすく悪役に仕立てる。重政も忌むべき存在になってしまった。その当事者が生きた時代と置かれた環境を想像して、同じ目線に立つてなぜそのような行動になったのか、ということを検証してゆくことが肝要である。良い悪いではなく、これまでの評価に捉われず真贋（しんがん）をしっかりと見極めることが

大切であろう。そして、そこから将来にも役に立つ何らかの教訓を得ることこそ、歴史を学ぶ者の勤めではあるまいか。

重政のあと、五条は天領となり後に代官所が置かれた。二百年後の文久三年（1863）年八月十七日、尊攘派の天誅組（てんちゅうぐみ）は土佐浪士の吉村寅太郎に率いられた孝明天皇の大和行幸に先立って、倒幕の兵を挙げて五条代官所を襲撃した。ところが、翌八月十八日、京都で政変が起こり公武合体派が政権を掌握し尊攘派公卿が失脚する。一夜にして彼らは「暴徒」とされて追討を受けることになり、各地転戦の後九月末には壊滅したのである。維新の夜明けまで、わずか四年のことだった。

（以上）

【参考文献】

「街道をゆく17 島原・天草の諸道」（司馬遼太郎著・朝日文庫）
「街道をゆく24 近江散歩、奈良散歩」（司馬遼太郎著・朝日文庫）
このほか、ウィキペディア、島原市、五條市のHP等の資料を参考にした

松倉重政像（ウィキペディアから）



島原城（ウィキペディアから）



五条新町（ウィキペディアから）



歴シル 鎌倉室町400

1582年(天正10年)「信長本能寺の変で自刃」

千山の鉢に(1382)相国の花を盛る <義満相国寺の造営開始>

◆南北朝時代 弘和2年(永徳元年) 壬戌 第98代長慶天皇(第6代北朝:後小松天皇) 3代将軍足利義満



完成までに十年かかったとされる。義満は南禅寺を京都五山の上に据え、相国寺を天龍寺に次いで第二位とした。また寺に禅宗寺院の人事管理権を持たせるなど純粋な宗教的役割以外に義満の権威を誇示するための象徴とした。伽藍には焼くし現存しないが当時は最も高い七重の塔(109m)が天皇の御所を見下ろしていた。応永6年(1399)の相国寺七重大塔供養では全僧官、廷臣が北山第に集合し、関白以下全員が土下座する中を義満は天皇の皇子らを従え相国寺に向かった。

公武権力掌握の序章「義満の権威の象徴」相国寺。この年初め足利義満(25)は左大臣になる。そして後円融天皇(25)を譲位させ、後小松天皇(6)が践祚する。義満は後円融上皇の院の別当となり、幼い天皇の後見役となる。後円融上皇による院政とは名目に過ぎず、公家社会の実権は義満が握る。この左大臣の位を中国では相国と呼んだ。禅に傾倒する義満は室町第の東、土御門内裏の北側に相国寺(臨濟宗)の建立を始める。



夏は勅使門前の放生池に蓮の花が咲く

私がこの国をお相(たす)けします
足利義満

費用は鉢に(1482)東山山荘の金集め <義政東山山荘の造営開始>

◆室町時代 文明14年 壬寅 第103代後土御門天皇 9代将軍足利義満

土岐成頼 1000貫
山名政豊 2000貫
赤松政則 3000貫の寄せ集め、翌年遣明船来日
4000貫(貿易であげた利益)



足利義政

荒廃した京に浮き世離れの別世界を造営。足利義政(47)が政務を嫌い、隠居所とした東山山荘の造営が始まる。場所は応仁の乱で消失した浄土寺の跡地(墓地)。完成は延徳2年(1490)義政が死去するまで長期に渡った。建設費は「山荘要脚段銭」という臨時課税で賄う予定だったが、国々の財政はどれも苦しく、徴税は思うようにいかなかった。そこで大寺大社、公家や豪族の荘園から強引に役夫を駆り出し、また用材の調達も行った。
*義尚に政務を任せられたが実権は握っていた

強引な金集めと資材の強奪

1貫文は現在に換算して約10、15万円に相当。義政夫人として財を成した日野富子の遺産は7万貫で70億円になる。その他閑所を通行する人馬から関銭、酒屋や土倉など、洛中の富商、金貸しから応分の寄附を求めるなど民衆から掻き集めた資金を湯水のごとく費やした。
文明16年、等持院から多数の松樹を移植する際、院の壁と廊下を破壊し、文明18年には奈良長谷寺から多数の檜樹を移植、京都東寺からは大量の蓮、金閣寺の庭石など、京や南都の邸宅・寺院からの徴収はその後も横暴を極め、各所から猛反発を受け続けた。

◆3月河内守護の細川政元は畠山政長と共に河内を実行支配する畠山義就討伐に出兵。7月政元、義就と講和。
◆享徳の乱終結へ11月足利義政、古河公方足利成氏講和。

時代狂句 このたびは銭も取りあえず東山よりどりみどり子の意のままに

狂句/上州遊山

()数字はその年の年齢(数え歳)

82 花を飾り/資金を集め 歴シルキーワード 鉢に盛る

日々鉢に(1182)集めし平家兵糧米 <大飢饉の中 膠着状態の源平合戦>

◆平安時代 寿永元年(養和2年)* 壬寅 第81代安徳天皇 <院政> 後白河法皇

*5月27日に改元(源氏は前養和、新元号も用いず治承6年)



前年に続き飢饉は全国的に広がっていた。世の中は戦どころではなく、源平共に兵糧不足で大規模な軍事行動をとることができなかった。危機感を募らせる平家は院宣を下し、諸国の荘園から兵糧米を集めて戦いの準備を始める。一方、鎌倉の頼朝は翌年朝廷に年貢を納めることで、東国の支配を認めさせた。

源平合戦と兵糧について
当時の戦の兵糧は現地調達原則だった。2年後、再び西下する平家を迎え撃つため長門へ先乗りした源範頼は折からの食糧難もあり調達に苦渋した。頼朝に食糧支援を要請するも届かず、兵の戦意は落ち、部下への求心力も失い、離脱する者も多かった。九州に渡り、親平家の勢力と戦う間に、壇の浦の戦いが始まり、義経に功を奪われる。

洗足日蓮鉢に(1282)慰安の手水花 <法華宗日蓮 武蔵池上に死す>

◆鎌倉時代 弘安5年 壬午 第91代後宇多天皇 7代将軍惟康親王 8代執権北条時宗



洗足池に日蓮等が休息した御松庵がある。

現実変革の主体となる法華経至上主義を貫く日蓮(61)が唱えた法華宗(日蓮宗)は彼岸浄土への往生願望の強い浄土教と異なり、現実社会への能動的な働きかけの強い宗派であった。「立正安国論」(1260年)を五代執権北条時頼に上程し、法華経以外の諸教を徹底的に批判、排除するなど急進的な布教ゆえに数々の法難を受けた。この年10月、隠棲していた身延山を出て常陸へ湯治に向かうも、武蔵池上で力尽き息を引き取る。*1日蓮に付き添った6人の本弟子「日昭、日朗、日興、日向、日持、日頂」は、師の教えを各地に広めるよう託される。

日蓮を受入れなかった時宗が建立「円覚寺」
禅宗に帰依する北条時宗(32)は文永・弘安の戦死者を弔うため無学祖元(57)に円覚寺(鎌倉五山第二位・臨濟宗)を開山させる。座禅によって己の悟りを開く「自力本願」は武士に相応しい教えとして鎌倉幕府の祈願所として発展する。



舍利殿
塔頭・正統院にある入母屋造、柿葺き、室町期建立の国宝建造物。堂内中央に源実朝が南宋から請来した仏舍利を安置した厨子がある。

《開宗後から法難》
⑦1260年 39歳「立正安国論」を述作。幕府や批判僧侶等により恨まれ鎌倉松葉ヶ丘の草庵焼打ちに会う
⑧1261年 批判者の讒言により伊豆へ流罪
⑨伊豆放免後、安房天津で地頭の軍勢に襲撃される小松原法難
⑩1271年幕府・諸宗批判で捕縛。龍口の処刑を免れ佐渡流罪
⑪1274年佐渡放免、鎌倉へ
⑫鎌倉で受入れられず身延山へ
⑬1282年身延を下山



《誕生から開宗まで》
①1222年 安房郡小湊に誕生
②1233年 天台宗清澄寺で仏行、学問に励む
③1237年16歳、同寺で出家
④1238年鎌倉遊学4年 念仏及び禅を修行
⑤1242年清澄寺へ帰還後、比叡山に遊学
⑥1253年 32歳、清澄山で立教開宗。日蓮を名乗る。辻説法を始める。

*1日蓮の死「やせやまい」を患い武蔵池上洗足池で歩を休めた後、日蓮に帰依する同地居住の武士、池上宗仲の館で終焉を迎える。(24)

*2別当…元は律令下での政所長官の意。義満は源氏長者として貴族子弟の「大学」である契学院・淳和院の「学長」=別当を兼任した。(25)

時代狂句 珍しき戦法ここにありたるや共に倒れる兵糧攻め

監修 高尾 隆

会員研究

『もうひとつの古代史』逸文②

「孝靈天皇Ⅱ倭国大乱」論 忌部 守

1 大和国黒田の桃の木

「欠史八代」という言葉がある。初代神武天皇に続く、第二代綏靖天皇から第九代開化天皇までの八人の天皇については、『日本書紀』に天皇の事跡が記述されておらず、和風諡号にもこの時代にはあり得ない。「大日本」や「根子」などの称号が使われていることから、この八人は実在しない架空の天皇であると考えられているのである。

本当だろうか？ 本当に天皇の事跡が語られていないかここで検証してみたい。まず、『日本書紀』よりも古い記録を残している『古事記』を見てみると、実は重要な事跡が語られている「欠史八代」の天皇が存在する。第七代孝靈天皇である。

「大吉備津日子命と若建吉備津日子命とは、二柱相副(たぐ)いて、針間の氷河の前(さきは)に忌登(いそのみ)を居(す)えて、針間を道の口として吉備国を言向(ことむ)け和(やわ)したまいき。故、大吉備津日子命は、吉備の上つ道臣の祖なり。次に若日子建吉備津日子命は、吉備の下つ道臣、笠臣の祖なり。」

これは、とても重要な情報だ。今までの研究者は、この重要な情報を無視してまともに検証すらしない。内容は、孝靈天皇の二人の皇子が播磨の国の氷河(ひかわ)で瓶(かめ)を使った神事を行って、播磨の国から吉備の国に入つて平定した。この結果、大吉備津彦は上道(かみつみち)臣の祖となり、弟の若吉備津彦は下道(しもつみち)臣や笠臣の祖先となった、というのである。実は遣唐使で有名な奈良時代の吉備真備も、もともと下道氏だった。

大和である吉備の国が分割された備中国の国造(のちの郡司)の

わいべ)を居(す)えて、針間を道の口として吉備国を言向(ことむ)け和(やわ)したまいき。故、大吉備津日子命は、吉備の上つ道臣の祖なり。次に若日子建吉備津日子命は、吉備の下つ道臣、笠臣の祖なり。」

これは、とても重要な情報だ。今までの研究者は、この重要な情報を無視してまともに検証すらしない。内容は、孝靈天皇の二人の皇子が播磨の国の氷河(ひかわ)で瓶(かめ)を使った神事を行って、播磨の国から吉備の国に入つて平定した。この結果、大吉備津彦は上道(かみつみち)臣の祖となり、弟の若吉備津彦は下道(しもつみち)臣や笠臣の祖先となった、というのである。実は遣唐使で有名な奈良時代の吉備真備も、もともと下道氏だった。

大和である吉備の国が分割された備中国の国造(のちの郡司)のわいべ)を居(す)えて、針間を道の口として吉備国を言向(ことむ)け和(やわ)したまいき。故、大吉備津日子命は、吉備の上つ道臣の祖なり。次に若日子建吉備津日子命は、吉備の下つ道臣、笠臣の祖なり。」

これは、とても重要な情報だ。今までの研究者は、この重要な情報を無視してまともに検証すらしない。内容は、孝靈天皇の二人の皇子が播磨の国の氷河(ひかわ)で瓶(かめ)を使った神事を行って、播磨の国から吉備の国に入つて平定した。この結果、大吉備津彦は上道(かみつみち)臣の祖となり、弟の若吉備津彦は下道(しもつみち)臣や笠臣の祖先となった、というのである。実は遣唐使で有名な奈良時代の吉備真備も、もともと下道氏だった。

2 吉備国中山の桃太郎

吉備、現在の岡山県には、大吉備津彦(五十狭芹彦)と稚吉備津彦を祭神とする式内社・吉備津神社が存在する。本殿は、応永三十二年(一四二五)の遷宮に使われたもので現在は国宝になっている古社だ。桃太郎と温羅伝説もこの吉備津神社の鳴釜神事に関係している。

したがって、『古事記』によれば、孝靈天皇は二人の皇子を吉備に派遣して侵攻しており、その吉備にはその後、皇子を祭神とする神社が存在するという事になる。

吉備津神社の「吉備津宮縁起」による温羅(うら)伝説とはこうだ。吉備冠者と呼ばれる温羅は、鬼ノ城という山城を築いて人々を襲い物を略奪したので、朝廷に討伐を訴えた。

孝靈天皇の皇子、五十狭芹彦命(大吉備津彦)を派遣したが、命(みこと)は吉備中山に陣を築いて鬼ノ城に対峙して、片岡山に石の橋を築いた(橋築)。温羅に矢が当たり足守川に落ちたが、温羅

家柄だ。上道臣や下道臣の存在は確認できるが、従来は、その祖先伝承に過ぎないと考えられてきた。では、大吉備津彦と若吉備津彦の二人の皇子は実在したろうか。次節で詳しく検証する。

次に、『古事記』より後に完成した『日本書紀』に、この記事が収録されたろうか。「妃(みめ)倭国香媛、倭迹迹日百襲姫命・五十狭芹彦命、亦の名は吉備津彦命を生む。亦妃(みめ)緬某弟、彦狭嶋命・稚武彦命を生む。弟稚武彦命はこれ吉備臣の始(は)りなり。」

『日本書紀』には吉備の国の平定の話はなく、皇子の名前だけであるが、二人の皇子が吉備に関係しているという事だけは分かる。吉備の国平定の記事を削除しているのだが、実は三代後の崇神紀を読むと削除された理由が分かる。それは、有名な四道將軍派遣の話に関係している。崇神紀によれば、四道將軍のうち吉備津彦を西道(にしのみち)に派遣しているが、第七代孝靈の皇子を三代後の第十代崇神が派遣することはあり得ない。さらに、孝靈紀の二人の皇子には西道の一つである吉備の名前

は今度は鯉に化けたが、命は鵜に化けてその鯉を捕らえた。温羅は誅殺され、その首が髑髏となって喰り続けたため、命は髑髏を吉備津神社の釜殿の地下深くに埋めたが、十三年の間喰り続けたという(※2)。なお、吉備中山の北麓から平野部にかけて吉備津と呼ばれているが、足守川の河口に湊(津)があり、この辺りは吉備の交通の中心地であったと考えられている。

この温羅伝説は、とても興味深い。二世紀頃のヤマト(神武王朝)は大和国を中心に精々近畿地方を抑えていた程度であり、吉備がヤマトの朝廷に討伐を要請したのではないかと、実際はヤマトが吉備を侵略し、攻撃したのが事実だろう。孝靈天皇と大吉備津彦らがヤマト側であり、温羅らが吉備の有力者であったと考えられる。ヤマトの攻撃に対して吉備勢力の抵抗は強く時間が掛かったと思われるが、最終的にはヤマトが勝利して吉備を支配した事を示す伝承だろう。

したがって、この時代にヤマト(神武王朝)はやっと吉備を攻略した程度で、邪馬台国がヤマトにあって北部九州の伊都国に一大率を置いて西日本全体を支配するのはとて

があるのであるから、吉備津彦とその弟は、孝靈朝に既に吉備に派遣されていたと考えるのが自然ではないだろうか。四道將軍の話は、崇神朝の段階で全国を統一したという潤色に他ならない。『日本書紀』特有の史料改ざんの一つの事例だ。

さらに、『古事記』の崇神紀では、四道將軍の話ではなく、吉備津彦を除くもともと三道將軍の話であったこともその傍証になる。以上の史料批判だけを以ってしても、崇神天皇を実在、孝靈天皇を架空と考えるのがおかしいことはお分かり頂けるだろう。研究者は、無批判に崇神天皇による四道將軍の話を信じる事と引き換えに、「欠史八代」の吉備国攻略の記述を無視している事になるのだ。吉備で何が起こったかについては次節で詳しく検証する。

さて、孝靈天皇の宮は何処にあったろうか。「皇太子、都を黒田に遷(うつ)す。これを盧戸(いおと)宮という。」

とあり、現在の奈良県磯城郡田原本町黒田に比定されている。田原本町には、多神社という古社もあるが、黒田には現在、庵戸神社とも無理だという事が分かる。いざ、大陸から玄界灘が攻撃されて、ヤマトから航海の難しい瀬戸内海を越えて援軍を出すことなど不可能だ。やはり、邪馬台国は北部九州にあらねばならず、畿内大和では有り得ないという傍証にもなる。

ここで、孝靈天皇は一体どの時代に生きたのかを確認して置きたい。『もうひとつの古代史』の神功皇后論において二倍年歴の手法を使って、各天皇の時代を推定したが、孝靈天皇は二世紀中頃の人間だ(※3)。太田晃氏によれば、具体的に126〜163年になる。

一方、『後漢書』東夷伝によれば、桓帝(147〜167年)と靈帝(168〜188年)の間、すなわち二世紀中頃から後半に掛けて「倭国大乱」が起きたと記述しており、まさにその時代に孝靈天皇は活躍した。この孝靈天皇による吉備侵攻は、「倭国大乱」の一事件の可能性が高い。もちろん、この時代であれば、孝靈の実像は天皇でも大王でもなく、「大日本根子」の後代の称号を削除した「太瓊(ふとに)彦」とでも呼ばれていたヤマトの王に過ぎなかったであつたら

う。

また、三世紀の前方後円墳の起源を語るときに、吉備の楯築古墳などの吉備文化の影響が大和盆地の古墳に見られるという指摘がよくなされるが(*4)、二世紀中頃にヤマトの王により吉備が侵攻され、それがヤマトにもたらされたと考えれば、それは当然であるという事になる。

吉備津神社の西、足守川を越えた先に楯築古墳(正確には弥生墳丘墓)があるが、中央の円丘の両側から二つの突出部があつて全長約八十メートルの規模で大和盆地の前方後円墳の先駆けと考えられている。さらに、古墳上に置かれる円筒埴輪の起源とされる弧帯文を持つ特殊器台も発掘され、特殊器台から円筒埴輪へ変化する過程も明らかにされている(*5)。

ところで、中央の文献史料では吉備への侵攻までしか分からないが、さらに中国地方の伝承によれば孝霊天皇は吉備を足掛かりに、北隣の伯耆の国まで侵攻したことが分かる。

ここでは、孝霊天皇が吉備に侵攻したこと傍証として、伯耆の国における伝承を紹介したい。

日本「や「根子」などの称号が使われていることから、八人の天皇は実際には存在せず、天皇の系図を古く見せるために創作された架空の天皇だと考えられている。

確かに、初代神武天皇が紀元前七世紀頃に即位し、ほとんどの天皇が百歳以上生きたと『日本書紀』に記述されていれば、「欠史」と考えられるのも無理はない。しかし、筆者は『もうひとつの古代史』の神功皇后論の中で、『魏志』の裴松之(はいしやうし)の注「その俗正歳四時を知らず、ただ春耕秋収を記して年紀となす」ことから、もともと半年の記録を一年に引き伸ばして『日本書紀』は記述したために、時間の長さが倍になったのであり(二倍年歴)、神武天皇の本来の即位時期は紀元前一世紀頃であり、天皇の寿命も長くて六十から七十歳程度である事を明らかにした。朝鮮半島の三韓の国々の前身も、大体この頃に国の原形が出来ている。

そう考えると、いわゆる「欠史八代」の天皇も実際の在位は、一世紀から三世紀前半であり、卑弥呼の時代の直前の時代という事になり、中国史書や考古学的知見とも

伯耆の国の名山・大山の寄生火山、すなわち大山の噴火で新たに出来た火山に「孝霊山」がある。

なぜ孝霊山と呼ばれるのか。それは、この山(標高七五二メートル)の東麓に鎮座する高杉神社の祭神に孝霊天皇が祀られているからである(*6)。

筆者もここを訪れて祭神を確認した。もちろん、孝霊という漢風諡号は後の時代のものであるから、もともと、太瓊(ふとに)彦の伝承があつたということであろう。

興味深いことに、この高杉神社の北西方向の晩田山丘陵(標高九十九〜一五〇メートル)の尾根上に、有名な妻木晩田(むきばんだ)遺跡が発掘されている(*7)。弥生時代後期を中心とする大規模高地性集落だ。筆者も訪れたが、洞ノ原地区の高台から見ると日本海は圧巻だ。

この遺跡は、発掘土器などから一世紀前半に始まり二世紀いっぱいまで続いたと考えられ、孝霊天皇と同時代のものである。この西伯耆では、弥生中期後葉から古墳時代前期にかけて、集落立地の高位化がみられ、住居跡も地下部分を深くして、上部構造を低くする、

いわゆる「隠れ住む」ようになり、「倭国大乱」を彷彿とさせる緊張関係があつたと想定されている(*8)。

さらに、この孝霊山の西南、出雲の国に接する日野郡の日野川水系に沿って孝霊天皇を祭神とする楽々福(きさきふく)神社が四社程分布する。日野郡日南町宮内に東西の楽々福神社、日南町印賀に楽々福神社、そして溝口町宮原に楽々福神社がそれぞれ鎮座する。江戸時代の寛保二年(一七四二)に書かれた『伯耆民談記』によれば溝口町宮原の楽々福神社の伝承として、「(孝霊)天皇自から軍勢を卒し、此国に行幸ありて、当地に御座あり、悪鬼を尽く退し給ふ、遂に此地におひて崩御あり」という(*9)。これは、近世に語られた伝承であつて信頼できる史料にはなり得ないが、この日野郡が古代の砂鉄の産地であつたことを考えると、孝霊天皇や大吉備津彦らが吉備から北上すれば到着できる地域であり、簡単には否定は出来ない伝承である。目的は、砂鉄の獲得と見られる。

実は、孝霊天皇の皇子である彦狭島王が、さらに瀬戸内海を西に

だけが記憶されていたと考えればおかしな事ではない。つまり、天皇の父母の系譜は正確ではないとする立場である。

記紀は、万世一系を前提として編纂されている。それは、アマテラスの直系子孫が皇位を継承するということ、すなわち文武天皇や聖武天皇による皇位継承が正統性を持っているという、八世紀初頭の律令政府の主張を意味していることにはならない。

【註】

- (*1) ウィキペディア「桃太郎」
- (*2) 谷川健一編『日本の神々』第二巻 山陽・四国(白水社)
- (*3) 拙書『もうひとつの古代史』(総合出版社 歴研)、太田晃『『日本書紀』の年代の謎を解明』、『歴史研究』第610号)
- (*4) 寺沢薫「王権誕生」(講談社)
- (*5) 福本明「吉備の弥生大首長墓 楯築弥生墳丘墓」(新泉社)
- (*6) 谷川健一編『日本の神々』第七巻 山陰(白水社)
- (*7) 高田健一『妻木晩田遺跡』(同成社)
- (*8) 『妻木晩田遺跡』(淀江町教育委員会)

進んで制海権を握り、海賊と呼ばれる越智水軍や河野水軍の祖となるが、最後はいつの時代か不明であるが、四国の伊予の国まで進出したという伝承がある(*10)。これが事実ならば、北部九州に本拠を置く邪馬台国連合の近くまで進み、両軍による交戦も起こり得たという事になる。

しかし、彦狭島王が『日本書紀』に記述される彦狭嶋命なのか、伝承にあるように若吉備津彦と同一人物なのか不明であり、さらに越智水軍や河野水軍の系譜も確認する必要があり、また現在の愛媛県越智郡朝倉村にあるとされる矢矧(やはぎ)神社の来歴も調べなければ正確な判断は出来ない。

つまり、まだ筆者自身による現地調査を行っていないため、本稿ではあくまで参考情報として記すに留めたい。

3 「孝霊天皇≠欠史八代」の理由

冒頭で述べたように、第二代綏靖天皇から第九代開化天皇までの八人の天皇は、『日本書紀』に天皇の事跡が記述されておらず、その和風諡号に後の時代に使われた「大

(*9) 『伯耆民談記』

(佐伯元吉編『因伯叢書』

第二冊・名著出版)

(*10) 原田常治『上代日本正史』(同志社)

以上



会員研究

藤原魚名系波多野家のおいたち

石原 裕之

一 藤原秀郷公の子孫と由緒

十一世紀前半までほぼ名誉表徴として世襲された、国司や鎮守府将軍の地位と功田等の土地は、秀郷系藤原一族によって代々、本領安堵されていきました。秀郷の子、千常及びその孫の文行は、公光系波多野等の氏祖となりました。

二 藤原公光系一門の 貴族系武士的性格

長元元年（1028）六月平忠常の乱の時、相模国国司は、藤原公光という秀郷系子孫が中心となっていました。公光の母は、平定文の娘で藤原道長の娘の上東門院彰子に仕えている。藤原北家はそもそも真楯系と魚名系の兄弟で分れているが、藤原秀郷そしてその子孫、公光は、魚名系東国藤原家の代表国司であり、藤原道長

は、（御堂関白）として真楯系摂関家藤原氏を中心でした。もちろん、この時代、藤原氏同族の血縁と交流が続いていた絆と証して京都と相模国（東国坂東）へ行ったり来たりする有様で、いわば公光の子孫も「京風文化人的性格」のある貴族系武士ともいうべき一門であったのです。

三 藤原公光の養子、佐伯兵庫介 と波多野氏の誕生

藤原公光の代官として佐伯経資「佐伯兵庫介」が、相模国目代の役名で相模国へ派遣されました。経資の子、経範は、平氏との合戦に東国藤原公光の一団に加わって活躍しました。その後、公光は、娘の婿として経範を迎えて、藤原公俊の名を与えられました。公俊は、天喜五年（1057）十一月の前九年の役に郎党を率いて参

戦、黄海（きのみ）で戦死しました。その子、経秀は、寛治元年（1087）十二月、その軍功として相模国余綾郡波多野庄「現在の秦野盆地一帯」を賜ったことで代々子孫が波多野を領していく事実と、藤原経秀が波多野経秀と名乗った事が、波多野氏となった経緯並びに由来とされる。元々は、奈良にいた渡来豪族、秦氏（秦之綾氏）起源とされた領地とされます。この後、波多野氏を名乗る藤原公光系の武士の源となります。公俊の養子となり兄弟の公清の子孫は、佐藤、近藤、山内、首藤、小野寺、尾藤、伊藤家を名乗り、公季の子孫は、伊賀家を名乗ってゆきました。波多野経秀の子、秀遠は鳥羽天皇に、遠義は崇徳天皇に仕えた。義通と代々の妻は、京都から嫁いで歌人も多く、京風文化人的性格の貴族系武士として有名になってゆきました。

四 保元・平治の乱

保元元年（1156）七月、保元の乱はご存知のように史上最も無常で残酷な悲劇を後世に伝えています。上皇方と天皇方との争い

で源氏も平氏も親子、兄弟が敵味方に分れて同族同志の激戦であり、天皇方の勝利で終わるものの源氏も平氏も親子、兄弟等で処刑し合い、斬殺したむこい戦いでありました。源義朝は父の為義を郎党に斬らせ、義朝の末弟四人を斬殺するよう波多野義通に命じ、七歳から十三歳の子供の命を船岡山で泣き叫ぶ中、涙の内に斬首しました。波多野義通は源氏軍に付いていた戦いでもあった（保元物語より）。この三年後、平治元年（1159）十二月、平治の乱が、勃発した。

この時の源平合戦は源義朝が敗北、平清盛の勝利となり平家の勢力が強大となる源平のタイトルマッチ第一回戦でした。源義朝は、都から落ちてゆき、波多野義通も従軍し敗北後ここから帰国しました。義朝は、子の義平十九歳、朝長十六歳、頼朝十三歳と一族を連れて、美濃国青墓で休んでいた。深手を負って逃げきれぬ朝長は、波多野義通の妹と源義朝の間に生まれた子であり、波多野氏の相模国波多野庄松田亭（秦野盆地）で育ったことが「吾妻鏡」に記されている。頼朝は、捕らえられたが、池禪尼の保護で死を免れ、伊豆へ流され

ました。義通の弟や兄弟の多くは、河村、大友、菖蒲、沼田家と分家し、その子も松田、渋沢、大槻家を名乗って全国に分派してゆきました。

五 波多野義通の弟、義景の所領 と鎌倉幕府成立

波多野壮北方は、遠義より義通へと伝承された由緒ある所領は義通の弟、義景が引き継ぐ際、岡崎義実と揉めたが頼朝公の判断で義景が安堵したと「吾妻鏡」に記載があります。文治四年（1188）八月二十三日そして、翌年七月十四日所領を幼息に譲ることになる。同月十九日、義景が広沢実方、沼田太郎らと奥州遠征に従軍した。建久二年（1191）二月四日義景が頼朝の二所参拝に供奉し、翌年十一月二日、御堂供養導師下向に足柄山で警護にあたりました。この年、源頼朝が朝廷より征夷大將軍の位を授かり、鎌倉に幕府を開きました。翌年五月八日義景、右馬助らが頼朝に従い富士野の狩りに供奉し、翌年三月十日義景、忠綱らが頼朝の南都下向にも供奉していた。

六 義景の子、波多野盛通 （右間盛通）について

先の波多野義景の子、盛通は、正治二年二月二日梶原景時与党勝木則宗を生虜した事で、「吾妻鏡第十六」そして、その功績を賞され甲斐国西八代郡六郷岩間に地頭を授かったとされます。JR身延線の甲斐岩間駅の先にこの盛通の五輪塔が存在している。

七 源氏將軍の滅亡と 北条政権の成立

建永元年（1206）六月二十一日、盛通の父、義景が三代將軍実朝の前で相撲をとっており、尚、三代実朝が暗殺された後、首

幕府要人が北条軍と戦うが、波多野義景の子、地頭を授かった盛通も横山氏の娘を嫁とした事から和田軍側に付き、市内で北条軍相手に暴れました。六日に入り敗戦濃厚な和田軍になり、同族、沼田七郎らの軍に討死してしまいました。その後、鎌倉では、承久三年（1221）五月二十一日後鳥羽上皇（朝廷軍）が北条軍と承久の乱となってしまうほど北条軍は執権政治を源氏に代わって行う、歪曲した時代が到来しました。尚、平家の族長、侍別当長官、和田義盛の墓は、江ノ電電車の和田塚駅近辺に存在し、和田塚として有名です。又、NHKの大河ドラマも来年放送される予定です。

八 藤原魚名系波多野（岩間家）

この後、盛通の遺子、盛景より後の戦国時代に子孫が常陸国で源氏佐竹氏に寄進して、久の字を賜って、佐渡守として江戸時代、国替えの秋田に移ってゆくことになる。「秋田県立公文書館」に数点の史料が保管されていて、秋田で直参旗本として大番組支配等の役に付き、岩間文蔵（久継）は久保田、

秋田佐竹藩本家の重臣となり、佐竹藩にその系図等を江戸時代、前半と後半、文化年間にも記録所に提出していて、それもこの公文書館に保管されています。この岩間家がわが祖母の家につながっていくのです。

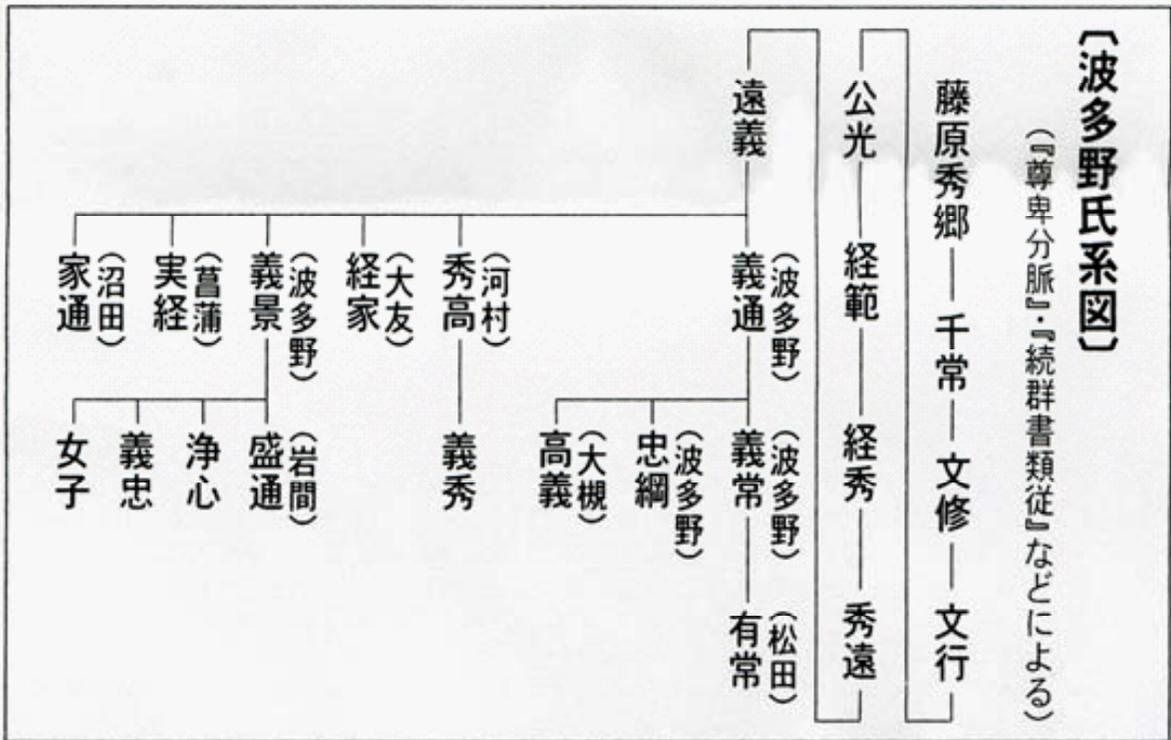
〔主な参考文献〕

* 図説、「秦野の歴史」

（1995年秦野市発行）

〔波多野氏系図〕

(『尊卑分脈』・『統群書類従』などによる)



会員研究

蒙古襲来！ 誰が日本を

救ったのか？

真野 信治

一・日本史上類を見ない外寇

蒙古襲来、いわゆる「元寇」は日本が古より経験したことがなかった本格的な外寇であった。襲来した蒙古、つまり元朝の皇帝はクビライカアン。有名な世界征服者チンギスカンの孫にあたり、祖父以来の大モンゴル帝国を中国風の「元」に改め、多くの漢人を採用しながら、モンゴルと中華が融和した国家を目指した。そのクビライは二度にわたり日本遠征を試みるが、二度とも『神風』が吹き荒れて軍船の多くが覆没したことを我々日本人はよく知っている。第一回(文永の役)は、元軍と高麗軍の連合軍併せて二万七千人、第二回(弘安の役)は、そこに三千五百艘の旧南宋軍十万人が加わった空前の大軍団であった。が双方とも元軍(モンゴル人)主体の遠征軍とは言い難い。注目すべきは、これら大船団が本当に『神

風』の影響を受けて壊滅したのか

どうかだが、残念ながら真相は定かではない。季節的には十月と六月なので、台風の可能性は低いが、同レベルの低気圧が原因としても別段問題はない。一方で、高麗国の記録には、「戻らない者一万三千五百」とあることから、あなたがち日本側の「神風」伝承が誇張とは言い切れない。また、第一回遠征は、同時に行われた南宋大遠征の側面攻撃であり、従来から南宋と海上交流のある日本を威嚇することになったとの説もある。因みにあまり知られていないが、この九州方面遠征と同時期に、北ではアムール川を下ったモンゴル軍が樺太(サハリン島)にも侵攻し、アイヌ人と抗争を繰り返したという記録も残っている。

二・何度も送られていた使節団

実は、元朝は日本遠征が決定す

るまでに何度となく正式な国書を

日本に遣わせていたのである。ただ、その内容は従来言われているように傲慢無礼なものではなく、いたって低姿勢のものであったとモンゴル史研究者は主張する。つまり、日本史学者におけるこれら国書の漢文解題に問題があり、それが今までの通説、すなわち「上から目線の元朝」というイメージを創り上げた可能性はある。したがって、東洋史学者のように常に漢字に馴染んでいけば、日本史学者が訳すようないかめしい雰囲気を読み下しにはならなかったと説くのである。例えば、すべての国書の末尾に「不宣白」とあり、これが「臣下とは見ていない」ことを表す結語表現であることを日本史学者がどこまで理解していたのか疑問であるとも言える。一方、遣わした国書に対し、日本側(幕府)が一切返書を出さずに黙殺し続けたことに、気の長いクビライもさすがに頭にきたようである。一二七四年ついに日本遠征を決意するに至った。

三・第二回遠征は、旧南宋軍人の

海外投棄が目的だった
前述した通り、二回目の遠征は

船団を二手に分けて渡海してきた

ことが伝えられる。高麗から発する東路軍と寧波から発する江南軍である。主戦はやはり東路軍である。ただ、今回幕府は博多湾一帯の沿岸に「石築地」を構築、人的には「異国警固」番を組織するなど準備は万端であった。結果、東路軍は上陸前に波打ち際で叩かれて上陸できず、博多湾上で立ち往生となってしまった。そこに大艦隊の江南軍が到着したのだが、陸上での戦闘に持ち込めずなすべがなかった。その江南軍の主力はもちろん旧南宋兵だが、杉山正明氏の説では、数が多いのだが老人・愚連隊・やくざなどが大半で、なんと武器のかわりに農具を持参しており、いわば移民船団の体であったという。つまり元朝は、将来的に役に立たない旧南宋職業軍人たちを海外投棄する目的であり、うまくいけば日本が集団入植先になればよいと考えていた。したがって、多くの弱兵は船内待機を強いられ、そうこうしているうちに暴風雨に襲われ、ほとんどの江南軍船が沈んでしまったという結末である。



四. クビライの過去

クビライは、第四代皇帝モンケの次弟である。母は父トルイの嫡妻ソルコクタニベキ。兄モンケ、弟のフレグ、アrikブカも同腹である。ソルコクタニはモンゴル王家の中でも特に優秀な女性であったと伝わる。因みに出身がケレイト族なのでネストリウス派のキリスト教徒である。その影響なのか、モンケは西洋学に造詣が深く、ユークリット幾何学を理解していたというから驚きである。一方、本来皇帝になれる立場ではないクビライは、信頼できる青年時代の逸話はほとんどなく、大皇帝になって以降の後付けの逸話しかない。したがって、チンギスカンが、多くの孫の中でも特に将来を期待していたのがクビライだったとの伝承があるが、眉唾である。モンケは即位すると同時に、クビライを華北地方へ、三弟のフレグをイラン地方へ遠征させ、帝国の最大版図をさらに拡張する戦略をとった。特にフレグの進軍はすさまじく、イラン地方のイスマーイー

により、フレグ軍本隊は旋回する。

地中海世界はモンゴル皇帝の死によってその戦火から救われたわけだが、オゴデイの死によりバト遠征軍の蹂躪を免れた東欧社会と同様であった。但し、フレグ不在の一軍がパレスチナのインジャーールトでマムルーク軍に大敗した事も見逃してはならない。一方のクビライの中国征討軍は、皇帝が望むほどの成果はあげることができなかつた。これに苛立ったモンケは自ら「南宋親征」を敢行するのだが、これが悲劇の始まりであった。モンケは、自軍と同時に東方戦線をタガチャル（チンギスの弟テムゲの嫡孫）に任せて進軍を命じたが、なぜか彼は最前線で謎の撤退をしようとする。激怒したモンケは孤軍奮闘するが、一二五九年四川の戦陣中に疫病にかかり他界してしまう。『集史』は「伝染病による死」と記すが、死去のタイミングを考えると、これ以上進軍をしてほしくない輩の暗躍が浮かび上がり、単なる病死とは思えない。

五. 正統だったのはアrikブカ

皇帝モンケの崩御に伴い、末弟のアrikブカは、諸皇子らが若年で

あることを踏まえ、モンゴル本土に

おいて政治の中核にいた自分こそが次期大カアン（皇帝）であると認識していた。さっそく自ら仕切るモンケの葬儀に参集するよう、帝国全土に急使を派遣した。ところが、兄クビライが首都カラコルムから遠く離れた金蓮川でクリルタイ（部族会議）を開き、出席者の推戴を受け大カアンに即位してしまったのだ。驚愕したアrikブカであるが、こちらも急遽カラコルムでクリルタイを開き、大カアンに即位した。ここに二人の皇帝が並立してしまうが、正統なのは間違いないアrikブカである。クビライは、先帝の葬儀に参列せず、正式なクリルタイではない地方会議で推薦され即位したにすぎず、旧来のモンゴルのしきたりに準じていない。したがって、この時点でクビライは反逆者であり、よく言われる如く「アrikブカの乱」ではなく、実は「クビライの乱」だったのだ。この兄弟対決は、お互いの死力を尽くすものとなり、最期はチャガタイ家のアルグがアrikブカを見限ったことが機となり、万策尽きた彼がクビライに投降することで、ようやく乱は終息を見る。捕らえられたア

rikブカの「最初は私が正しかったが、今はあなたが正しい」との発言がすべてを語っていると云っている。こうしてみると、世界史上屈指の大皇帝と言われるクビライだが、所詮クーデターによる政権奪取だったのである。その為帝国のいたる所で王族の反乱が勃発したことは必然と言わざるを得ない。因みに、アrikブカは二年後に急死しているが、これもまた怪しい死である。

六. 幻となった第三回日本遠征

話を日本遠征に戻すと、二度の討伐戦で何も得るものはなく、多くの兵士や船を失ったことを考えると遠征は失敗だったと判断せざるを得ない。ところが当のクビライに関し、失った兵はほとんどが高麗人・旧南宋兵であることから、敗北感はさらさらなかったことが伝わる（『元分類』巻四一）。さらに今までの二回は小手調べの如きもので、次こそ「本気のクビライ」を出すべく、再々遠征に向けて準備をし始めたのである。すなわち、元朝中央政府が直接遠征に参加する方針を打ち立て、前二回の遠征総司令官ヒンドウや洪茶丘（こう

ちやきゆう)を罷免し、負けなしの南宋遠征軍総司令官バヤンを参戦させる予定であった。もしこのような作戦が現実化していたら、恐らく日本はかなりの痛手を蒙り、下手をすれば九州をまるごと乗っ取られたかもしれない。しかし三度目の遠征は実行されなかった。その理由は何か？結果的に日本を救ったのは誰なのか？検討を続ける。

七. 王侯カイドウの野望

第三回目の日本遠征を決定したクビライだが、実は広大なモンゴル帝国内で大きな問題が次々と発生していた。以前、モンケは大カアン就任時に二代皇帝オゴデイの子孫を謀叛の罪で数多く粛清した。これによりオゴデイ家は族滅状態に陥ったが、生き残った者の中にカイドウという王侯がいた。彼の父は、オゴデイの皇太子カシであるが、大酒飲みの為夭逝してしまつた。早くに父を亡くしたカイドウは、モンケ・クビライ政権に不満を持ちつつ徐々に兵力を養い、ついに一二六六年敢然と反クビライの旗を掲げて立ち上がった。当初は

たクビライも一手を打つ。カイドウの背後を領するチャガタイ家（チンギスの二男チャガタイの子孫）に、自分の派閥であるチャガタイ家庶流のバラークを送りこみ、カイドウを牽制させようとした。ところがこのバラークも相当の野心家であり、チャガタイ家の当主であるムバラクシャヤが幼いのをいいことに、なんとその位を篡奪してしまいい、さらにクビライにも反旗を翻す。カイドウとバラークは小競り合いを繰り返すが、やがて天山北麓のタラス河畔にて会盟し、手を結んだのである。その際、中央アジアの要地であるシル河とアム河に囲まれた肥沃の地マーワラーアンナフル（トランスオクシアナ）の分割統治を約したが、その後、バラークの死とともに、ほとんどがカイドウ領となった。こうして大きな勢力を得たカイドウはその後三十年にわたり、クビライ及び元朝政権と対立を続けるのである。俗に『カイドウの乱』と言われるが、「カイドウ王国」と定義した方がよく、反クビライの王侯のほとんどが参画した国家とも言える。

八. シリギの乱

この中央アジアにおける「カイドウ王国」を容認するはずもないクビライは、まず有力な後継者候補である四男ノムガンを、威圧のため中央アジアのイリ渓谷に進駐させた。ところが、一二七六年この駐屯軍に一大事件が起こった。すなわちこの軍の一翼を担っていた先帝モンケの遺児シリギがなんとノムガンを裏切り、これまたクビライに反旗を翻した。いわゆる「シリギの乱」である。ただ、シリギは単に先帝モンケの子というだけで次期皇帝候補として担がれただけと見る向きもある。恐らく黒幕は、クビライの庶弟ソゲトウの子トク・テムルであろう。彼は狡猾なる策略家と伝えられ、他にアrikブカの遺児であるヨブクル、メリク・テムルらを誘い、「モンゴルの伝統を無視した漢人かぶれのクビライを打倒する」という大義名分を掲げてシリギを担ぎ上げ、ノムガンを捕縛してしまつた。ノムガンはそのままジュチ家（チンギスの長子ジュチの子孫、別名キプチャク汗国）に追放されるのだが、トク・テムルはこの時点で、ジュチ家及びカイドウの協力を得られると確信していた。

九. ナヤンの反乱

そして最後にまた大きな事件が発生した。一二八七年、チンギス弟テムゲの子孫であるナヤンが反旗を翻したのである。ちょうど三度目の日本遠征を実行しようとしていた時期である。さらに、ナヤンに呼応して帝国の西端では例のカイドウが再び軍を起し、ナヤン軍と共に元朝を挟み撃ちにするという壮大な計画を遂行しようとしていた。さすがのクビライも東方のテムゲ家等（東方三王家）の反乱には驚愕したと思われる。ただ対

処は迅速であった。庶子のアイヤチを先発させ、自らはケシク（親衛隊）とともに象部隊を指揮しながらナヤン軍を親征した。七十歳を超えたクビライの電撃作戦は見事に成功し、三月月でナヤンは捕縛されたのだが、実は日本遠征のための兵力をそっくり投入した可能性が大である。乱平定後、テムゲ家は「お取りつぶし」にはならず、ナヤンに代わってナイマンタイという親クビライの当主にすげ替えられただけだった。このように、クビライの頭の中では既に日本遠征はとうに消え去っていた。また、ナヤン捕縛後の残党軍を率いたカダアン（チンギス弟カチウンの子孫）は、朝鮮半島に逃亡しながら抵抗を続けた。具体的な動向は史料から見えてこないが、恐らく三度目の日本遠征を指示されていた高麗国も、この混乱で遠征どころではなくなると推察できる。

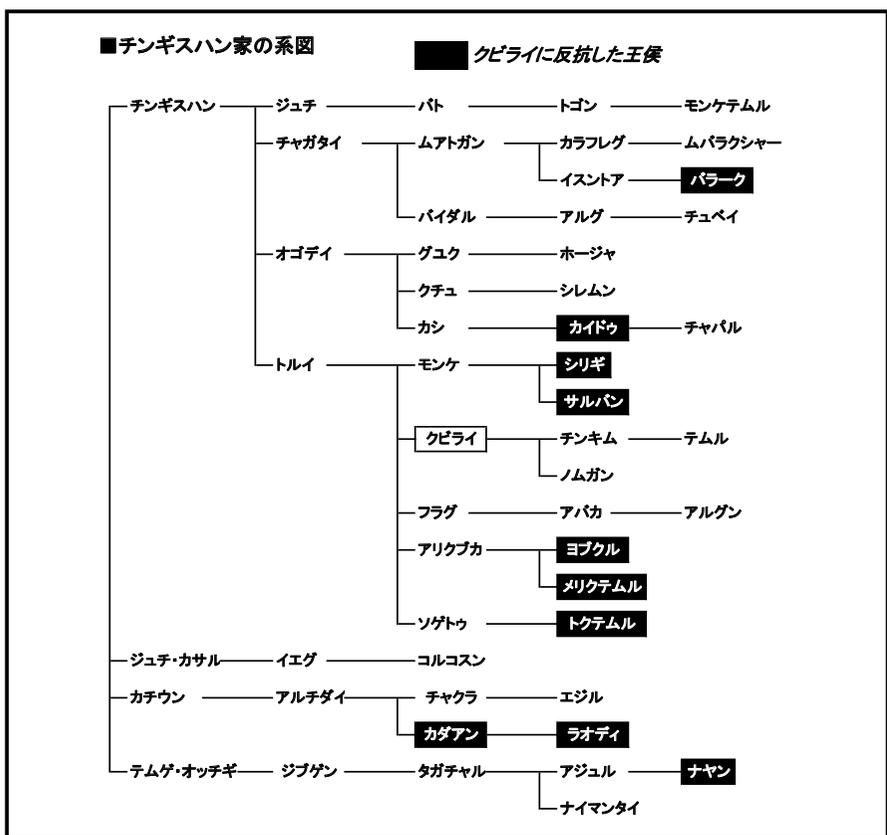
十、結果的に日本を救った
モンゴル王侯たち
こうしてみると、第三回日本遠征が実現しなかったのは、ナヤンの反乱とカイドウの軍事行動が直接の要因と言ってもいい。クビライの

立場で考えると、もう日本遠征どころではなかったであろう。東ばかりではなく西のカイドウも年を経るごとにその威勢は拡大しつつある。そう考えると、第一回、第二回遠征時も常にカイドウ陣営の動きを警戒する必要から、モンゴル本隊を日本遠征に十分投入するこ

とが出来なかったとも考えられる。その中で、かなり本気モードで派遣した息子ノムガン駐屯軍を瓦解させ、司令官らを拉致したシリギ、トク・テムル等の反乱も深刻であった。クビライが日本・チャンパー（現在のベトナム中部）遠征の作戦立案等に十分集中が出来ず、中途半端に終わってしまったのは事実である。やはり近親者の相次ぐ反乱は、同じモンゴルであるがゆえに非常に危険な存在と認識したのであろう。そうすると、結果的に日本国はカイドウをはじめ、シリギ、ナヤンなどの反クビライ派のモンゴル王侯に救われたといっても過言ではない。仮に彼らの存在がなければ、クビライは万全の体制で遠征を行なえた可能性が高く、受けた被害は想像以上のものであったかもしれない。もちろんカイドウらの頭に日本への思いがあるわけでもなく、因

果関係があるわけでもない。しかし結果的に我々日本人は、これらモンゴル諸王侯に感謝せずにはいられない。ありがとう、カイドウ！
ありがとう、ナヤン！

〔参考文献〕 杉山正明 『モンゴル帝国の興亡』 上下



会員研究

足踏み脱穀機の時代

近藤 政次

1、プロローグ

同じ区内に住む神田浩行さんからいただいた手紙が整理箱から出てきた。内容は神田さんが青少年たちとともに千葉県木更津市で水田を借りて米づくり体験を行なっている件であり、秋の収穫時に足踏み脱穀機を同市内の農家から借りて作業をしている写真である。

筆者（近藤）は令和元年5月に明治く昭和にかけて旧生田村（現川崎市多摩区・麻生区）に本拠を置いて農蚕具を製造した細王舎（箕輪一族の経営）について小論を発表したことからイネ作りで神田さんと談じた際、脱穀作業の使用器械に及び「足踏み器械ですから危険はないです」とのことに写真を送ってもらったこととなった。

2、足踏み脱穀機の登場

(1) 千歯扱きの時代

江戸時代から稲、麦の脱穀作業

に登場したのが「千歯扱き」である。これは木製の台座に鉄の歯を20本前後植込み、稲、麦の穂を通し穀粒をそぎ落とす方式である。敷いたムシロの上に乾燥させた穂は予想以上に落ちる。

当初は歯と呼ばれる部分を堅木や竹を用いたものもあったが、江戸末期く明治期にはほぼ鉄製となった。明治・大正期には、鳥取県の倉吉周辺・福井県の若狭の製造メーカーが現在の横浜（大正6年）市域や東北地方（明治15年岩手県ほか）に行商、営業活動を行っていた記録が残されている。『千歯扱き』横浜歴史博物館。2013年1月）

明治34く35年末を調査基準とした『村是調査書』が神奈川県農会の手でまとめられている。中川村（現横浜市都筑区）、豊田村（現平塚市）、綾瀬村（現綾瀬市）、金田村（現大井町）の4カ村である。

この『村是調査書』には農家の使用する農具が書きあげてある。千歯扱きの名称でなく「稲扱き」「麦扱き」と呼称している。例えば中川村は稲扱きを1戸に2丁、麦扱き1戸に2丁、購入代金は前者が1円50銭、後者が1円。5年ごとに修理、20年間使用する、としている。中川村の総戸数は500戸、うち農家は437戸である。なお、日雇いの賃金は男27銭（うち食費7銭）としている。同様に豊田村は稲扱き438丁、麦扱き219丁、同村の農家数は208戸。購入価格は中川村と同額、綾瀬村は戸当り各2丁ずつ。金田村は稲扱き各戸2丁以上と記している。

まさに千歯扱きの全盛時代である。ただし、この4カ村ともに「千歯扱き」の名称は用いていない。このことは明治38年・39年に調査された県下の『農具一覽並図解』でも「カナゴキ」、「イネゴキ」と称している。例えば中原村（現川崎市中原区）では農家1戸当り3丁以上を所有し、重量は1貫200匁内外。1日当り粃米2石く2石5斗の作業効率としている。同書では、カナゴキ、イネゴキの名称で

記載図解している。

千歯扱きはそれまでのクルリ棒などに依る脱穀作業に比較して3く5倍の能率アップであった。「千歯扱き」の名称が何時から一般化したか？定かではない。

(2) 足踏み脱穀機の時代

足踏み脱穀機が姿を見せるのは大正初期であり、国内各地で改良工夫が加えられ、大正10年頃から一挙に拡大普及期を迎える。先にふれた橘樹郡生田村の細王舎の二代目箕輪玄作はこの足踏み脱穀機の改良に数年の日時を費やし、これ迄の養蚕器材に加え、足踏み脱穀機を大正11年、市場に投入した。

製品名は「ミノル式親玉号稲麦扱機」であった。玄作はこれ迄に自社の養蚕器材の取扱い小売店のルートに脱穀機を乗せて全国販売に着手した。小売店では「親玉」の愛称で親しまれたという。木製の台座と回転胴で、丸い胴部分に鋼線のアーム形の突起を埋め込み、稲穂をこぎ落とす仕組みだ。胴部分は堅いナラ材を使用し、全体の重さは約10貫目。片足踏で1分間に約400回転の速度で両

手握りの大ききの束にした稲穂を扱齒に当てて脱粒する。1日10時間使用で約10石を脱粒することが可能とし、特別な技術を要することなく、少年少女でも使うことが出来るとしている。なお、大正末期には日産約200台、年間約8万台、年間売上高は9.6万円、従業員約120人を雇用了。〔川崎市史・通史編、近代3〕

足踏み脱穀機は国内の有力農業県の新潟、宮城、石川、さらに九州、広島などの地域の農機具店が改良・工夫を行ない製造に参入、多少の構造の差異はあっても関東大震災後の大正末期から昭和初期にかけて足踏み脱穀機の時代が到来する。千歯扱きの製造地であった倉吉のメーカーは大正10年頃から次々に廃業・転業していった〔前掲、『千歯扱き』〕。

足踏み脱穀機製造の先頭に立ったのが、細王舎であった。『全国農蚕具大鑑』(以下、『大鑑』と略す)が石川県金沢市の信弘社出版部から大正11年10月に第1版、第4版が大正15年4月20日に発刊された。600頁に及ぶ大冊である。内容は全国の農蚕具取扱い店、製造者の名簿、PRの

頁、大正14年11月の東京府主催の全国農蚕具共進会の結果などである。『大鑑』第4版の内容が大正14年現在にとらえ本稿では、大正14年“と表記する。

大正14年には細王舎の足踏み脱穀機の取扱い店は北海道から広島県まで拡がりを見せ、25府道県・140店に及んでいることが『大鑑』の小売店・特約店などのPRの頁から判明する。

細王舎に次ぐのが埼玉県川越市の木屋製作所であり、「チヨダ式稲麦扱機」「木屋式回転桑刻機」の発売元であった。同製作所は細王舎のライバルメーカーであった。同社の足踏み脱穀機の取扱い店は11府道県23店を数える。

下右・足踏脱穀機 ミノル式親玉号 アングル型 昭和初期

下左・足踏脱穀機 ミノル式親玉号 昭和初期
(図録『近代川崎人物伝』川崎市市民ミュージアムより)



3、機械化の推進の頓挫

大正13年頃から神奈川県内でも石油発動機の導入促進が県農会を中心に行われ、農閑期に県内各地で講習会が開かれた。13年2月1日には大船の県農業試験場で開かれ、都筑郡の各町村を代表し

て10人が参加している(『横浜貿易新報』1月31日号)。さらに3月5日に戸塚町農会が町内の畑で石油発動機の作業実習を開き、鎌倉郡の周辺町村から多数が出席した(前掲紙、3月6日号) 鎌倉郡農会の主催で3月12・13日の両日、動力農具講習会を戸塚町で開いた(前掲紙3月1日号)。

脱穀作業の機械化は遅々と進まず足踏み脱穀機の時代は第2次世界大戦後まで続く。その事由としては①昭和恐慌と呼ばれる大不況が昭和4年~9年頃まで続き、とりわけ農村不況は深刻であったこと。高い石油発動機、電化機械に手が届かなかったこと②昭和12年には日中戦争に突入、戦時統制が始まり、石油製品は最重要軍需物資となり、入手困難となった③国内のメーカーの多くが民需製品から軍需品生産へシフトした④太平洋戦争に依り多くの男子が徴兵、徴用され、農業生産が婦女子の手に委ねられ、簡便な足踏み脱穀機が重宝された一等等である。

以上の事由は戦後の混乱期まで続いた。

4. エピローグ

先にふれた令和元年の神田さん

からの便りに戻ろう。神田さんの送ってくれた足踏み脱穀機はプレートに「ミノル式大王印親玉号」株式会社細王舎工場、とある。この脱穀機は戦後に製造されたものである。何故なら同社が株式会社となったのは昭和23年であった。

プレートの標記も左書きとなっている。昭和28年の「日本経済新聞」の相場・物価欄に農機具があり、「足踏」の価格が掲載されており、細々ながらも生産されていたことが判明する。

なお、細王舎に限定するならば

和初期に年産30万台とのPRパンフ(図録『近代川崎人物伝』川崎市市民ミュージアム、2014年6月)が存在する。また昭和12年には職工198人、敷地3,500坪、建坪650坪、ミノル式稲麦扱機年産10万台、売上げ

100万円との記載がある(『神奈川県工場便覧』横浜商工会議所、昭和12年2月)。同社は昭和28年、アメリカのメーカーと提携して小型軽量の耕うん機メリーティラーを売り出し、ブームを起こした。(終わり)

会員研究

則天武后 ～中国唯一の女性皇帝～

高野 賢彦

はじめに

中国では「後漢」の次に「隋」という国が成立し、わずか19年つづいたのみであるが、わが国は遣隋使として小野妹子を派遣している。その後のこと、李淵(りえん)の「唐」という国が成立した。則

天武后(姓は武(ぶ)、名は照)の父武士護(ぶしかく)(山西省・大原生まれ)は、李淵が唐を旗揚げするとき武具の調達・管理にたずさわり、やがて重要な地方長官となった。武士護はさらに二代目の皇帝太宗に仕え、任地の利州(四

川省広元県)都督(ととく)時代に武照が生まれた。ただ武照は武士護が都・長安にいたるとき生まれたとの説もある。武照の母は武士護の後妻楊氏であり、武照は楊氏の二女である。

一、武照が皇后になるまで

武照が最初に仕えた名君太宗が栄光に満ちた生涯を終えたのは貞観二十三年(西暦649)であり、跡を継いだ新帝高宗はときに二十三歳であった。武照は先帝の崩御後、多くの妃らがたどったよ

うに仏寺へ送られ、一旦は尼僧になった。しかし武照が先帝の菩提を弔っていると、思いがけないことに新帝高宗・晋王李治(しんおうりち)からお声がかかった。それは自分とほぼ同年齢の李治と親しくしていたからである。

高宗には皇后王氏がいた。武照は王氏に精魂を込めてお仕えしているとき、ライバルの簾淑妃(しようしゆくひ)など多くの妃を蹴落とした。そればかりか、武照の献身的なお仕えぶりを見ていた高宗は皇后王氏を失脚させて武照を皇后に取り立てた。武照は高宗の寵愛を一身に受けるようになったのである。

高宗は先帝太宗から見れば、明らかに見劣りする人物であった。武照は先帝にお仕えしていたときから高宗の性格や病弱なことなど

を知っており、また皇帝に就任すればどの程度の能力を必要とするかも当然分かっていた。

武照は病弱の皇帝高宗に代わって政治を司ることがあっても、皇帝を軽視するようなことは決してなく、むしろ皇帝を尊敬していた。武照が皇后に上りつめるまではライバルを蹴落すなど悪逆無道の行動に終始したが、夫高宗に対しては平生親しく賢明な態度で接していた。

武照は皇后(以下武后という)に上り詰めると、物事を処理するに当たって許敬宗(きよけいそう)と李義府(りぎふ)という二人の有能な宰相を相談相手としていた。

高宗と失脚した前皇后王氏の間には子供がなく、また皇太子である第一子の陳王李忠の生母劉氏

(りゅうし)は身分がよくなかった。武后は自分が実力を発揮するには皇太子を廃し、自分が生んだ子(第五子李弘)を皇太子に据えなければならぬと考えていた。おりしも前皇后王氏が殺されると、その直後に李忠皇太子から讓位の申し出があった。

武后は実子を皇太子に据えると、皇后としての地位は一層安定度が増したが、これで一安心というわけにはいかなかった。前皇后派が隠然たる勢力を振るっていたからである。その中心人物が長孫無忌(ちようそんむき)である。無忌は先帝の皇后の兄であり、政権内の最高権力者として君臨し、睨みをきかして気に食わない者を殺害していた。先帝太宗と隋の第二代皇帝煬帝(ようだい)の娘との間に生まれた李恪(りかく)はいっとき後継者の有力候補であったが、これをも殺害、そのため高宗といえどもうかうかしてはいられず、安易に事を進めることができずにいた。

そこで武后は夫高宗に上奏文を差し出した。その中身は「皇帝がわたくしを宮殿にお招きしようとしたとき面と向かって反対した人々に皇帝から褒賞を与えていたことぐらいであった。老子は唐室と同じく李姓だったからである。さらに言えば官吏の俸給はすべて保証し、場合によっては昇給する旨を明らかにした。」

天皇高宗は張魯元年(679)正月以来、東都洛陽に住んでおり、永淳元年(682)十月に洛陽の東南にある名山嵩山(すうざん)に参詣していた。そしてその南に新築した奉天宮に行幸したとき容体が悪化し、ようやく東都へ帰りついていたが、十二月四日の夜に崩じた。天后はやがて新帝として子の中宗(李顕)を立てたが、間もなく廃絶した。在位はわずか五十四日であった。その後また高宗の八男豫王(よおう)を皇帝睿宗(えいそう)にしたが、彼はほとんど何もさせてもらえなかった。

天后はすでに六十歳ほどになっていたが、そこへ現れたのが妖僧の馮小宝(ふうしょうほう)であった。馮小宝は長安西方の陝西省鄠県(こけん)生まれらしいが、洛陽に強壯剤などを売りにやってきて高宗の祖父の娘のところに出入りするようになり、いつの間にか天后のお気に入りになった。堂々たる体格の持ち主であり、出自のいやし

だきたく存じます」ということであつた。高宗がこの文を彼らに見せると、彼らは恐怖して宰相の地位などを退きたいと申し出た。しかし高宗はそれを認めなかった。で武后は彼らを憎み、双方に不安な日々がつづいた。その後武后は彼らを遠国へ流した。子らもみんな除名されて流され、王皇后と皇太子の生母・簫淑妃(しょうしゆくひ)は身分を剥奪されて処刑された。武后の信任を得た許敬宗と李義府は高宗の信頼も得ており、かくして長孫無忌も次第に力を失った。

国内が落ち着いたところで高宗は病弱にもかかわらず、トルコ系の突厥(とつげつ)やツングース系の靺鞨(まっかつ)らと連合して中国東北部から朝鮮半島にかけて広大な国家を築いている高句麗を討伐するため兵を動かした。厳しい戦いではあつたが、ようやく先帝が果しえなかつた大戦果を挙げることができた。この合戦の直接のきっかけは朝鮮の新羅が高句麗、百濟、靺鞨の連合軍に攻められて唐に救援を求めてきたことであつた。当時、新羅は百濟を攻めており百濟と親しかつた日本の天智天皇は阿

葉売りながら気さくな男であつたためか、宮中でも気に入られ、姓名を家柄のよい薛懷義(せつかいぎ)と改めて天后の寵愛を得るようになった。そのため宮中差し回しの馬に乗り、十人ほどの宦官を従えて威風はあたりを圧していた。薛懷義はこれを用いて傲慢な態度を取つたというので廷臣らも恐れおののくようになった。

薛懷義はそのうちに他の僧らとお告げ文をつくり、「天后は弥勒仏の下生(げしょう)である」と言い出した。そのためもあつて天后は自分の即位の妨げとなりうる唐室の諸王を排除することを考え始めた。それは太宗の弟、高宗の兄弟、その取り巻きらである。これらの人々はずでに州の刺史(さし)として地方の任地に赴いていたが、ある程度の兵力を持つており、それぞれ地方の人々の信望を得ていた。天后は諸勢力を排除したのでその地位は磐石となり、早く帝位に就いてもらいたいという要望が方々から聞こえてきた。機は熟し、載初二年(690)に天后は則天新字と

言われている新しい字を公表した。官僚、王族、遠近の人々、異民

部比羅夫を將軍とする二万七千の軍勢を送り、白村江(はくそんこう)で劉仁軌らの軍勢と二日間の海戦を行ったが完敗した。そのため天皇は大和の飛鳥の都を攻められはしないかと危惧して667年に遠国の近江大津へ遷都した。

高宗の健康状態はますます悪化した。高血圧なのか頭が重く、視力も悪く、政治を司ることがほとんどできなくなつてきた。やむをえず武后が本格的に代役を務めて政治に深く関与するようになった。それと同時に武后の権力が強くなり、武后が自分に不都合な人物を流刑、降格、毒殺などに処し、その人数は三品以上の人物だけでも数え切れない。また高宗は治世三十四年の間に改元を十三回も行つているが、これも武后の意向によるところが大きい。武后自身も帝位にあつた間に十六回も改元している。元号は通常二文字であつたが、武后のときは四文字の元号が三回ある。

わが国でも聖武天皇の時代以降、たとえば天平勝宝・天平宝治という四文字元号が採用されているが、これは武後に影響されたものと言われている。なお高宗は病弱ながら族の酋長、僧侶、道士ら六万余人の請願がもたらされ、この期に至つて睿宗もついに武氏の姓を賜りたいと申し出てきた。天后は載初二年九月七日に請願を受け入れることを決意し、九日に則天楼(日本の応天門)で大赦令を発し、国号を「周」と改め、則天大聖皇帝と称して皇帝となつた。そのため李淵が創つた唐王朝が滅びることになつた。これを機に都を長安から洛陽へ移し、仏教を道教の上位に置き、武氏の親族を皇族として多くの者が魏王、梁王などとなり、また郡王に封ぜられた者もいた。

則天皇帝はその後、太宗時代に崩壊した東突厥の默啜可汗(もくつつかん)が勢力を盛り返してきたので薛懷義をしてこれを討伐させた。また皇帝は大仏を作らせて明堂に安置させた。薛懷義は器用ぶりを発揮したが、医者沈南璆(ちんなんきゆう)が皇帝のお気に入りになると、もだえ苦しむ、ひそかに天堂に放火し、明堂の大仏をも焼いてしまった。そのため薛懷義は證聖元年(695)二月に殴り殺され、死骸は白馬寺で火葬に付されてしまった。

則天皇帝の在位は十五年に及ん

ら女性関係、とくに武后の姉韓國夫人の娘魏国(ぎこく)夫人との情事が盛んであり、武后がそれとなく注意しても止まず、魏国夫人が急死すると号泣したという

二、武后 皇帝になる

上元元年(674)八月、武后は天后と称し、同時に皇帝は天皇と呼ばれるようになった。天后はおりしも四十六、七歳であつたが、これは帝位へ一歩近づいたということである。病気がちな天皇はもはや何もできず、天后がすべてを取り仕切つていた。皇太子李弘は二十三歳ほど、すでに子持ちであつた。摂政になる道もあつたが母親武後に阻止され、やがて毒殺されてしまった。

李弘の後は第六子の擁王李賢(ようおうりけん)が皇太子になった。李賢はひよつとしたら天后の姉韓國夫人の子かもしれない。高宗は李賢をかわいがつていたが、天后の劍幕に押されて廃位し、七男の英王李哲(改名して李顕)を皇太子に立てた。

天后は十二条の政治方針を作成したが、珍しいことと言えば官吏はすべて道教を学ぶべきだ、というだが、帝位に就いてからの事績はさしたる中身がなかつた。健康に恵まれ、非凡な頭脳を持つていても、やはり心身の衰えは争えなかつたのであるうか。しかし男色ぶりは盛んであつた。薛懷義に代わつて新たに美少年の張易之・張昌宗の兄弟をかわいがつた。

皇帝は安楽に暮らしているうちに、ますます老いさらばえてしまふ、後継者を決めないままであつた。すると甥の武承嗣(ぶしょうし)が自分こそ後嗣になるべきだと言いはじめた。しかしこれには反対する者が多く、皇帝も「皇嗣(睿宗)は私の子だ。どうしてこれを廃してよからうかと言つた。ところが、武承嗣の片棒を担いでいる王慶之(おうけいし)は「皇嗣は李氏の出でございませぬ」と言つた。しかし王慶之は動こうとしなかつたので皇帝は李昭徳(りしょうとく)をして撲殺してしまつた。

すると李昭徳が思い切つたことを言つた。「陛下の甥武承嗣が皇帝になつた場合、姑のために廟を立てる者がおられますか。高宗は陛下の夫であり、皇嗣(睿宗)は陛

下の子です。陛下の位を子に伝えるべきです」と。その後も跡目をだれにするか、それぞれの利害がからんで紛糾はなおも続いた。

則天皇帝が洛陽宮の長生殿で病床についたのは、それから間もなくであった。お側に侍っていたのは張易之・張昌宗兄弟のみであった。そのためか兄弟が謀反を企んでいるとか、帝位を狙っているのではないかなどと噂が広まった。宋璟（そうけい）をはじめ宰相らはそのことを調べようとしたが皇帝に阻まれた。しかし皇帝はもはや宋璟を処罰する気力もなくなっていたのだ。

翌、神龍元年（七〇五）になると、皇帝の病はますます重くなった。張柬之（ちようかんし）を中心として則天皇帝を廃して皇太子を帝位につけようとする動きが強まった。張柬之は近衛師団長の李多祚（りたそ）將軍を味方として体制を整えた。決起は正月二十二日と定め、玄武門へ備えさせ、皇太子を押し立てることにした。皇帝が長生殿に伏せていると、皇太子を先頭にして張柬之らが押し寄せてきて張易之・張昌宗兄弟を切り倒して皇太子を後継ぎに

することを同意させた。皇太子は二十五日に即位し、やがて国号を「周」から「唐」へ変えてしまった。そのため歴史上、則天皇帝の「周」という国号は消滅し、唐へ吸収されることになった。

上陽宮へ移された皇帝、則天大聖皇帝はもはや力なく、その生涯を終えた。時に十一月二十六日、享年八十一、八十二、あるいは八十三であった。また一説には七十七歳、もしくは七十八歳であったという。翌、神龍二年（七〇六）五月に高宗に先立たれてから二十四年目のこと、則天皇帝は実子の中宗李顯によって夫高宗の乾陵（けんりょう）に葬られた。

則天皇帝の願いによって建立された巨大な碑、夫と同格の碑には文字が書かれておらず「無字碑」と言われている。どうして無字碑なのか。その理由は「業績が文字にできないほど大きいこと、あるいは毀誉褒貶の嵐にさらされるかもしれないので評価は後世の人々の手にゆだねたいこと」の二点にあると言われている。

（完）

〔主な参考・引用文献〕

- ・ 則天武后 講談社学術文庫 氣質澤保規著
- ・ 則天武后 女性と権力 中央公論社
- ・ 則天武后 外山軍治著 みず書房
- ・ 追跡・則天武后 林 語星著 新潮社
- 今泉恂之介著



会員研究

古典期アテナイの自由と平等

雨宮 美千代

今では男女平等という言葉すら時代遅れのようなだが、古典期アテナイでの自由と平等の実態とは？

ペルシア戦争後のアテナイとスパルタを両袖とするギリシアを二分する内戦に至るまでの間、名指導者と言われるペリクレスのもとで資金力をバックにアテナイはエーゲ海域に君臨する。政治・経済・社会は安定し、古代ギリシアの民主政が確立した時代である。文化・精神活動は活発化し、ギリシア劇が隆盛した。

この時期において、市民間での政治的・社会的平等はほぼ完全に実現を見たといえる。しかしここに市民身分の閉鎖化が著しく進行する。市民全体が一つの特権身分としての位置を占めるようになるのである。市民とそれ以外のものの位置関係は、すでに生まれた時から定められていた。ポリスにおける実態はどのようなものであった

か。

紀元前五世紀頃のポリス社会におけるアテナイの家族の形態・相続制度・子どもの嫡庶と市民権の関係・男性と女性の社会的な役割また市民以外の身分のメトイコイや奴隷について考察してみよう。

ポリスは古代ギリシアで独特の性格を持つ小規模な国家ないし政治共同体で、中でもアテナイは政治、経済、文化のいづれについても古代ギリシアの中で際立った高度な発展を遂げ、また古代民主政を徹底した形で実現したポリスであった。しかしそれは男性市民という限られた一部の人の間で実現し、市民の妻や母である女たちはこの民主政から排除されていた。当時、軍事力で優位に立っていたアテナイでは軍事に従事するのは男性であり、相対的に男性主体の社会となっていたのである。ところが、同じく強い軍事力を誇っていたスパルタでは

他のポリスと異なり、女性も大きな自由を享受していたのである。

クレイステネスの改革以降は、アテナイ市民はデーモス（行政単位・区・村落）民衆を意味するデモクラシーにつながる）への登録を経る市民権を獲得するようになった。ポリスの主体は市民権を有する成年男子で、アテナイの政治も文化もあくまで男性市民中心に築かれていた。アテナイの市民資格は前四百五十一年のペリクレスの市民権法以降、原則として両親が市民であり、正式に結婚している事と規定されていた。この規定は厳密な血統主義をとるとともに市民権を嫡出子に限定することで、ポリス市民としての出生の正当性を家の構成員と結び付け、婚外子を排除するものである。市民権を得るには正式な夫婦の嫡子である必要があり、そのためには周りに認めてもらわなければならないが、地縁と血縁は重要であった。

（1）家族の形態

アテナイでは自給自足が理想的だという考え方があり、衣食などの生活必需品は基本的にオイコスで生産された。オイコスとは「家」

を意味するギリシア語で、古代ギリシアを通じて社会の最小単位として機能した。原則として父から息子へと継承され、ポリス市民の政治的・経済的基盤もオイコスにあった。法廷弁論に遺産相続に関するものが少なからずあり、ギリシア人にとって日常生活の拠点となったオイコスの在り方を考える上での史料となる。アテナイの市民全体の三分の二から四分の三が土地所有者であり、夫は戸外で奴隷を使用して農耕を行い、妻は家中で織物や生産、奴隷の管理等、家事全般を取り仕切った。奴隷を一人も所有しない市民はまれであった。

（2）アテナイの子供たち

家父長社会であったアテナイではオイコスの後継者は男子でなければならなかったため、子供の誕生は男児ほど歓迎されなかった。父親はその子が「市民身分の正妻から産まれた」と宣誓しなければならず、嫡子が生まれても男子と女子では相当な違いがあった。新生児のために誕生十日目に「デカテ（十日目）」あるいは「アンフィドゥロミア（駆け巡り）」と呼ばれる儀

式が行われる。この時に新生児は命名され家族の一員となる。わが子として育てるかどうかは父親が決定し、虚弱な子、正妻の子でない子、嫁資を必要とする女子（女子がその家にすでに多くいる場合は、時として不要なものとして捨てられ、運が良ければ誰かに拾われることもあったが母親の意思は関知されなかった。

アテナイでは公的な教育機関はなく、男子は私設の学校に通い初等教育を受けた。女子の教育は家庭で行われ、簡単な読み書きができる程度のものであったと思われる。女たちはほとんどを家の中で過ごしたが、宗教行事は別でこれが市民共同体への帰属意識を高めることにつながった。

アテナイの祭儀は多種多様で規模も大小様々であった。テスモフォリア祭のように女しか参加できない祭の起源は古く、ポリス成立以前にギリシア各地で行われていた。少女たちは祭儀において一定期間アルテミスの神域にこもる等、年齢に応じた役割を果たし、市民共同体の成員としての成長を遂げるためのものであった。もっとも名高い例能を持っていた。

アテナイは訴訟中毒社会でもあった。職業裁判官はおらず陪審裁判が行われた。陪審員は必ず端数の人数で、投票は穴の開いた青銅版は有罪、空いていないものは無罪であった。訴訟は男性しか起こせない。女性の場合は代理人が行った。弁論を行う弁論作家も多くいたがすべてが真実である必要はなかった。遊女ネアイラは奴隷身分から抜け出し、ステパノスというアテナイ市民と三十年にわたって一緒に暮らした事で訴えられた。この裁判には古代ギリシアの一人の女性の生涯を垣間見ることができ

る。アテナイの女性は法的、政治的、経済的、社会的に著しく権利を制限されて、隔離同然の生活を送っていたという見解が十九世紀には通説となっていたが、二十世紀後半にそれは逆の政治的権利は制限されていたが日常生活では尊重されその社会的地位は決して低くなかったと、千九百二十五年にイギリスの古典学者ゴムが異論を唱

がアテナイのブラウロンの神域である。これら宗教行事での種々の役目に選ばれるのは上流あるいは中流以上の家庭の娘たちであった。

少年たちが市民共同体の一員となるための儀式として、わが子をフラトリアに登録する。少年が十六歳になった年のアパトウリア祭の第三日目に父親が生贄を捧げ、息子の髪を切り祭壇に供える。この儀式を経て少年はフラトリア成員として登録され、十八歳になると市民資格の審査を受け、合格するとデーモスに登録され、正式にアテナイ市民と認定される。デーモスへの登録後二年間はエフェボイと呼ばれ集団で生活し、軍事訓練と国境警備の軍務に専心した。

少年と少女たちの違いは一方が妻・母となることを前提としたのに対し、他方は市民に不可欠な戦士としての訓練を受け、一人前の市民となるための準備だったことである。少女のためのフラトリアやデーモスの登録はなく、妻・母として市民共同体の維持・繁栄に協力することであった。

(3) 結婚と相続 女性の地位と財産権について

えて以降、これに従う研究者が次々と現れた。

(4) アテナイ社会における メトイコイ（在留外国人） と奴隷

アテナイに居住する多数の外人は、身分の上から自由人であるメトイコイと非自由人である奴隷とに分けられる。アテナイには多数の奴隷がいて市民に代わって、あるいは市民とともに生産労働に従事していた。また、手工業や海上交易などの商業の分野では他国から移住してきたメトイコイの活動が目立った。メトイコイには他ポリスからアテナイに移住してきたクセノイと非ギリシア世界から移住してきたバルバロイ（言語が非ギリシア語）それと解放奴隷が含まれていた。メトイコイは一定の期間以上（およそ一ヶ月）アテナイに居住する外人で、居住デーモスに登録され民法により生命と財産の安全が守られていた。しかし参政権を持たず不動産の所有もできないなど多くの制約があった。さらに市民には課せられていないメトイキオンと呼ばれる人頭税を支払わなければならなかった。

アテナイ市民の妻や母は市民身分に属していたが男性市民と違い参政権を持たず権利も制限されていた。男性市民は参政権を獲得する三十歳頃に、女性は十四・五歳頃に結婚した。結婚は夫となる男性と、妻となる女性の父親または後見人との間で決定された。婚姻届の制度は存在しない。正式の婚姻であることを証明する要件として出されるのは両者の間で交わされる結婚の約束（エンギユエ）であった。この時に妻となる女性が夫の家へと持参することになる嫁資の評価も行われた。婚約と嫁資の金額提示は証人たちの前で行われたが、結婚が公的に認知される方法はなかった。

嫁資は一般に動産（現金その他）で、父親から娘に与えられる。婚姻継続中は妻の後見人となる夫の管理下に置かれ、夫はこれを投資などで運用する。妻の死後は子供が相続した。また離婚した場合も妻とともに実家に返還されるか、年十八パーセントの利息分が嫁資返還まで実家に支払われる。夫に離婚を思いとどまらせるには十分な制度である。離婚に際し嫁資を返還しない場合、嫁資返

還の訴訟を妻側は提議できた。利子の支払いを怠った場合に提議する訴訟は「穀物に関する訴訟」と呼ばれ、嫁資から得られる収益には妻の食費という潜在的意味があったことを示している。結婚後も実家の男性の後見人としての立場は消滅することはなく、女性と実家との絆は存続していた。一方、実家でも婚家でも女性は財産の相続権はなかった。嫁資の額は碑文資料に基づく計算によると、平均二千六百五十ドラクマである。一ドラクマが前五世紀末の四・五人の家族の一日の生活費程度で、前四世紀後半の標準家族の年間生活費は四百五十から五百五十ドラクマであった。遺産相続などでは証人たちの証言が決め手となった。

結婚の相手を選ぶ基準は、男の側では、嫁資の額、相手の父親または兄弟の社会的評価、相手の家族との友好的関係等が基準となり、女の側（父親または後見人）は、娘婿となる男の出自・財産・人柄・社会的評価・相手の家族との友好的関係を判断の基準とした。女性市民のもっとも大事な役割はオイクスの後継者となる男の子を生むことで、アテナイの場合市民を生

むることができるのは女性市民のみである。正規の結婚で生まれた子供のオイクスの後継者となれる。アテナイは訴訟中毒社会でもあった。職業裁判官はおらず陪審裁判が行われた。陪審員は必ず端数の人数で、投票は穴の開いた青銅版は有罪、空いていないものは無罪であった。訴訟は男性しか起こせない。女性の場合は代理人が行った。弁論を行う弁論作家も多くいたがすべてが真実である必要はなかった。遊女ネアイラは奴隷身分から抜け出し、ステパノスというアテナイ市民と三十年にわたって一緒に暮らした事で訴えられた。この裁判には古代ギリシアの一人の女性の生涯を垣間見ることができ

る。アテナイの女性は法的、政治的、経済的、社会的に著しく権利を制限されて、隔離同然の生活を送っていたという見解が十九世紀には通説となっていたが、二十世紀後半にそれは逆の政治的権利は制限されていたが日常生活では尊重されその社会的地位は決して低くなかったと、千九百二十五年にイギリスの古典学者ゴムが異論を唱

がアテナイのブラウロンの神域である。これら宗教行事での種々の役目に選ばれるのは上流あるいは中流以上の家庭の娘たちであった。少年たちが市民共同体の一員となるための儀式として、わが子をフラトリアに登録する。少年が十六歳になった年のアパトウリア祭の第三日目に父親が生贄を捧げ、息子の髪を切り祭壇に供える。この儀式を経て少年はフラトリア成員として登録され、十八歳になると市民資格の審査を受け、合格するとデーモスに登録され、正式にアテナイ市民と認定される。デーモスへの登録後二年間はエフェボイと呼ばれ集団で生活し、軍事訓練と国境警備の軍務に専心した。

嫁資は一般に動産（現金その他）で、父親から娘に与えられる。婚姻継続中は妻の後見人となる夫の管理下に置かれ、夫はこれを投資などで運用する。妻の死後は子供が相続した。また離婚した場合も妻とともに実家に返還されるか、年十八パーセントの利息分が嫁資返還まで実家に支払われる。夫に離婚を思いとどまらせるには十分な制度である。離婚に際し嫁資を返還しない場合、嫁資返

還の訴訟を妻側は提議できた。利子の支払いを怠った場合に提議する訴訟は「穀物に関する訴訟」と呼ばれ、嫁資から得られる収益には妻の食費という潜在的意味があったことを示している。結婚後も実家の男性の後見人としての立場は消滅することはなく、女性と実家との絆は存続していた。一方、実家でも婚家でも女性は財産の相続権はなかった。嫁資の額は碑文資料に基づく計算によると、平均二千六百五十ドラクマである。一ドラクマが前五世紀末の四・五人の家族の一日の生活費程度で、前四世紀後半の標準家族の年間生活費は四百五十から五百五十ドラクマであった。遺産相続などでは証人たちの証言が決め手となった。

結婚の相手を選ぶ基準は、男の側では、嫁資の額、相手の父親または兄弟の社会的評価、相手の家族との友好的関係等が基準となり、女の側（父親または後見人）は、娘婿となる男の出自・財産・人柄・社会的評価・相手の家族との友好的関係を判断の基準とした。女性市民のもっとも大事な役割はオイクスの後継者となる男の子を生むことで、アテナイの場合市民を生

むることができるのは女性市民のみである。正規の結婚で生まれた子供のオイクスの後継者となれる。アテナイは訴訟中毒社会でもあった。職業裁判官はおらず陪審裁判が行われた。陪審員は必ず端数の人数で、投票は穴の開いた青銅版は有罪、空いていないものは無罪であった。訴訟は男性しか起こせない。女性の場合は代理人が行った。弁論を行う弁論作家も多くいたがすべてが真実である必要はなかった。遊女ネアイラは奴隷身分から抜け出し、ステパノスというアテナイ市民と三十年にわたって一緒に暮らした事で訴えられた。この裁判には古代ギリシアの一人の女性の生涯を垣間見ることができ

る。アテナイの女性は法的、政治的、経済的、社会的に著しく権利を制限されて、隔離同然の生活を送っていたという見解が十九世紀には通説となっていたが、二十世紀後半にそれは逆の政治的権利は制限されていたが日常生活では尊重されその社会的地位は決して低くなかったと、千九百二十五年にイギリスの古典学者ゴムが異論を唱

がアテナイのブラウロンの神域である。これら宗教行事での種々の役目に選ばれるのは上流あるいは中流以上の家庭の娘たちであった。少年たちが市民共同体の一員となるための儀式として、わが子をフラトリアに登録する。少年が十六歳になった年のアパトウリア祭の第三日目に父親が生贄を捧げ、息子の髪を切り祭壇に供える。この儀式を経て少年はフラトリア成員として登録され、十八歳になると市民資格の審査を受け、合格するとデーモスに登録され、正式にアテナイ市民と認定される。デーモスへの登録後二年間はエフェボイと呼ばれ集団で生活し、軍事訓練と国境警備の軍務に専心した。

少年と少女たちの違いは一方が妻・母となることを前提としたのに対し、他方は市民に不可欠な戦士としての訓練を受け、一人前の市民となるための準備だったことである。少女のためのフラトリアやデーモスの登録はなく、妻・母として市民共同体の維持・繁栄に協力することであった。

練を受けたヘタイラはシュンポシオン（饗宴）の席に出かけ芸を披露して知的な会話をした。ヘタイラは女性市民とは全く違う生活スタイルで彼女らなりの文化を築いていた。ペリクレスの愛人アスパシアもヘタイラであった。彼女の政治における知識・教養は相当なもので、ペリクレスに助言を行ったと言われている。ペリクレスはアテナイ人の正妻と離婚してメトイコイのアスパシアと同棲した。

(5) 祭儀の在り方

ギリシア人の宗教的世界観、神話観は基本的に過去を回顧する傾向があり、ギリシア宗教の基盤を成す神話と伝説は祖先崇拜と緊密に結びついて最初から市民共同体（ポリス）の結束のために強力な作用を成し得たのである。

ギリシアには通常の聖域とは別格の二大聖域が存在した。オリュンピアとデルフォイである。オリュンピアは大神ゼウスに、中部ギリシアにあるデルフォイは青年神アポロンに捧げられた聖域である。多くの人が神託を聞くため訪れ、情報交換の場ともなった。

アドニア祭はメトイコイ身分のヘ

タイラや内妻による祭りであり、男たちを招待して飲食を楽しむ乱痴気騒ぎの祭であった。他方男性を排除したテスモフォリア祭ではアドニア祭とは対照的に禁欲や断食が求められた。国家祭儀として中心市で行われる祭り（ヘタイラや奴隷も参加したとみられる）と各デーモスで行われるローカルな祭の異なるレベルのテスモフォリア祭があった。特に各デーモスで開催される地方のテスモフォリア祭は市民身分の女性たちが集まり、自分たちの正妻としての立場を相互に承認し合う場であった。一夫一婦制を社会秩序の基盤としながらも、婚姻関係を公的に認定する制度のないアテナイで実際に一夫一婦制を定着させ、オイコスに基礎を置く社会的秩序を維持するためには、ポリスの構成員の自覚的なあるいは積極的な行動が必要であった。デーモスのテスフォリア祭は、オイコスの存続のために嫡出子の確保を達成させるといふ機能を有する祭りで正妻の地位を確固とさせるために必要な場であった。正妻だけが参加して相互の地位を承認しあう、それは正妻と内妻の違いを人々に意識の中に定着させる機能を有し

ていた。正妻以外の女性を差別することによって一夫一婦制を強固にしようとする仕組みを見ることのできる。デーモスのテスモフォリア祭はあくまで社会秩序を支えるべき趣旨を担った祭儀で、社会の枠組みを崩し、非日常的な場を現出させたのは、中心市における国家祭儀としてのテスモフォリア祭であった。また、国家祭儀であるエレウシスの秘儀は市民身分のみならず、女性、メトイコイ、外人、奴隷のいずれもが参加可能であった。そこには国の存立、繁栄のためにメトイコイや奴隷に依拠するところの大きかったアテナイの体質が反映している。

(6) まとめ

自由と平等の理念の上に絢爛たる文化を開花させた都市、プラトンが「叡知の殿堂」と呼びペリクレスが「全ギリシアの教育の場」と称えたアテナイ。その閉鎖された空間の中で、市民相互の絆を深めるための社会組織を男女それぞれが特有な場で築いていた。

アテナイの文化や経済の発展の陰にはメトイコイや奴隷たちの力が大きく、対外的には同盟参加諸ポリ

スを従属させることによって、アテナイの繁栄が実現していたといえる。一つ一つの小さい社会の絆を包括してアテナイという強い絆を持つポリスが存在するのである。

*アテナイの文献史料・考古史料・美術史的史料は数多く発見されている。1994年から95年にかけてアテネ・ケラミコスの地下鉄駅建設の過程で集団埋葬跡が発掘された。極めて状態のよい頭蓋骨が確認され、紀元前430年、アテナイを襲った疫病は腸チフスのパデミックによる可能性が高いと結論付けられた。

〔参考文献〕

『古代ギリシアの女たち』

桜井万里子

『英雄伝』

プルタルコス

『訴えられた遊女ネアイラ』

デブラ・ハメル

『アテナイ人の国制』

アリストテレス

会員研究

信念と行動の旅人

笹森儀助

木村 高久

1 はじめに

笹森儀助は人生半ば過ぎにおいて、十年間以上辺境の地で旅また旅を続けた。よって儀助を漂泊の旅人という人もいるが、決してそうではない。国の為、民の為になると信じ、かつ身の危険も顧みず調査旅行を実践した人である。

日本民俗学の創始者である柳田国男が昭和九年「島の三大旅行家」という一文に、南島（沖縄等）を踏査した白野夏雲、田代安定、笹森儀助は民俗学徒にとり忘れがたき俊傑と讃えている。その中でも儀助の旅は豪快であり、かつ文献上の功績において他の二者に勝ると称賛しているのである。そこで、儀助が如何なる人で、如何なる事を為したかを論ずることとする。

2 儀助の半生

笹森儀助は弘化二年（一八四五）一月、陸奥国弘前在府町（現青森県弘前市）に誕生。父は笹森重吉

換えて生涯奉仕したのである。

さて、父死去の同年十月儀助は小姓組に入り親の家禄百五十石を継いだ。儀助と弟栄吉は母に養育されていたが、その母が文久三年（一八六三）七月死別する。儀助が十九才の時であった。儀助は安政六年（一八五九）一月から慶応二年（一八六六）まで藩校稽古館で学ぶ。在校中、藩士山田登に師事し武芸を修めると共に思想的にも最も影響を受けたといわれる。

山田は一刀流師範から小姓組頭、勘定奉行手伝兼務、翌年大寄合格御用人手伝に昇格。山田は過激な憂国論者であった。過激といっても暴力や破壊活動をするのではない。お上に藩政批判の意見書を提言することである。このため幾度か藩主から処罰されていた。慶応三年（一八六七）十月、再び国政改革の意見書をお手廻役に就任したばかりの門弟儀助と同僚に命じて藩主の机上に置かせたのだ。この越権行為に怒った藩主から直ちに三名は永蟄居にさせられた。儀助二十三才である。家禄は三分の二が減らされて僅か五十石となる。

しかし、晩年まで山田を師として尊敬していたと言ふ。

明治三年（一八七〇）春、儀助は特赦で晴れて自由の身となる。同年九月弘前藩庁民生局の権少属・租税掛に任命される。翌年廃藩置県となり明治五年（一八七二）一月県史生、区長等を歴任する。この間、飢饉に苦しむ村の救援や旧体制の民政や財政の立て直しなどに従事した。

明治十一年（一八七八）十月、三十四才で中津軽郡長に就任する。この職で教育や医療機関の充実に尽力する。中でも当時、弘前に三六四八戸の土族（ほとんどが無職）のうち一〇〇〇戸余りは三食の粥すら啜れぬほどの貧困であった。このため土族の授産問題に心を砕いていた。明治十四年（一八八一）十一月、儀助は山田県令と対立し中津軽郡長を辞職する。

翌明治十五年五月、弘前藩の旧馬牧場であった常盤野に「農牧社」を開業する。開拓の目的は旧土族の授産の為であった。社長は元家老の大道寺繁楨が任命され、儀助は副社長となる。明治十九年（一八八六）儀助が社長に就任する。事業は自然環境が厳しいこともあり当初は散々で

あった。その後、浮き沈みもあったがまあまあ順調に進展し政府拝借金も完納できたので明治二十三年（一八九〇）九月辞表を提出するも却下される。ようやく明治二十五年（一八九二）になり辞表が受理された。

3 旅そして旅を重ねて

明治二十三年十一月、第一回帝國議会が開会される。儀助は帝國議会に大いに期待して上京し、一日も休むことなく議会に足を運び傍聴した。しかし、党利党略に終始し国益を顧みない議会に失望し、明治二十四年（一八九一）三月以降傍聴することを止めた。そして二度と議会に臨む事はなかった。

（1）貧旅行

儀助の「貧旅行之記」によれば、「机上だけで全国の地租（地租軽減地価修正論）の軽重を決めようとする政治家の為す所を見れば兎戯に等し。是を以て親しく民間の実況を察し国力の實際を究め併せて宿志を達せんと欲し遂に七十日間貧旅行をなすに至る」と記述されている。本目的に基づき、明治二十四年四月から貧旅行を開始する。儀助四十七才である。同月五日に横浜から汽船駿河丸に乗船

し、翌日四日市に上陸する。近畿・中国・九州を七十日間巡り上京した。

この間、伊勢・飛鳥・奈良・明石・太宰府・霧島・高千穂などの名所旧跡を訪問している。観光の側面があるのは事実であるが、単なる娯楽だけの旅ではない。名所見物のもとに県庁を訪問し、農耕状況について聞き取りをしている。また、勸業試験場の見学を行い牧畜・養蚕の実態調査を実施するなど各地において産業・交通・民間の生活実態調査を限なく行っているのである。

（2）千島探検

貧旅行から戻った儀助は、明治二十五年（一八九二）千島探検を企図して政府に軍艦乗艦を願い出る。同年六月十五日海軍省から許可が下りた。千島周辺での米国・ロシア漁船の密漁・密猟により、我が国の経済的な損失は計り知れない。この探検が目的であった。

なお、探検にあたり郷土の知人で日本新聞社社長陸羯南から調査事項を教示された。「国境の境界・自然・地理・産物・原住民の人種・風俗・習慣・宗教・生業・各島の歴史・伝説・遺跡・航路の実情」

り、一方、島民が困窮している様子を憤りを覚えていた。

（イ）沖縄の政治・行政の内実

明治十二年の琉球処分後における旧王家尚氏一門、旧士族の動向や島民感情を観察する。特に対清国について調査した。旧士族は黒党・頑固党・開化党の三派がある。黒党は清国専属主義で、しばしば清国に密航し清国政府の支配にするよう嘆願する。これは重大事態であると認識した。頑固党は日清両属主義。故に清国により復旧を図るは黒党と同じであった。また、開化党は日本に専属している。

（ウ）琉球の歴史・文化等調査

琉球の遺跡、宗教、民俗、文化など広範囲に渡り調査をしている。後の南嶋研究に影響を与えた。

（エ）民情調査

何よりも儀助が傾注したのは、南嶋の民情調査であった。

①鹿児島港から那覇港までの航海で儀助は灯台新設の必要性を強く訴えている。

②西表島で医師の有無を尋ねたところ、一昨年西表村の病院が廃止された。以後巡回医師が昨年八月頃一回あったが本年は一度もない。有病地にして病院も医師もないあ

であり、儀助は各項目について細かく観察・調査を実施している。後の南嶋探検なども同様の調査方法が行われた。

明治二十五年六月二十二日弘前を出発十月十五日帰宅する。旅行日数百十六日間。うち、在艦日数六十三日、陸路旅行日数五十三日であった。函館で軍艦警城に乗艦し七月五日出航する。厚岸、根室に寄港後、千島列島に沿って北上しシムシム島に上陸した。途中同じく千島探検を実施中の片岡利和侍従一行の船に遭遇したことが感情的に描かれている。本調査では各島の現状、島民の戸数・生活状況などを掌握した。

この時の旅行記を「千島探検」としてまとめ上げる。内容は感情論でなく具体的数値などの根拠をもとに冷静・客観的に記載されている。本書は、明治二十六年（一八九三）二月、井上毅秘書官長の斡旋で上奏され明治天皇も閲覧されたという。

（3）南嶋探検

日清戦争が開始される前年の明治二十六年四月、千島探検に関して井上馨内相を訪問した。そのおり井上から輸入糖を抑制し、何と

り方を批判している。

③赤貧洗うが如き西表島高那村七戸への課税は実に恐るべきものであるとして、実額を列挙している。そして以上の割合を以って男女十五歳以上五十歳まで、人頭税（分頭税）を免れない。男は終年耕作しても唐芋すら飽きるほど食べられない。女は終年織るも襤褸で身を覆うことしか出来ない。この日本国民（陛下の赤子）を放置するのかと怒り心頭に発していた。なお、後年人頭税が撤廃されるが、儀助の旅行記が多いに貢献したところである。

④新城島・黒島には水田が無いにもかかわらず水田の課税がされている。このため、西表島南風見村へ耕作に行かざるを得ない。役人はこの様な理不尽を知っているのかと糾弾する。

（オ）南嶋探検の結果、儀助は島民の多くが極貧にあえぎ虐げられていることに衝撃を受けた。儀助の視点は常に弱い民衆の味方であり、不正義や横暴などに対しては政府であろうとも批判を憚らなかつた。のちに旅行記を「南嶋探検1」、「南嶋探検2」として発刊し、柳田国男、鳥居龍蔵など多く

か国内産製糖の増進・振興を促進するため、南嶋の製糖業を拡大しなければならぬ。については、その可能性を調査して欲しいと依頼された。儀助は東国の出身であるからと一旦は即答を避けたが、余生を国益の増進に捧げるため承諾したと述べている。

儀助の旅行記「南嶋探検」の冒頭に決意が書かれている。「明治二十六年五月十日午前九時、琉球群嶋探検として、家族知友に別れを告げ弘前を発す。此行二大危害の前路に横たわるあり。何ぞや、毒蛇（ハブ）の螫咬也、瘡瘍毒（マラリア）の感染也。（略）余は已に決死の上途なれば（略）」とある。弘前から出立した時は決死の覚悟であった。

(48)

本探検で儀助はマラリアにこそ罹らなかつたが病に倒れたし、地元の人でも二の足を踏むような危険な箇所も踏破した。使命感が強い人である。

また、この探検にあたり何等の肩書もなく、金銭の補助もなくすべからずであった。まさに草莽の士としての探検である。

そして、儀助の服装と言えは肌着に芭蕉布一枚、その上に兵児帯

の人々に影響を与えたところである。

4 千島・南嶋探検の後で

（一）儀助の南嶋探検を高く評価した井上内相が、南嶋の糖業発展のため儀助に大島島司就任を説得し、やむなく儀助は了承する。

南嶋探検の翌年、明治二十七年（一八九二）九月十日、儀助は第五代大島島司に任命されたので、次女のつるを連れて奄美大島へ赴任する。そして四年間島司として勤務した。儀助は大島運営のため二大目的を設定する。一に大島の基本産業である糖業の改良であり、

二は負債の償却である。このため明治二十九年（一八九六）四月に糖業の先進地域である台湾の実地調査を行い、そのうえで改善事項を高島拓殖務省大臣に提案。さらに人材発掘も併せて行った。また、

二十余年にわたる島民の負債総額調査を実施し、償却の具体的施策を立案のうえ樺山資紀内相へ具申する。これらが島民の生活向上に大きく貢献したことから初代島司の新納中三と共に儀助は今でも島民に慕われている。（平成二十九年六月、大島郡龍郷町に儀助の顕彰碑が建立された。）



（沖縄探検旅行中の笹森儀助・ウイキペディアから転写）

五月二十七日、儀助が乗船した陸奥丸が神戸を抜錨し六月一日那覇港に到着する。約五か月間を駆け、沖縄・先島（宮古島・八重山群島の総称）・奄美の探検調査を実施し、故郷に戻ったのは十一月八日であった。この間の主な調査状況は次の通りである。

（ア）井上内相からの依頼事項

宮古島や沖縄国頭の役所長および奄美大島司から製糖に関することについて教えを乞う。また、石垣島名蔵の中川開墾や同島宮良の田村開墾地の実査、さらに沖縄国頭役所長の案内で製糖所を視察する。加えて奄美では砂糖売買について鹿児島商人が独占し暴利を貪

明治三十一年（一八九八）八月、儀助は島司を辞任する。その理由として、砂糖売買において鹿児島商人の横暴な強奪から弱者の島民を守ったことで鹿児島商人と対立したことによるといわれている。

(2) 明治三十二年（一八九九）五月、清・韓・日三国の友好と連携を目指す東亜同文会（会長近衛篤磨）の囑託として朝鮮へ渡る。その目的は、東亜同文会から学校の設立と運営を委嘱されたためである。咸鏡道城津学堂を開校させ学堂長の任に就く。この間、北朝鮮沿岸を巡視すると共に更にシベリア視察旅行を実施し朝鮮半島での列強の動向やロシアの政治的、軍事的状況を探査する。なお、北朝鮮沿岸では日本漁船の悪質乗組員と沿岸住民とのトラブルが絶えないことがあり、儀助は日本人乗組員を非難している。

明治三十三年義和団事件が勃発し、ロシアは満州一帯を占領する。さらに朝鮮にも侵攻する恐れがあることから鏡道学堂を廃校とする。翌年六月儀助は帰国した。

(3) 明治三十五年（一九〇二）四月、韓国から帰郷した儀助は農業に従事していた。

その頃、初代青森市長の工藤卓爾が国会議員に出馬を決めていて、後任につき側近と協議したところ

儀助に白羽の矢が立った。擁立の理由として、儀助は「外交の手腕がある」、「人柄が公平無私である」また「真面目な人である」などを挙げていた。同年五月六日、儀助は第二代青森市長に就任する。時に五八才であった。

当時、青森市は市税滞納者が多数いて徴収未納金が巨額であった。このため最大の課題が市の紊乱した財政を正し、市政刷新を図ることである。早速徴収未納金について調査の結果、複数の職員による公金横領問題が発覚した。明治三十五年度の県税市税の未納額が二万四七七三円余である。この内大半が十名ほどの職員に横領されていたのだ。厳しく督促して返還させた結果、横領金を四八〇円余に減額できた。その他、市民の衛生思想の普及や人材育成のための商業補習学校の開設に尽力した。所期の目的を達成した儀助は明治三十六年（一九〇三）十二月市長を辞職する。

(4) その後、いくつかの職を経験したが、晩年不遇のまま大正四

年（一九一五）九月、逝去。享年七十一才であった。

5 むすび

(一) 儀助の基本的行動としては二つある。一つはロシアそして欧米列強から脆弱な日本の独立を守ることであった。母の教えによる憂国の士としての働きであった。

一つとして儀助は一貫して社会の底辺で呻吟している民衆に寄り添った人である。「南嶋探験」でその事例を列挙したが、さらに追記すれば①沖繩国頭で役人も村人も見捨てた全身腐敗で悪臭立ち込めるハンセン病患者（二十歳代と七歳位の児女）の小屋に同じ日本国民ではないかと面会に行った。

②また、与那国島では六十代の新村役人が来島し十七才の娘の両親を威嚇して娘を妾にしたことについて、悪しき旧習であり直ちに止めさせるべきと指摘した。

(二) 儀助はただ悲憤慷慨しているだけの人ではない。また、口舌の徒でもない。問題があれば現状を把握するに極力現地に赴き自分の眼で確認する。その上で客観的に分析し、さらに解決策を添えて政府や役人・有力者に具申する。あるいは書籍にして世間に公開し世

論の支援を得て課題改善に努めた人であった。

儀助の人生は波瀾万丈であったが、常に世の為、人の為に無私で行動した人物であった。(終)

参考文献

- 1 「千島探験」笹森儀助著 至言社 1977年6月発行
- 2 「南嶋探験1」東 喜望著 平凡社 1982年7月
- 3 「南嶋探験2」東 喜望著 平凡社 1983年12月発行
- 4 「笹森儀助の軌跡」東喜望著 法政大学出版局 2002年4月発行
- 5 「続百代の過客上」 ドナルド・キーン著 朝日選書 1988年1月
- 6 「辺境を歩いた人々」 宮本常一著河出文庫 2018年6月発行
- 7 「ほんの中の旅」湯川豊著 中公文庫 2016年2月発行
- 8 「独学のすすめ」谷川健一著 晶文社 1996年10月発行
- 9 「雪日本 心日本」 高田 宏 中公文庫 1988年11月発行

特別寄稿

牛と古代びと

松尾 光

一、牛と宮廷

今年は丑年なので、古代びとと牛の関わりのお話をしてみる。

『日本書紀』では、月夜神に斬り殺された「保食（うけもち）神、実に己に死れり。唯し其の神の頂に、牛馬化為る有り」（神代上、一〇二頁）とあって神代の昔から生息していたかのような記事だが、『魏志倭人伝』（新人物文庫本）には「其の地に牛・馬・虎・豹・羊・鵠無し」（四八頁）とあり、弥生時代でも牛はまだいなかった。

しかし奈良時代ともなれば、『日本古代人名辞典』の「あくう」の検索だけでも、牛（五百木部）・磯特牛（しことひ・阿閉）・牛養／牛甘（安都・阿倍・朝日・荒田井・井門・石川・出雲）・牛長（出雲）・牛麻呂／牛万呂（縣主族・孔王部・海部・伊奈利・伊福部・磯部・宇遲部・有度部）・牛女／牛壳（海部・鳥那）など名に牛と付ける人が大

勢いた。牛という名は、モー珍しい。くない。

このうち伊福部牛麻呂は大宝二年（七〇二）戸籍で二歳とあり、大宝元年（辛丑）の生まれだから牛麻呂（丑年の男）となった。五百木部牛は同じく六十八歳で生まれは六三五年の乙未年なのだ。妊娠期間の大半が甲午の丑年だったので、牛と命名されたらしい。十二支の知識がこの時代にすでに普及していたことはこれで判るが、名があるだけでは、牛を眼にしていたかどうかまで判らない。「知らなければ付けないよ」というかもしれないが、誰も辰（龍）を実際に見ていなくとも、坂本龍馬とか矢野竜子とかいっている。

このなかに牛養という名がある。これに似た馬養（馬甘／馬飼）・犬養（犬甘／犬飼）・鳥養（鳥甘）などは、それぞれ馬飼部・犬養部・鳥養部などが実際にいて、飼育に

従事している。それなら牛養という名も、牛飼に従事者がいたことの名残りだろうか。

残念ながら「牛養部+姓」という氏族は見当たらない。だが、牛の飼育を生業とする人たちはたしかにいた。それが乳戸である。

『続日本紀』天平十六年（七四四）二月丙午条のいわゆる「品部雑戸の解放」発令までは王宮に乳戸が附属していた。『令集解』職員令典薬寮条に「薬戸乳戸」とあり、官員令別記の注解で「薬戸七十五戸……乳戸五十戸、経年一番に十丁を役す。右二色の人等、品部と為し、調雑徭を免す」（上、一二九頁）とする。つまり典薬寮管轄下の乳戸五十戸が毎年十戸で番を作って乳牛の世話をし、牛乳を王宮に供給していた。この乳戸の起源は、大和王権の財政を支えた屯倉にまで溯る。「平城宮木簡」に「備前國兒嶋郡三家郷「牛守部小成／山守部小廣」二人調塩二斗」（平城宮木簡一の三二一）とあり、欽明天皇十七年（五五六）七月己卯条に見られる兒嶋屯倉にはかつて牛守部が置かれていた。乳戸の解放後も専門従事者は残り、『延喜式』によれば典薬寮管轄下で乳牛

七頭・犢（こうし）七頭が飼育され、日別大三升一合五勺（二・二七リットル）を納入していた。飲む牛乳のほか、蘇（酪）つまりバターかチーズの加工もしていたろう。この制度はさらに続き、『政事要略』には乳牛の課法（使用方法）として搾乳は「元来四歳より起こして十二歳で停むること行来年久し」（巻五十五・交替雑事、三六六頁）だったが、元慶五年（八八一）からの四年間は十九歳まで搾乳した。それを元に戻したいと申請している。つまり少なくとも六世紀から古代を通じて、乳製品は薬品・栄養食として王宮に提供され続けていた。天皇のみの食用とみなされていたが、長屋王家跡から「牛乳持参人米七合五夕」「牛乳煎人一口」と記された木簡が出土し、貴族も独自に調達していたことが知られた。

さて乳製品だけでなく、牛本体の肉は食べられていたろうか。というのも、牛馬は軍用という認識があるからだ。「天平六年出雲国計会帳」十月廿一日条の進上公文二十六卷四紙のなかに兵馬帳・官器仗帳・伯姓器仗帳と並んで「伯姓牛馬帳」があり、軍の徴発の予備調査と見れば、兵士の食用かと

も思える。しかしこれは考えすぎのようで、『日本書紀』天武天皇四年(六七五)四月庚寅条の詔で「牛馬犬猿雞の穴を食ふこと莫(まな)。以外は禁の例に在らず」とあり、天平二年九月己卯条の聖武天皇の詔でも「陸(おり)を造りて多く禽獸を捕らふることは、先朝禁断す」とあって先朝の趣旨は継承されている。牛の食肉は国家の方針として禁じられていた。ただしこれ以前は食肉していたわけだし、詔でも縄文・弥生時代からいちはん食べられてきた鹿・猪や兎は外しているから「肉食は仏教教義の趣旨にそつてすべからく忌避されていた」というのじやなきそうだ。

軍が牛を重視していたのは、運搬のためだったらしい。『日本後紀』延暦二十三年(八〇四)十二月壬戌条には「牛の用たるは、国に切要在らむ、重きを負ひて遠くに致す。其の功、実(まこと)に多し。聞く如く、無頼の輩、争(まが)か驕(おご)修(しゆ)を事とし、尤も斑犢(はんとく)を剥(む)ぎ、競(まが)ひて鞍(あ)修(しゆ)したぐら(に)用(もち)ゆ」とある。牛革(ぎゅうが)を馬具(ばぐ)や革甲(がっこう)などに用いるのも事実だが、生きている間は、その強力な運搬力に期待していたようである。

村々が借り、貸し出し時には山菜・川魚も齎(もち)し、豆腐・草餅などを負わせて返していた。山人と里人の共存する一つの形が窺(うかが)える、と記されている。

これ以外に、民間で行われていた、いまでは奇妙に思われる古代的風習があった。それが殺牛祭祀である。

『日本書紀』皇極天皇元年(六四二)七月戊寅条に「村村の祝部の所教の随に、或いは牛馬を殺して、諸の社の神を祭る。或いは頻りに市を移す。或いは河伯を祈る」とある。『日本霊異記』でも中巻第五縁には「漢神の崇(たか)り依り牛を殺して祭り、又放生の善を修して、以て現に善悪の報を得し縁」として、「彼の家長、漢神の崇に依りて祈シ、祀るに七年を限りて、年毎に殺し祀るに牛一かしら(を)以(も)ち、合せて七頭殺し、七年にして祭り畢(は)りき」とあり、第二十四縁では檜磐嶋(ひのいわじま)が「我が家に斑(まだら)なる牛二頭有り。以て進らむが故に、唯我(ただわれ)を免(ま)せ」と持ちかけて鬼の買収に成功している。

殺牛祭祀の起源を中国とは決めがたいが、ともかく『漢書』には秦の始皇帝が五名山(五岳)大川を祀ると

二、民間における牛

牛を運搬に使ったと記したが、じつは古代に運搬といえは荷駄(かた)の大半はぶつう馬(うま)が担(か)うことになっていた。その常識は、駄馬(だば)・駄賃(だちん)に馬偏(うまへん)が付いていることから推測できる。牛は馬より強力だから重いものを輓(ひ)くのに適しているが、速度が出せない。その点、馬の方が単体で速く走れるし、また一頭の馬だけではさしたる力にならないとしても、馬は動物にめずらしく二頭立て・四頭立てなどにできる協調性があった。馬には力不足を補う方法が取れたが、牛は基本的に一頭でしか使えず、合力しない唯我(ただわれ)独尊(どくそん)的な生き物だった。

民間社会はこうした過重(かじゆう)な物資の運搬と縁(ゆかり)深く、牛などづくに必要(ひつよう)なきそうだが、『日本霊異記』などには家で飼育されていた様子がそこそこ窺(うかが)える。

上巻第十縁には、倉の下に立っていた牛が「私はこの家の主人の親だった(が)、前世で子の稲を十束盗んだことがある。そのため牛に生まれ変わって、その償(か)いをしてい(る)」と僧侶(そうりょ)に告白(こっぴど)している。また中巻第三十二縁でも、牛が「私は桜村(さくらむら)にいた物部(ものべ)磨(ま)だが、以前(いぜん)に(葉王(はおう))

寺の薬(くすり)の基金(きんぎん)の酒(さけ)二斗(にとう)を借用(かいく)して、返済(はらい)しないまま死亡(しつじ)した。その借りを返すために牛(うし)となって使(つか)われている。寺(てら)の人はいたわりの心がなく、背(せ)を打(う)つてむ(む)こ(こ)き使(つか)うので、たいへん苦痛(くるう)だ。いま五年使(つか)わ(れ)ていて、債務(せむ)はあと三年も残(のこ)っている」と涙(なみだ)ながらに話(はな)した、という。こうした因縁(いんえん)話は上巻(じょうま)第二十縁(じゅうじゆ)や中巻(ちゅうま)九縁(きゅうえん)・十五縁(じゅうごえん)などにもみられるから、債務不履行(せむふりやう)による役身(やくみ)折酬(せきしゅう)(えきしんせつしゅう)の形(かたち)は、牛(うし)のように酷使(こくし)されるというの(う)が一致(いち)した見方(みかた)だったよう(う)だ。

使役(しやく)の用向(もちまう)きは、重い物資(ぶつし)の運搬(うんぱん)もときとしてあろう(が)、村落(そら)で期待(きたい)されていた(のは)農耕(のうこう)の田起(のり)しのさいに唐犁(たうり)を輓(ひ)く仕事(しごと)だった。

古代(こくたい)日本(にっぽん)の稲作(いねさく)は、基本的(きほんてき)に水田(みづゐ)への田植(のり)え農法(のうぽう)だった。引(ひ)いた灌漑(かんがい)水(みづ)のなか(に)ある栄養分(えいようぶん)によつて稲(いね)は生育(じふい)するので、前年(ぜんねん)から放置(はき)されてい(る)稲茎(いねかき)の残骸(ざんがい)や付近(つきぢん)の雑草(ざくそう)をすき込んで腐葉土(ふようど)としたり草木灰(そうもくはい)を掛(か)ければよく、厩肥(うしご)など特別な施肥(とくべんた)は必要(ひつよう)としなかつた。そう(は)いって(も)仕事(しごと)もあり、五月(ごご)の田植(のり)えに先立(さきだ)つて、一方(いっぽう)で苗代(なえしろ)を作り、他方(たうほう)で田圃(のりぼ)の田打(のりうち)・代掻(しろか)きをした。『万葉集(まんやふし)』

打(う)つ田(で)に 稗(は)はしあまた
ありと言(い)へど 選(えら)えし我(われ)そ
夜(よ)をひとり寝(ね)ぬる

(卷(ま)十一(じゅういち)―二四七(にじゅうしち)六(む))

などとみえる。この過程(かじゆう)で田(で)の土を深く掘(ほ)り起(おこ)して空(く)を送(おく)り込み、土塊(つちかた)を砕(くだ)いて平(ひら)すのだが、この仕事(しごと)には相当(たうとう)な筋力(すぢりき)が必要(ひつよう)になる。その用具(ようぐ)が唐犁(たうり)で、中国(ちゆうごく)または朝鮮(ちゆうせん)半島(はんとう)から伝授(でんじゆ)された大型(たうけい)の鋤(あ) (鋤(あ)である。十(じゅう)人力(にんりき)の耕具(こうぐ)だ(が)大型(たうけい)過ぎて人力(にんりき)で動(うご)かせないから、力(ちから)のある牛(うし)に輓(ひ)かせること(なる)。苗(なえ)や収穫(とくわく)稲(いね)の運搬(うんぱん)など(にも)使(つか)う(が)、唐犁(たうり)を使(つか)う(た)めには牛(うし)が欠(か)かせない。

だが数(た)げ月の使用(しゆじゆ)のために一年(いちねん)中(ちゆう)飼(か)うのは、大層(たうじやう)な物入(ものい)りである。そう(は)したとき(には)、い(ま)でも高価(たうげ)なコンバイン(コンバイン)(収(と)穫(とく)・脱(だ)穀(こく)・選(えん)別(べつ)用(よう)農機(のうき)を複(た)数の農家(のうけ)で共同(きゆうどう)購(か)入(にゅう)するよう(に)、余(あ)裕(よ)のある家(の)が代(た)表(ひょう)して飼(か)つて、そ(の)契(せ)約(やく)して借(か)りればよい。知(ち)恵(え)を働(はたら)かせればい(く)らも思(おも)案(あん)はある。上野(じやうの)誠(まこと)氏(ぢ)著(しやく)『万(ま)葉(や)びとの生活(せいか)空間(くわん)』(はなわ新書(しんしよ)、二〇〇〇(にじゅう)年(ねん))には、昭和(しやうわ)三十(さんじゅう)年(ねん)代(だい)まで奈良(なら)盆地(ぼんち)の村々(むらむら)では、山間(さんかん)部(ぶ)の村(むら)が飼(か)つてい(る)牛(うし)を平野(ひらの)部(ぶ)の

きに牛(うし)・犢(とく)各(ご)一(いち)頭(とう)を捧(た)げ(郊(きやう)祀(し)志(し))、漢(わん)の武帝(てい)が后土(こうど)神(かみ) (土地(ち)の神(かみ))に牛(うし)の角(かく)を供(とも)えた(と)ある。なにより犠牲(ぎせい)の字(じ)が牛偏(うしへん)だから、背景(はいけい)に牛(うし)の供献(こうけん)習俗(じゆふく)を窺(うかが)知(し)でき(よう)う。この風習(ふうじゆ)は中国(ちゆうごく)周縁(しゆえん)の扶余(ぼよ) (中国(ちゆうごく)東(とう)北(ほく)部(ぶ))・宕昌(たうぢやう)羌(きやう) (とうしやうきよ)う・甘肅(かんそ)省(しやう)南(なん)部(ぶ))・党項(たうきやう) (たうけう)ト・中国(ちゆうごく)北(ほく)西(せい)部(ぶ))に波及(はくわく)した。この風習(ふうじゆ)は新羅(しんら)にもあつた(こと)が、一九八八(じゅういち)八(はち)九(きゅう)年(ねん)発見(はつけん)の石碑(いしひ)で判明(はんめい)した。「蔚珍(ういしん)鳳(ほう)坪(びやう)碑(ひ)」(六(む)世紀(せいき)初(しよ)頭(とう)、法興(はうけい)王(わう)時(じ)代(だい))には「新羅(しんら)六(む)部(ぶ)煞(さ)斑(はん)牛(ぎゅう) (六(む)世紀(せいき)初(しよ)頭(とう)、智証(ちしやう)王(わう)日(にっ)冷(れい)水(すい)碑(ひ)」(六(む)世紀(せいき)初(しよ)頭(とう)、智証(ちしやう)王(わう)時(じ)代(だい))には「事(じ)煞(さ)牛(ぎゅう)被(ひ)誥(ご)故(こ)記(き)」とあつた。新羅(しんら)では斑(まだら)牛(ぎゅう)を用(もち)いており、日本(にっぽん)は殺牛(ころし)信仰(しやうけい)を新羅(しんら)から学(まな)んだ(こと)が明(あ)らか(である)。中国(ちゆうごく)では「犧(ぎ)、純色(じゆんしき)牛(ぎゅう)」(『玉篇(ぎく)』)とい(う)い祭(まつ)祀(し)用(もち)牛(ぎゅう)は単(たん)一(いつ)の毛(け)に限(かぎ)つており、斑(まだら)牛(ぎゅう)は用(もち)い(な)かつた(から)だ(門(もん)田(でん)誠(まこと)一(いつ)氏(ぢ)「東(とう)ア(ア)ジ(ア)ア(ア)における殺牛(ころし)祭祀(まつ)の系譜(けいふ)」「佛(ぶつ)教(きやう)大(だい)学(がく)歴(れき)史(し)学(がく)部(ぶ)論(ろん)集(しゆ)」「創刊(そうかん)号(ごう)、二〇一(にじゅう)一(いち)年(ねん)三(さん)月(げつ)」。農家(のうけ)にとつて牛(うし)は頼(たの)りがい(のある)助(すけ)っ人(ひと)だが、貴重(きちゆう)だ(つた)から(こそ)祈禱(いのり)のさいに成否(せいひ)の決(けつ)め手(て)ともみ(な)された(ので)ある。

(以上)



▲火牛之計(かぎうのけい)：出典は『史記』。中国の戦国時代の齊の田单や、日本では1183年、俱利伽羅峠の戦いで約5千の木曾の源義仲(木曾義仲)軍が約10万の平維盛軍を打ち破った時の奇襲戦法で、牛の角などに火をつけて敵陣に突撃させ、勝利した戦法。 作画：高尾 隆氏

春を詠む

谷川 操一

ひたひたとテトラポットへ春の潮
海胆舟の傾くままに箱眼鏡
沈丁の香のつながりし石畳
連翹れんぎょうとわかる一叢敷の中
ムツクリのコタンの調べ春の宵

ムツクリはアイヌの竹笛

雑詠

竹内 章一

水ぬるむ水琴窟の眠り醒め
疫病禍行法不退修二会悔過
サクラサク全身笑顔の孫娘
胡蝶舞ひ夢幻に誘ふ能舞台
共白髪無言で寄り添ふ春の海



壇はま
俳研よ 歴

風光る

藤盛 詔子

恥じらひの紅ほんのりと白牡丹
桜餅しつとりぬれし葉の匂ひ
風船の空に揚がれば空の色
容赦なく過ぐる歳月麦の秋
風光る地下足袋の車夫客待てり

春らんまん

竹村 清繁

いち早く春をまとへる少女かな
うすらひのゆるみし水の青さかな
舌出して貝が歩くよ目借時
悪友に先立たれたる日向ぼこ
指先を風の離れずわらび摘む

初蝶

高島 治

北開く記憶の扉さび付けり
暦より確かな息吹露の臺
踏青や地球の軋む温暖化
落椿自決のごとく清しけり
初蝶や生ずる喜び描きおり

腹の底から

市川 康夫

香を残す乙女の笑顔春の風
浮き立ちて老いも若きも花の雲
牛蛙腹の底から夏来たる
松濤に打ち消さるらむ雨の月
遊行寺や大樹の銀杏落葉踏む



市川康夫

高野賢彦

山本修司

壇はま

中学校「抜刀隊」のメロディーに
毎月八日分列行進

银杏(ぎんなん)の黄葉ちり落ちて
青空を北へ流れるひとひらの雲

雨あがり束の間の風さわさわと
アガパンサスの揺れる緑道

交響的練習曲をクロイツァー
響かせにけり耳驚かせ

初春に清らかに咲いた水仙の
美しく愛らしきかな

酷暑耐えふつとひと時息をのむ
夕紅雲に紅さるすべり

秀磨は競技者のごと肘を振り
指揮台に立ち汗を拭へり

縁側でお茶を飲みつつふと思う
凡人の日々もたのしきやと

長いこと巢ごもり続きコツ掴む
飲食注意発言注意

微笑みてG線長く弾きのぼし
巖本真理のながき金髪

声高に談笑をしてふと気づく
諫める人のそばに在りしを

直前に怒り爆発隣席が
テレビコントに呵呵大笑だ

耕作は枳殻の花咲かせけり
北の果てには時計台立ち

茜^{あかね}雲あやしく光るその陰に
奇しきものや隠して在りなん

大木は枯葉しんしん寺びとは
箒しゆくしゆく豊顕寺境内

爪弾きてひばり北島艶歌哉
はるばる来たぜ船村の宿

星空を見つめてしばし佇める
宇宙の正体ダークマターか

冬晴れの光輝く散歩道
錦繡誇るドウダンツツジ

鎮魂の思ひを伝へ遺しける
三善晃は逝きにけるかな

大宇宙ブラックホールなるものを
旅の土産に中を見せばや

寒空の気うつが続く散歩道
枯葉の隙にヒヤシンスが芽

小さな音の絆

丹下重明

そのささやかな音楽は
遠い海からの風のように
時に力強く時に優しく
心の深みに語りかけてくるのです
一人居の淋しさに寄りそい
思い届した心を励まし
猛けり立つ精神をも
静めてくれるのです

リユートではなく
ギターであればこそその演奏
ほのかな哀感を通奏低音に
素朴で端正な濁りのない音は
すつくと立つ若木のように
これは若き日の
ジュリアン・ブリームの音楽

詩研よ

六つの小さな曲の
懐かしい音の絆
バッハ・ホ短調リユート組曲



エッセイ

抜刀隊

市川 康夫

この表題を聞けば「歴研」と思うであろうが、そうでもない。わが国最初の洋式軍歌が誕生し、分列行進曲に用いられて長くなじまれた。西南戦争のとき活躍した官軍の抜刀隊の姿を描いたもので、明治十五年刊「新体詩抄」に発表され、同十八年に陸軍お備い軍楽教師ルルーが曲をつけた。(偕行社刊『雄叫』による。)

全校生徒が校庭に整列し各学年の学級が四列側面縦隊に整列し、組主任の教諭は小隊長のように右に立ち、校長の閲兵を受け、引き続き吹奏楽部の生徒が演奏する「抜刀隊」で分列行進が始まった。校旗を先頭に、教頭、教諭たちは指揮刀を抜刀して行進し、台上に立つ校長の前を通過するときには「頭右」と号令をかけ投げ刀の礼をした。上級生たちは普段の軍事教練と同じく三八式歩兵銃を肩にして行進した。今もどこかの国の軍事パレードに見るように。

二年後にははやくも国土は灰燼に帰して敗戦となり、輸出品にはMade in Occupied Japanと表示するような被占領国となった。

昭和十八年に神奈川県立川崎中学校に入学すれば、早速ゲートルを巻いて通学し、校門に来れば最上級生がその場の生徒を二列縦隊にして指揮し「歩調取れ」と号令して、「全体止まれ。敬礼」と軍人のように拳手の礼をして「解散」となり、各人が昇降口へ向かった。敬礼の方角は校長室に安置された御真影と聞いたが見たことはない。毎月八日は「大詔奉戴日」と称し、

戦時中の国語の教科書が使用できなくなり夏目漱石の『草枕』を用意せよと言われたが、焼野原の近隣に求むべくもなくお茶の水で下車して古本を探した。その帰りに皇居前の濠端まで来ると宮殿風の帝国劇場が目に入り、幸いなことに懷中を数えると足りたので入場した。肩章を切り取ったままの一張羅の陸軍の学校の制服を着て泥だらけの編上靴の中学四年生

の少年は完全に気後れし、制服の米軍将校や黒の礼服の男たちがドレスアップした婦人をエスコートする図に圧倒された。初めて聴くクラシック音楽であった。シューマンを知らず、幼いときに見た映画のBGMにトロイメライのメロディーが使用されていたこともずっと後に知ったような小生であつたが、交響的練習曲は少年の魂に刻みこまれた。つい先年後輩の医師がその当日のプログラムのコピーを届けてくれたが、半世紀余を隔ても記憶に誤りはなかった。音楽マニアだった某教授の遺品の整理を依頼されたときに入手したものだと言われた。ロシア革命でわが国に亡命した東京音楽学校の教授の胸像が校門を入ると立っているのに小生はすぐに気づくのだが、東京芸術大学に入学した某テノールに訊いてもレオニード・クロイツァーの高名を、時代を隔てた若者はまったく知らなかった。その後小生は昭和二十年代に彼の演奏や近衛秀麿の指揮するオーケストラとの共演に何度も足を運んだのに。

受験した同級生は全滅した。翌年合格した旧友が、同校で演奏する巖本真理のリサイタルに呼んでくれた。入梅時の奏樂堂の開演間際に駆けつけると最前列に坐ることとなり、金髪の白人の若き美女を溜息とともに見上げて、バツハのG線上のアリアの響きを耳にし、東京音楽学校の学生たちよりも年下と言われた教授は満席の一高生たちにニツコリと微笑みかけて大振りにも弓を使った。腰の辺りまで長い金髪を垂らした壇上の美しい姿はいまも鮮かによみがえる。

小生よりすこし年下の三善晃はすでに故人になってしまったが、この秀俊の一曲を一度聞いただけであつても、記憶に留めている。さざ波のような音の流れ、波間に沈み消えていった幼年学校生らの言い伝えは、たびたび聴く機会がなくても、文部大臣賞と聞かなくても、ほろびることのない鎮魂曲であると小生は思う。(以上)

市川様は、横歴会員羨望の永年会員です。本エッセイは氏の歌壇の解釈にも有用と思われれます。(編・記)

エッセイ

古歌を訪ねて(その十二) 津の国の難波の春

丹下 重明

心あらむ人に見せばや津の国の
難波わたりの春の景色を

能因法師

後拾遺和歌集・春歌上(43)

この歌の大意はおおよそ以下です。
「情趣がわかる人に、是非、見てもらいたいものですねえ…。津の国の難波のこのすばらしい春の景色を」

この一首は能因が、友人あての手紙にのせて書き送ったものといわれています。
「津の国」とは現在の大阪府と兵庫県にまたがる地域の古称です。
「難波」とは「浪速」とも書く同じく古称で、現在の大坂市とその付近です。この歌の舞台となつてゐる「難波瀧」もその一部にあたり、昔の大坂湾の淀川河口付近を指しています。

難波瀧(難波江)は、当時、葦

原に囲まれた広大な干潟で、海そのものも、今よりは、ずっと内陸部に拡がっていたようです。春になると、干潟の葦が一斉に萌えて出で、そのみどりに春霞が漂う景色は絵のように美しかったと言い伝えられています。

☆☆☆☆

「難波瀧」を詠んだ和歌は古歌には多く見られ、平安中期頃からは「歌枕」にもなっています。

小倉百人一首にある古今集時代の女流歌人伊勢の次の歌は、恋歌ではありますが、よく知られた作品と言えます。

難波瀧短き葦のふしの間も
逢はでこのよを過ぐしてよとや

時代はずっと下つて新古今時代の歌人藤原秀能は、難波瀧の春の風景を、夕月にかけてこう詠んでいます。

夕月夜潮満ち来らし難波江の
葦の若葉に越ゆる白波

同じく、新古今時代の歌人で、

受験した同級生は全滅した。翌年合格した旧友が、同校で演奏する巖本真理のリサイタルに呼んでくれた。入梅時の奏樂堂の開演間際に駆けつけると最前列に坐ることとなり、金髪の白人の若き美女を溜息とともに見上げて、バツハのG線上のアリアの響きを耳にし、東京音楽学校の学生たちよりも年下と言われた教授は満席の一高生たちにニツコリと微笑みかけて大振りにも弓を使った。腰の辺りまで長い金髪を垂らした壇上の美しい姿はいまも鮮かによみがえる。

前回の「古歌を訪ねて」でとりあげた西行の歌にもこんな一首がありました。

津の国の難波の春は夢なれや
蘆の枯葉に風渡るなり

冒頭の能因の歌を本歌とする作品です。寒々とした初冬の風にゆれる葦の枯葉を見た西行が、「夢なれや」と言うほど、春の難波の風景はすばらしかったのだと思われるのです。

☆☆☆☆

能因(988~1050頃)は、橘氏の出で、俗名は橘永愷といひ、父や兄は各地の受領職(国守)を務めていました。和歌の才に恵まれた本人は、20才半ばで出家し、以降、歌僧として生涯を送り、奥州ほか各地を旅しました。このあたりは、後に、西行がこの能因に準じて、よく似た生涯をおくっています。

和歌は、当時の歌壇の第一人者だった藤原長能に師事しています。これが歌道における最初の子弟関係の事例といふことです。

時代は、清少納言、紫式部など王朝女流文学華やかなりし時期を少し過ぎた、平安後期にさしかかったころです。能因は当時の宮廷歌人たちとも交流があり、彼らの主催する歌合などにも参加しています。一条朝の四納言の一人で、歌人・文人としても知られる藤原公任や女流歌人の相模なども親しかつたようです。

☆☆☆☆

能因の歌は、後拾遺和歌集(以下後拾遺集)の31首を含め、以降の勅撰集に67首取り上げられています。私家集に「能因集」「玄々集」があり、歌学書「能因歌枕」もあります。

冒頭の歌は能因の代表的な一首ですが、そのほかにも、いくつか心に残る作品があります。以下の二首もその例で、それぞれに短い詞書があります。

山里にまかりてよみ侍りける
山里の春の夕暮れきてみれば
入相の鐘に花ぞちりける

新古今集・春歌下(116)

津の国の古曾部といふ所にてよみける
わがやどの梢の夏になるときは
生駒の山ぞ見えずなりぬる

後拾遺集・夏歌(167)

いずれも時間の経過や、季節の
移ろいなどで変る情景を素直に詠
んでいてわかりやすい歌です。とく
に先の一首は、山里の春の物静か
な夕景が浮かぶいい歌です。

☆☆☆☆

嵐ふく三室の山のもみじ葉は

龍田の川の錦なりけり

後拾遺集・秋歌下(366)

この歌は定家の小倉百人一首に
も選ばれていて、よく知られてい
る歌です。一〇四九年(永承四年)
に、久方ぶりに開かれた内裏歌合
のおり、当時すでに一流の歌人と
言われていた能因も参加し、詠ん
だ一首とのこと。

この歌について白洲正子氏はその
著書「私の百人一首」のなかで、
次のように評しておられます。

定家がこの一首を選んだことに
ついて、『古今集以来の歌枕をふま
えて、何の感興もなく詠みくだし

たこの歌のどこがそんなに美しいの
か、現代の我々には理解しかねる。』
と手厳しい批評を下された後、『能
因法師の名声と、歌合で評判をとっ
たことが、一般に受けられると思わ
れたのであろうか。』とも述べておら
れます。いわゆる定家好みの技巧
的な作品とも思われない中途半端
な感じがあり、これはまことに同
感できる批評と考えています。

☆☆☆☆

ところで能因の詠歌のなかで、今
日もっともよく知られている作品
は、と考えてみると、それは次の
一首ではないかと思うのです。

都をば霞とともに立ちしかど

秋風ぞ吹く白河の関

後拾遺集・羈旅歌(518)

この歌は、能因が陸奥を旅した
おりに詠んだといわれていますが、
この歌には有名なエピソードがあり
ます。

一首の大意は、「京の都を春霞の
たつ頃出立したのだが、今いるこの
白河の関には、はや秋風が吹いて
いるなあ：(長い旅をしてきたも

のだ)」といった感慨を込めたもの
です。

能因はこの歌が大いに気に入って
いて、ただあたり前に世間に発表
したのではつまらない、ということ
で一芝居うったというのです。

鎌倉時代の説話集「古今著聞集」
などの説話集には、能因が本当は
白河の関には行っておらず、自宅
にこもって時を過ごし、秋になって
日焼けした顔で現れこの歌を披露
した、というのです。

ただ、この歌を取り上げている歌
集が、すくなくとも勅撰集である
こと、詞書に「みちのくに下りけ
るに、白河の関にてよみ侍りける」
とあることを考慮すれば、この話
は、あくまでも一つのエピソードに
すぎないと考えられるのです。

☆☆☆☆

能因は晩年、その住いを冒頭の
歌に詠まれた津の国の、古曾部(現
大阪府高槻市古曾部町)に置いて
います。常日頃、敬愛してやまな
かった女流歌人の伊勢が晩年を過
ごしたというこの地を、自身の隠
棲の場所としたということ。

二人の間には100年余の歳月の

エッセイ

運命の邂逅

私と落語の出会い

寺田 隆郎 (鹿鳴家河童)

はじめに

令和元年の十月六日(日)に、
私はこの横浜歴史研究会で初めて
発表講演の機会を頂きました。そ
のときに会のホームページに掲載し
て戴いたご挨拶は、以下の通りで
す。

「私が『歴史』と名の付く会に入る
事になるとは、今でも我ながら驚
いています。私は三人兄弟の真ん
中で、兄も弟も大学では歴史学を
専攻していました。兄は大手出版
社の役員を退いた今でも、敢えて
歴史的仮名遣いで何か小難しい小
文を発表し、弟は郷土博物館の館
長を辞した今でも、定期的に郷土
史の講座を開いています。私だけ
が、畑違いの英文科に進み、歴史
小説の作家だった父親との会話に
加われず、悔しい思いをしてきたの
ですから(笑)！でも落語が出
来るのは、私だけ。その落語を通

じて、この『歴史研究会』に導かれ、
こんなに歴史好きの皆さまとお近
づきになれたのですから、何とも
不思議な巡り合わせですね。この
度は、まさに落語と歴史を結び付
けた発表をさせて戴く機会を得ま
したことを、心より感謝しており
ます。」



これは、そのときに添えて頂いた素
敵なイラストです。

そしてまた今回、このように会報
で拙文を皆さまにお読み頂けるの
は、望外の喜びです。

自己流の時代

私が落語と出合ったのは中学生の



頃、半世紀以上も前のことになり
ます。父親が物書きをしていた関
係で、演芸評論家・エッセイストの
故江國滋氏(江國香織氏の父君)
だったか、芸能評論家・エッセイ
ストの矢野誠一氏だったか、から父
親に送られてきた「精選落語会」
のチケットを、無駄にするのも悪い
からと譲られて、虎ノ門にあるイ
ノホールに通い始めたのがきっかけ
でした。

「週刊新潮」の『黒い報告書』な
どで、ルポルタージュ作家として
糊口をしのぎ、晩年は時代小説作
家として幾つかの作品を残して、
八十四歳でこの世を去りました。
さて「精選落語会」(一九六二年
四月〜一九六八年十二月)は矢野
氏の主催で、八代目桂文楽、六代
目三遊亭圓生、八代目林家正蔵、
八代目三笑亭可楽、五代目柳家小
さんという豪華なレギュラー陣に加
え、なんと病後復活した五代目古
今亭志ん生までもが出演するとい
う、中学生が聴くには勿体ない落
語会だったのです。

これで落語好きにならなければ、
一生落語とは縁のない自分だった
でしょう。

そのうちに自分でも演ってみたく
なり、『勘定板』やら『四宿の尻』
などといった下ネタを覚えては家
族の前で披露し、失笑を買ってい
ました。やがて父親のお供で行った
神田の古書店で「古典落語全集」
(金園社・富田宏編・昭和四十四
年発行)を手に入れて、『蒟蒻問答』
を覚え、同じ金園社の「落語全集」
(今村信雄編・昭和四十八年発行)
からは『五人廻し』を覚えて、大

おわり



学の友人に聞かせたりしていました。でも結局いわゆる落研には一度も属さず終いで、当時の私の落語はまったくの自己流でした。『浮世根問』もそのころ覚えた噺ですが、何を基にして覚えたのか、両全集ともにその噺を載せていないので、今となっては分かりません。

大学ではイギリス文学を専攻し、卒論はたしかGraham Greeneの『The Heart of the Matter』(『事件の核心』)でしたが、口にするのも憚られるような酷い仕上がりだったと思います。『欧米に於けるhumorの研究』か何かにしておけば、まだその後の噺の種にはなったかも知れないな、と今にして思います。兄が大手出版社に勤めていたので、自分も同様の道を目指しましたが、ちょうど一九七三年のオイルショックと重なったので、流言飛語の影響等もあってトイレットペーパーの買い占め騒動が起こり、また実際に印刷紙不足により入社試験を行わない出版社が出て来たり、という事情もありますが、もちろん何より自分自身の力不足で希望は叶いませんでした。結局小さな広告代理店での勤務を経て、私立の中高一貫校で英語の

演目に仕立て、これはその後日本語でも演ずるようになり、色物にも使えるので、席亭のS氏からは「良いものを手に入れましたね」と褒めて(?)頂きました。

準優勝という快挙

それからまもなく、落語にアマチュアのコンテストがあるのを知り、二〇一四年に「落語国際大会」千葉」に挑戦したところ、なんと準優勝を戴きました。演目は予選が『芋俵』で、本選は『夢金』でしたが、それぞれ十分と十五分という厳しい制約を受けてのやや無謀な演出だったにもかかわらず、「本寸法」という望外の評価を、聞いて下さった方々からも頂き、しだいに様々な会に呼んでもらえるようになったのです。

大会での演目は、時間的に厳しい制約があるので、いわゆる大ネタが好きで自分としては、準備そのものが苦行となります。しかし千葉の大会では、『夢金』というこれも本来なら三十分は掛けるべき噺を、一応神髓は残しつつ十五分に短縮したことが審査員に評価されたいしいのは、いま思い返しても嬉しい思い出です。

教員を務めることとなりました。その間、私も数冊は、著書や訳書を商業出版することが出来ました。それがもとで、職場を去り、生活環境が大きく変わることになりました。



落語の方はほんの数本の持ちネタがあるばかりで増えることはなかったのですが、仲間の教員には毎年の慰労会で、生徒たちには文化祭で、また近所の禅宗のお寺では檀家の衆に『蒟蒻問答』などを聞いてもらったりして満足してしま



趣味と生き甲斐

さて英語落語の方は、コンテストのようなものがないので、専ら発表会でほぼ日本の方々ばかりに聞いてもらう日々が続いていました。ところがある時、東京の根津にある「澤の屋」さんという旅館で英語落語をさせて頂く機会を得ました。この旅館はホームページで「低廉な下町の家族旅館として、これまで八十九カ国、のべ七万人を超える外国のお客様にご利用いただきました」と謳っている通り、外国人宿泊率が非常に高い宿泊施

キャナリー落語会との出会い

教員時代の思い出の中で、落語に繋がるものを探してみると、一九九〇年と九一年、YMCA主催の英語のスピーチコンテストに於いて、横浜大会連続優勝、全国大会準優勝と五位入賞を果たしたのが、嬉しい記憶として残っています。とくに九〇年の大会では、武道の気合からスピーチを始めるという工夫をして、精一杯のユーモアを織り交ぜて話を組み立てた結果、聴いて頂いた複数の方から、「まるで落語のようだった」と評されました。これは、そのときのスピーチが、落語と空手と英語が合体するという、自分の趣味の集大成になっていたようで、一層の満足感を得ることが出来た気がしました。

その後、先ほど申し上げたように、一冊の本を著したのがきっかけで、二〇年近く務めた私立学校を退職し、予備校などで講師をしながら、空手教室を主宰して、さらには四人の子育てに時間と精力を奪われていました。しかしその間に、どういうわけか趣味が増え続け、乗馬、サーフィン、ダイビング、スキー、ギター、翻訳(三冊ほどを商業出版)とやりたいことが止ま

設でした。当日は仲間四人で出かけたと記憶しています。初めて英語の native speakers ばかりの前で英語落語を披露できるとあって、一同張り切って出かけたものです。そして広間に宿泊客が集まって、いよいよ「始めるぞー」という時に、最初の演者が「みなさん、どちらから来られましたか?」と英語で尋ねたところ、返ってきた答えは「France!」。見事なオチがつけました。

そのころはまだ、なかなか外国に行く機会もなかったのですが、会的主宰であるS氏は、何とかして英語落語の生徒たちを外国に連れて行きたいと思い、色々な伝手を辿って、骨を折って下さっていたようですが、なかなかその機会を得ることが出来ませんでした。ところが、私も同行させて頂いた二〇一五年のアメリカ西海岸での公演あたりからでしょうか、一旦道が開けるや否や、燎原の火と言っては譬えが悪いが、次々に外国遠征を実現することになったのです。

私は同年八月のロサンゼルス公演と翌十六年のシアトル公演に参加させて頂きましたが、すべてボランティアで、自費での参加ですから、

らず、なかなか落語に目が向きませんでした。そんななか、私の母校でもある上智大学で、S氏の英語落語に関する講演が行われるという連絡が、知り合いから齎された。それが私の落語人生の大きな転機となったのです。

その会場で、英語も日本語も、両方の落語教室があると聞いて、私はすぐに入門することに決めました。それが二〇一一年のこと。最初の発表会で掛けたネタは日本語が『蒟蒻問答』、英語が『あたま山』を改作した『Get It Be』でした。これは主人公をアルトゥル・ショーペンハウアーとし、訪ねてくる友人をイマヌエル・カントにして、ギターレを使って Beatles の Let It Be を唄うというやりたい放題の作品でしたが、英語落語は、日本語落語と比べて自由度が高いので、改作のし甲斐があります。つぎの『Pot Mathematics (壺算)』はほぼ普通に演じましたが、三回目は川柳川柳(かわやなぎせんりゅう)師匠の創作落語『ガーン』を、三味線を使って江戸時代からの日本歌謡の歴史として改作し、最後にリズムボックスを伴奏代わりにジャズを唄って終わるという派手な

そう度々は出掛けられません。しかしその時の経験は貴重なもので、打ち上げでは、もう一つの趣味である空手の演武も披露する機会も頂きました。



現状と今後

私はこの数年間は、年間大体三〇から四〇席ほどの高座の機会を載っています。その中には、聴衆一〇名ほどのものもあれば、三〇〇名ほどのものもあります。印象に残っているところでは、ある施設でのひとつの公演があります。そこは「生活困窮者自立支援」のための施設で、生活保護を受けな

がら社会復帰を目指す方々が入居してました。ZPOが運営するこのような施設が、都内には五〇か所ほどあるようですが、最初に高座が上がった演者（女性）がヤジられました。「おねえちゃん綺麗だね、着物が！」その人に座布団は上げられないが、座布団カバークライは進呈したいほどのみごとにタイミングでした。その演者は降りてくるなり「みんなが睨んでる」と本当に怖そうに言った言葉が、まだ耳に残っています。それはそうかも知れない。全員生活に困窮しているわけだから、それこそ「笑っている場合じゃない」でしょう。

地元横浜では、桜木町にある「にぎわい座」で『洋の東西、恋の種々』『洋の東西、春の目覚め』と題して、二〇一八、一九年のそれぞれ三月に、オペラと日舞と新内と落語のクラブ公演を、行いました。大きい所では、千葉の方で呼ばれたアマチュア落語の会でしたが、常時一五〇人ほどの来場者があり、地元ではすっかり定着した有名な会でありました。それまでも何回かゲストで呼んでもらっていたのですが、その年は記念の大会で三〇〇名以上入る会場が満席になっていた

ました。ここではレギュラー陣が記念の口上をひとりずつ述べ、私は落語のみならずその司会までも仰せつかったのです。アマチュアならではの失敗もありつつ、でもそれが愛嬌と受け取って頂ける温かい雰囲気の中で、ケーブルテレビや地元の新聞社の取材もこなす主宰者に、大いに感心したものです。



また別の会では結構な無茶ぶりもあり、こちらが落語会のもりで受けた催しが、途中から勉強会でなければ困ると言われ、とても

遊、遊若のお三方だったのです。今後も色々なところで呼んで戴けるのを楽しみにしていますが、なにしろコロナ騒ぎが収まらないことには、どうにも身動きがとれません。

最後に

なかなか本格的な歴史関係の発表が出来ない私ですが、落語と歴史は切っても切れない関係（ちょっと変な言い回しですが）であり、横歴会員の皆さまには、今後ともご指導を宜しくお願いして、この駄文を最後までお読み下さった感謝とともに筆を擱くことにします。

エッセイ

『中国工芸美術史入門』と所蔵館

長田 格

昨年末、『中国工芸美術史入門』（科学出版社、尚剛著、B5版、一五五頁、以下『工芸史』）という本が出版された。



この本は、中国で出版された『極簡 中国工芸美術史』の翻訳版であるが、実はこの翻訳を担当するのが筆者である。筆者にとって初めての翻訳出版であった。昨年の前

半は、この翻訳の作業にかかりつきりになってしまった。翻訳から出版までの各過程において、いろいろな話があり、それはそれで一冊の本ができるくらいであるが、それはここではおいておき、本題へ。

『工芸史』は、中国工芸美術（陶磁器、青銅器、織物、玉器、漆器等）の誕生から発展、変遷をコンパクトに語っているのだが、最大の特徴は、美しい写真を大量に、二四七点、掲載していることにある。そして、驚くことに、そのうち十八点は日本所蔵の作品であった。中国側から見ても、重要な作品が日本にかなり収蔵されているというのは、面白い。

ただ、技術の歴史については詳しいが、個々の作品についてはあまり詳しくなく、筆者は時間をかけて調査を行い、大量の訳注をつけたのだが、全体の分量の関連で大幅にカットされている。

さらに、翻訳の参考にとり思いと、自身の興味から、公開のタイピングを狙って、昨年一年間、博物館・美術館を巡り、日本所蔵品のうちの四点を実見した。ここでは、筆者が調査した内容を含めてその紹介を行う。なお、本項の写

真はすべて筆者が撮ったものである。

(1) 金銀錯狩獵文鏡

戦国時代中期、紀元前四世紀から三世紀頃に造られた青銅鏡で、東京の永青文庫に収蔵されている日本の国宝である。

直径一七cmとそれほど大きな鏡が、今でも金の輝きを放ち、その精巧さに魅了される。写真撮影禁止のため、次の写真は参考書からのものである。



浅い窪みに金銀を嵌め込むという手法が使われ、「金銀錯」と呼ばれる。三つの渦巻き型の文様が目立つが、凄いのはその間の三つの図である。全部異なった図案で、

上のものは、馬に乗った武者が剣をもって虎と向かい合い、右は鳳凰、左は熊と虎らしきものが向かい合っている。金と銀を使い分け、非常に細かな模様を表現し、生き生きとした表情を示している。

戦国時代といえど文字通り戦争の絶えなかった時代であるが、一方で工芸美術の技術も進展し、礼楽の崩壊に伴って、題材も身近なものになっていったことが窺われる。

この鏡は、昭和3年頃に河南省洛陽で出土したと伝えられ、それを日本の古美術商が入手、旧熊本藩主細川家の十六代当主細川護立（元内閣総理大臣細川護熙の祖父）がこれを一目で気に入り購入し、以後永青文庫に収蔵され、現在日本では「細川ミラー」の名で知られている。

永青文庫は東京の目白台にあり、日本・アジアの古美術を中心とした美術館である。細川護立が設立したもので、旧熊本藩主の細川家伝来の美術品を中心としている。「永青」は、細川家の菩提寺である京都建仁寺永源庵の「永」と、細川藤孝の居城、青龍寺城の「青」をつなげたものという。



傾斜地の上に美術館、下に美しい日本庭園があり、その間を散策できる。



口径一二cmで驚くほど小さいが、その美しさは比類がない。こども写真撮影は不可で、次の写真は参考書のもの。



飲んだかどうかは分からない。本作品を制作した建窯は、名品を多く生み出した窯で、本作以外にも日本で国宝となっている油滴天目（後述の大坂東洋陶磁美術館所蔵）も作成した窯である。油滴は、窯変よりもっと小さな斑点が全面にでている。油滴という技術については『工藝史』に記述があるが、「油滴天目」については記述がなく残念である。

曜変天目と呼ぶ茶碗は現在世界に三つしかなく、いずれも日本にあり、全て国宝である。

静嘉堂文庫所蔵のものの中でも最も曜変が鮮やかで美しい、元々は徳川家所蔵であり、徳川家光が春日局に下賜し、その子孫である淀藩主稲葉家に伝わった。このことから「稲葉天目」とも呼ばれる。その後昭和になって三菱財閥が購入した。

静嘉堂は三菱の二代目総帥、岩崎彌之助（一八五一〜一九〇八）とその子によって設立された美術館で、国宝七点と多くの東洋古美術品を収蔵している。「静嘉」は『詩経』の中の句から採った彌之助の堂号で、祖先の霊前への供え物が美しく整う、という意味だという。

こどもまた美しい庭園をもった静かな環境にある。写真は美術館の窓から庭を写したものである。



筆者はまたまた車で訪問したが、東急二子玉川駅から二kmほどで、こどもよい散歩コースになる。なお、バスも走っている。
参考・聚美 VOL.34（聚美社）

(3) 青磁琮形瓶

南宋時代、十二〜三世紀頃、官窯（現在の浙江省杭州）で焼かれ、現在は東京国立博物館に収蔵されている。

(2) 建窯曜変天目

南宋時代、十二〜三世紀頃、建窯（現在の福建省南平）で焼かれ、現在は東京世田谷の静嘉堂文庫に収蔵される日本の国宝である。

だし、この時代、陶磁器の黄金時代といってもよく、多くの名窯が全国にあり、官窯はそれほど目立った存在ではなかった。

東京国立博物館は説明不要であろうが、簡単に記すと、明治5年（一八七二）設立の日本最古にして最大の博物館である。複数の建物からなっているが、写真は一九三七年に竣工した本館であり、建物自体、重要文化財である。



JR上野駅から上野公園内を歩いてすぐにある。興味深い企画展がたびたび実施されるだけでなく、常設展示も頻繁に入れ替えられている。筆者は、今回訪れる前にも



高さ約二十cmとやや大きめである。深みある青緑色で、全面に貫入と呼ばれる釉の部分のひび割れがあり、不思議な模様を形成し、威厳あるたたずまいを感じさせる。

玉器の「琮」の形を模している。「琮」は、外形は方柱状で、円形の穴が貫通し、上下端は円筒状のもので、祭祀に使われた。宋代の工芸美術の一つの特徴として「仿古」があり、古い時代のものを真似て作ったものが多く作られた。

尾張徳川家に伝来し、花生けとして使われていたという。美術商の広田不狐齋（松繁）の手に渡り、その後広田の所有する全作品が東京国立博物館に寄付された。

官窯は、宮廷の御用品を焼くために設置された窯で、南宋時代は、首都臨安（現杭州）にあった。た

毎年一〜二度は訪れている。

なお、『工藝史』掲載の日本所蔵作品で、他に二作品が東京国立博物館に収蔵されている。これらはタイミングがあわず、残念ながらまだ実見できていない。

・磁州窯黒釉褐彩牡丹文大瓶（金）
・景德鎮窯青花初夏睡起図皿（明）

(4) 吉州窯木葉天目

南宋時代、十二〜三世紀頃、吉州窯（現在の江西省吉安）で焼かれ、現在は大阪市立東洋陶磁美術館に収蔵されている。

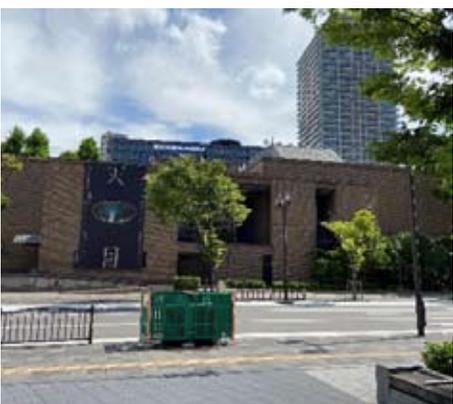


真っ黒の茶碗に、金色の木の葉の模様が美しい。その葉脈の細かさは奇跡のようである。

木葉は本物の桑の葉であり、禅に通じる思想があったとされる。現代の技術をもってすれば、同様のものを作るのは容易のようであるが、八百年前にどうやってこれを作ったのか、いろいろ研究されているが、ケイ酸がキーであり、これと釉薬の組合せによって、ケイ酸を多く含む葉脈の部分がガラス化して焼け残るといふことのようにである。桑の葉は実は、ケイ酸を多く含むという。

加賀前田家の伝来品である。それを安宅産業の創業家二代目安宅英一が会社として入手、安宅コレクションの一つとなった。安宅産業は経営危機により、伊藤忠商事に買収され、コレクションのうちの東洋陶磁については、いったん住友銀行に引き継がれたが、これを大阪市に寄付。大阪市はこれをもとに、一九八二年、大阪市立東洋陶磁美術館を設立した。現在この美術館は、安宅コレクションに加え、他からの寄贈や購入で、約四千点の中国陶磁、朝鮮陶磁を中心とした作品を収蔵している。

この美術館は、大阪の中心部中之島にある。レンガ造りのように見える（素焼きタイル張り）、三階建ての瀟洒な建物であり、BCS賞という国内の優秀な建築作品に対する賞を受けている。高層ビルがまわりに立ち並びはしているが、川と広場に囲まれた位置でよい雰囲気である。



京阪のなにわ橋駅のすぐ目の前、あるいは地下鉄の淀屋橋駅、北浜駅からも近い。筆者は別件で関西に旅をしたとき、近くのホテルに泊まり、そこから歩いた。ちょうど「中国黒釉の美 天目」という特別展を開催中で、油滴天目も実見することができ、眼福を得た。



(5) その他

他の十二点の作品について、収蔵館別に列挙しておく。そのうち三点が国宝であり、☆で示す。

- 法隆寺
- ☆四騎獅子狩文錦（唐）
- 正倉院
- ・琵琶袋残欠（唐）
- ・八角鏡漆背金銀平脱（唐）
- ・螺鈿紫檀五弦琵琶（唐）
- ・木函紫檀碁局（唐）
- ・撥鏤尺（唐）

- 奈良国立博物館
- ☆刺繍釈迦如来説法図（唐）
- 白鶴美術館（神戸）
- ・鍍金花鳥文銀製八曲長杯（唐）
- 大阪和泉市久保記念館
- ☆龍泉窯青磁鳳凰耳花生（南宋）
- 掬粹巧芸館（山形県）
- ・景德鎮窯染付飛鳳唐草文八角瓢形花生（元）
- 大和文華館（奈良）
- ・景德鎮窯裏紅三魚文高足杯（明）
- 個人
- ・景德鎮窯青花文緑地纏枝金彩碗（明）



(68)

法隆寺のものは、日本製であるという説もあるが、定まっていない。正倉院のものは琵琶や碁盤など非常に有名で、皆国宝級であるが、正倉院収蔵物は、国宝指定して特別に保護をする必要がないほど厳重に保管されていることから、国宝となっていない。

大阪和泉市の青磁鳳凰耳花生は、同じ形のもが日本に多く伝来しており、各所で見る事ができる。筆者は東京世田谷の五島美術館

以上

エッセイ

宇宙の正体 それは何か

高野 賢彦

星空はどうして美しいのだろうか。それは言葉ではいいあらわすことのできないロマンが秘められているからだと思う。僕は幼少時に星空を仰ぎながら北極星、銀河、白鳥、北斗七星、カシオペアなどを教えてもらい、しばしば星空を仰ぎ見るようになったが、努力不足からその後は少しも進歩していない。都会に出て来ると、春夏は空がどんよりしていて星々をよく見ることはできないが、秋冬は空気が澄んで乾燥しているせいか、横浜郊外でも比較的よく見える。

僕は今現役時代には帰宅が遅く、寒風吹きすさぶ中でなんとはなしに自然に夜空を仰ぎ見た。そこには冬の星座の王様ともいえるオリオン座が煌めいていた。また目を転ずるとカシオペア、北斗七星、北極星、美しい銀河の流れなどをみる事ができ、なんとも言

えない嬉しさを覚えた。しかし今は夕暮れの月や宵の明星をながめても、寒い夜中に星空を仰ぎ見ることはまれになった。それでも土星と木星が接近して見えるなどと聞くと、気になって二階のベランダから眺めたりする。昨年二月二十日（月）の朝日新聞夕刊のトップ記事に「オリオン座 崩れる？」と書かれており、これにはショックを受けた。一等星のうちで明るい部類に属するオリオン座の主星ベテルギウスという星が暗くなったというのである。ベテルギウスは重さが太陽の十倍、大きさが太陽の千倍、誕生して八百万年と太陽の四十六億年よりはるかに若い、活動が激しいため内部の燃料をほとんど使い果たし、ぶくぶく膨らんでいるというのだ。そしてベテルギウスの半径は太陽から木星の位置に達するほどの巨大な星だという。その星が暗くなつたのは、自らの巨体を支えきれなくなつていざいざ大爆発し、まぶしく光る超新星になる過程を示しているのだという。若い星とはいえず、ずっと遠い先のこととしてもベテルギウスはいずれ消滅する運命にあり、そのためにオリオン座は形が

崩れるのだという。冬の星座でもっとも美しく印象的な星座であるオリオンが崩れるなぞという話は信じたくない。ところで誰もが普段は忘れてる宇宙から見れば、われわれの地球が属している銀河系宇宙はちっぽけな存在であるが、一体全体、宇宙の正体は何であろうか。いまだに明確には分かっていないらしい。またビッグバンの方、休むことなくものすごいスピードで膨張しているという宇宙、われわれ個人々人には実感できないが、膨張は人間の存在などが相対的に限りなく小さくなってゆくことを示すものであろう。しかし、そんなことはついぞ忘れて地球上の生きとし生ける者は日々享樂し、ときには協調することを忘れて対立し、いがみ合い、武力を行使している。見方によっては情けないほど悠長な存在である。

ところで宇宙の大部分はダークマターと言われている。地球上の成層圏を越えて果てしなく突っ込んでゆくと、そこは真暗闇の世界らしい。太陽系の惑星などはすべて暗闇の中に存在しているのであるが、太陽など恒星の

(69)

量の0.8以下の星は褐色矮星と言われるそうだが、マツチヨはダークマターの主成分ではないという。③宇宙初期に生成された原始ブラックホール。これは現在完全に否定されたわけではないらしい。

弱い相互作用をする重い粒子(WIMP)は、近年は落ち目となったが、一方でアクシオンと呼ばれる素粒子があるという。弱い相互作用をするアクシオンの性質

エッセイ

新型コロナと現代

瀬谷 俊二郎

一・コロナ蔓延(経緯)

日本で初の新型コロナ患者を確認したのは2020年1月16日。患者は神奈川県内の30代男性で中国・武漢から帰国後に肺炎の症状を呈していたという。(厚生労働省発表)

2月に入ると5日に横浜港に停

夫々34万人、4700人超である。

二・感染と対策

(一) 感染リスク

感染はウイルスがついたものを触ることによる「接触感染」と口からのしぶき(飛沫)に含まれるウイルスで伝わる「飛沫感染」に大別されるが、後者のほうが重要と考えられている。飛沫感染リスクが高まる場面としては「飲酒を伴う懇親会」「大人数や長時間の飲食」「マスクなしでの会話」等が特に注意すべきものとして挙げられるが、今や全国どこでも感染の発生していないところがない以上、会食はしないほうがいいし、なるべく人に会わないほうがいい。

(二) 感染の疑い

WHO(世界保健機構)によるとよく見られる症状として、発熱・乾いた咳・倦怠感・味覚や嗅覚の異常・鼻づまり・結膜炎。のどの痛み・頭痛・筋肉や関節の痛みなどを挙げているが、症状のでない感染者もいることが問題を大きくしている。ウイルスは自身だけで増

は理論的には決まっておらず自由だという。これが現今ではダークマターの最有力候補であるという。なおブラックホールはあらゆるものを飲み込み、光さえ飲み込まれれば出て来ることができないという。これは一体どういうものであるか。2019年4月にブラックホールの撮影に成功したというが、ブラックホールでも原始ブラックホールがダークマターであるという説も

泊中のクルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号で集団感染(100人)が確認され、さらに13日には神奈川県で80代渡航歴のない女性が死亡後に新型コロナ感染と発表された。

これを受けて24日に政府の専門家会議は「この1〜2週間が瀬戸際」の見解を示し、26日に安倍首相がスポーツ・文化関連を対象に2週間のイベント自粛を要請。28日には文部科学省が全国の小・中・高校等に臨時休校を求める通知を行った。

3月11日、WHO(世界保健機構)が新型コロナを「パンデミック」と認定。政府は新型コロナ対

えることが出来ず、粘膜などの細菌に付着して増えるが健康な皮膚には入り込めない。ウイルスは時間がたてば壊れるが、24〜72時間ぐらいいは感染力がある。

(三) 対策

①各国はまず他国からの感染持ち込みを避けるため、渡航の禁止・制限・検疫強化あるいはロックダウン(都市封鎖)指定等の対策をとった。このため帰国できないとか、海外業務に支障をきたす人々が出てきている。・「人の移動」が大きく制限されることになった。

②国内では、移動の制限に加えて人々の接触にも制限・制約・指導が加わることになった。自粛ということではあるが、「ステイ・ホーム、外出を控え家にいる」が原則となり、会社勤務等も極力自宅で済ませ(テレワーク)、やむなく外出するときには距離を保つ等の工夫が求められることになった。

勿論、緊急事態宣言の対象地域内外や、感染密度の濃淡によって程度の差はあるが、会合や外での飲食は、飲食店等の人数制限・営業時間短縮等規制が強化された。個人レベルのウイルス感染症対策

ある。また近頃は銀河が衝突すると、銀河の中心にあるブラックホールはこれまで活動が活発になると考えられてきたが、最近の研究ではガスをはぎ取られて活動を止めて冬眠状態になる場合もあるという。

夜空を眺めていると、流星が多いことにも驚く。銀河の中を泳ぐふたご座流星群ではないが、これらの流星がほかの星に衝突すること

応の特別措置法を成立させて緊急事態宣言を可能にし、4月7日に東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡を対象に宣言した。

16日になると対象を全国に拡大するとともに、緊急事態へ対応してもらうために国民に一人当たり10万円を給付することを決めた。

その後、緊急事態宣言の延長、景気判断(急速に悪化)、全国で休校、大相撲・全国高校野球中止決定等があったものの、5月25日に至り全国すべてで宣言を解除し、さらに7月には「GOTOトラベル」を開始した。

しかし11月にはいると飲食業、

として厚生省や自治体は以下を指導・要請している。

- ・「三密(密閉・密集・密接)」の回避
- ・他の人と十分な距離を取る(Social Distance)、“こまめに換気する”、“屋外でも密集するような運動は避ける”、“多人数での会食は避ける・席は互い違いに座る”、“マスクをつける”、“電車やエレベーターでは会話は慎む”、等
- ・手洗い
- ・帰宅時や調理の前後、食事前などこまめに手を洗う、アルコール消毒を行う等
- ・咳エチケット
- ・他者に感染させないため、ハンカチ等で口や鼻を抑える。

③その他

ここでは、対応する医療体制の充実、ワクチンの開発・接種、規制によって生まれる失業者等の救済等の対策については記述を省略する。

三・現代社会

(一)この星(地球)の上で地球の生物は過去5度絶滅し、今我々は

もあるだろう。宇宙には数え切れないほどの不思議な事象が、例えばクエイサーという強大なpowerを持つている天体が、存在するというが、私はもはやそれを究明する能力も時間も無い。ダークマターは遠くない時期に解明できそうかどうか。それは何時のことであろうか。(完)

観光業、製造業を中心に新型コロナの影響で解雇や雇止めでの失職者が7万人を超えて経済面での打撃が大きくなる一方、感染者、死者数も増加のペースが速まって、危機感が一層高まった。

これをうけて、12月14日に菅首相が「GOTOトラベル」全国での停止を表明、2021年1月7日には二度目の緊急事態宣言を行い、区域の追加を含め、現在(2021.1.20)東京、神奈川、千葉、埼玉、栃木、愛知、岐阜、京都、大阪、兵庫、福岡がその対象となっている。因みにこの時点で世界の感染者数は9618万人、死者は205万人超で、日本では

6度目の絶滅期に直面しているという。アメリカで発表された「サイエンス・アドバンシス」上の研究発表では、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類等脊椎動物だけを対象に絞り込んで調べたものであるが、絶滅のペースがかなり早まっているという。

絶滅の原因は、気候変動、氷河期、火山の噴火等だが、直近(と言っても6500万年前)の場合は、メキシコ湾に落下した隕石がきっかけで恐竜をはじめ多くの生物が絶滅したといわれている。

今回は、人類が絶滅を早める原因になっているという学説がある。十八世紀後半イギリスで始まった産業革命が、大量生産・大量消費・大量廃棄を根幹とする資本主義体制を作り上げ、人類が地球の支配者として繁栄を謳歌し、地球環境を破壊していることがその原因であるという。

人口が爆発的に増加し、1830年に10億人程度であった人類は現在およそ78億人になっており今も増加中である。

人口増と生活水準の向上には多くの資源(素材・エネルギー)が必要であり、近未来の資源枯渇が憂

慮されているが、さらに問題となっているのが化石エネルギー使用後に発生するCO2増加とその賚す温暖化・気候変動である。

後者への対策として太陽光、風力、地熱、その他再生可能エネルギーの活用等が進められているが、いずれも化石エネルギーにとつてかわるほどの力はないと考えられている。

(2) 人間の活動

地質学では、現代を人間が地球を支配する新たな年代に入っただとして「人新世」と呼ぶようになった。

2020年6月に、北極圏にあるシベリアの町で観測史上最高の38度を記録。温暖化がなければ、8万年に1回未満しか起こらない現象が現実のものとなった。

このままいけば、世界の平均気温は、今世紀末には前世紀末と比べ2.6〜4.8度上がると予測され、世界の平均海面も最大1.1メートル上昇。台風や強い低気圧がなくても高波などのリスクが高まるという。(WVF)等によると、人類が今の生活を維持できる食料や水を得るには、“地球1.6個分の自然資源が必要”であるという。米国人の生活レベルなら5個分

あり、日本人なら2.6個分である。こうした状態が他の生物種の減少を招いており、国際組織IPBESによると、地球上の種の絶滅速度は、現在、過去1000年平均の数十〜数百倍に達しているという。

四. コロナの警告

(1) 活動縮小

新型コロナ対策で人類の活動が縮小した結果、下記の変化が起こったことをニュースが報じている。

・観光地ベニス：観光客の姿がぱったり消えた。運河が透き通り、無数の魚が泳いでいるのが見えるようになった。

「船が来ないからね。ヘドロも巻き上がらない」と船長が呟いた。

・ニューデリー：昨年3月下旬のロックダウン（都市封鎖）によってそれまで見えなかった星空やヒマラヤ山脈が見えるようになるなど、各地で珍しい光景が話題になった。

・北京：昨年1月下旬以降、外出制限で交通渋滞が消え、2〜3月大気汚染を原因とする推計24000人余の死亡が避けられ

たという。

(英医学誌ランセットの論文)

・尤もインド、中国ではその後の経済活動再開によりまた大気汚染が始まったといわれている・・・

(2) 警告

コロナ禍が焙り出したのは、人類の身勝手きと現代社会のもろさであり、ウイルスの出現そのものが人間活動に起因すると疑われるようになった。新型コロナは、蝙蝠等の野生動物が宿主だといわれているが、開発によって棲息域の減少した野生動物が人間との接触の機会を増やし、それに寄生していたウイルスが(変異種をつくりながら?)人間界に入ってきたと考えられることである。

人間の活動が続く限り、第2、第3の新型コロナが現れる可能性がある。歴史(科学史)を振り返ると、大きなパンデミックは社会を変える岐路になっている。

・十四世紀、欧州中心に猛威を振るった黒死病(ペスト)は人口減を齎して合理化の原動力となった。

・十六世紀、アメリカ大陸を席卷した天然痘は結果的にインカやアステカ王国を滅ぼした。

といういわゆる「啄木鳥戦法」。それに対し、謙信は海津城の炊き出しの炊煙の異常さを見過ごさず、その夜に実行されるであろう武田方の作戦を看破し、早々に下山・渡河し、八幡原で待ち受けている武田本軍を逆に急襲する。その際の戦法を「車懸り」にしたいと謙信は言ったのである。軍を二手に分けてしまった武田方の八幡原布陣の兵数と比較し、自軍(上杉方)の兵数が互角かやや多いと判断した謙信は、さらに敵は川を背にする地の利が悪く、奇襲に動揺していることから、味方が心理的有利な状況であることも把握していたはずである。であれば、なにも「車懸り」のような凝った戦術にせずとも、広く鶴翼に配して包み込むように殲滅すればよいものを!と思ったものである(これはさすがに小学生の頃の感想ではない)。しかも軍師が「危ない」とまで言っている作戦をあえてこの戦況下で実行することが解せなかった(そもそも車懸りが理解不能)。

まあ、この主従のやり取りは番組の演出であろうことは承知している。しかし、多くの歴史家がこの啄木鳥戦法、車懸りという戦術

エッセイ

それは危のうござりまする! :

真野 信治

一. 大河ドラマから思う事

昭和四十四年(一九六九)の大河ドラマは『天と地と』であった。懐かしく思われる方もいらっしゃるであろう。主役は越後の上杉謙信、演じたのは石坂浩二氏である。まだ小学生だった筆者は、ドラマの内容はほとんど覚えていないが、終盤に放映された川中島合戦のシーン、特に謙信・信玄の一騎打ちの場面は結構記憶にある。ただ、子供心に不思議でならなかったのは、謙信が出陣に際し「今回は車懸りでいく!」と戦術を伝えたことに對し、上杉方軍師宇佐美定行役の宇野重吉氏が「殿、それは危のうござりまする!」と言った一言であった。つまり、妻女山に陣を張った上杉軍を、兵力を二手に分けた武田軍が夜半に奇襲をかけ、山から追い落とし、撤退してくるところを八幡原で待ち伏せて仕留める、

に大いなる疑義が横たわることを知っており、そのため第四次合戦を別角度から真相に迫る研究成果もある。この稿では、その虚像と実像を整理してみたい。因みに、一騎打ちの際の謙信を行人包みの法体として描く映像が圧倒的に多いが、得度して謙信と名乗るのが元亀元年(一五七〇)、果たしてこの時法体であったかどうかは不明である。しかし、法体のほうが絵になることは間違いない。

二. 語り継がれる第四次合戦

永祿四年(一五六一)九月十日、武田信玄と上杉謙信が信濃国川中島で激突したことは史実である。この地域での合戦が四回目と伝わる中、この回はことのほか激戦であったらしく、両軍合わせて四万余の軍勢が激突、約八千人の死者が出たという。史上最大の合戦と言われる関ヶ原の死者は十五人に一人、この戦いは五人に一人。すなわち、稀に見る大殺戮戦だったことがわかる。ただ、繰り返すがこの合戦の一次史料のみが、まるで抜け落ちたかのように残っていない。したがって、主に武田方の『甲

・近代、世界各地へ広がったコレラは近代医学・衛生システムを確立する契機となった。

エネルギーの大量消費、プラスチックによる海洋汚染、近代的畜産による窒素やリンの大量排出等地球上の物質循環が健全ではない現在とは全く異なる局面であり、その結果として野生動物と共存していたウイルスが人の社会に入りこみ、その交通網、流通網を利用して世界の隅々まで広がったというのが今回の新型コロナ禍と言えるのではなからうか。

解決策は、人類が事態を正しく理解し、コロナが発生しないような、言い換えれば、自然との調和・資源の節約(廃棄物を出さない)・温暖化を止める等の対策を地球規模で進め循環型の社会を構築することであろう。

地球規模での意識向上と実践が求められているのではないだろうか。

完

陽軍鑑』、上杉方の『川中島五箇度合戦之次第』という文献をもとに想像せざるを得ない。しかし残念ながら双方とも一次史料とは言い難い。つまり、後世に書かれた軍記及び編纂物であり、全面的に信用できるものではないということだ。これらを検討した研究者らは、この二つの文献から窺い知ることの出来る作戦・戦術は歴史学的にはあまり評価できるものではないと言い、信越国境をめぐる単なる局地戦だった可能性を説く研究者もいる。まずは、筆者がこの合戦の定説について、以前より感じていた疑問点を整理してみる。

三. 俄かには信じられない上杉謙信の洞察力

・なぜ敵が二手に分かれて攻めてくるとわかったのか?
・なぜ敵が行動を起こす正確な時間までわかったのか?
・なぜ敵の一方が八幡原で待ち受けていることがわかったのか?
謙信はこれら敵の戦術をすべて予想し、対処した。なんとも未恐ろしい洞察力であるが、本当にそうだったのか非常に疑問である。忍

者などのスパイ活動で得た情報と言われればそれまでだが、忍者絡みの話は信憑性に欠ける。妻女山から傍観して、武田軍の兵数がいっつになく大軍であり、なにか仕掛けてくると推測するぐらいは可能だ。しかし、敵が疑いもなく啄木鳥戦法を取ってくると確信したことは俄かには信じられない。しかも武田別動隊が山に攻めかかる正確な時間まで看破している。つまり、下山が少しでも遅延すれば、別動隊との小競り合いが始まってしまおうし、早めに下山しすぎると、こんどは武田本隊が八幡原に展開していないうちに着陣してしまう。

いわば、謙信は奇跡に近い絶妙のタイミングで下山し、濃霧が晴れるピッタリの時間に敵前に出現したという事になる。一方で、上杉軍の妻女山布陣は非常に疑わしいという説は少なからずある。筆者も妻女山を近くから眺めたことがあるが、かなり峻険なイメージが拭えず、一万近い軍勢が条件良く布陣できる地形があったのかどうか頗る疑問である。実は、妻女山に陣を構えたのも、車懸りを発動したのも、子の上杉景勝だったという史料がある。米沢藩に伝わる『覚

上公御代御書集』に、天正十年（一五八二）上杉軍が妻女山及び鞍骨山系に布陣したことが記される。もちろんその際の大将は景勝である。この布陣は功を奏し、攻め寄せる北条軍は高地から見降ろされる不利を悟って撤退してしまっただという。また、「車懸り」戦法を発動したのも景勝であるという。『群書類本部集』所収「長尾系図」巻末に「大阪冬陣、信貴野ニテ景勝車懸ノ次第」とある。どうもこの辺りの景勝の動向と川中島合戦時の謙信の動きが混濁して伝わってしまったのではないだろうか。

四. 俄かには信じられない
武田信玄の作戦立案
なぜ妻女山を攻めれば、敵は山を下ると思つたのか？
なぜ山を下った敵が八幡原に来ると思つたのか？
なぜ待ち受ける方の軍勢を少なくしたのか？
別働隊が妻女山を奇襲したとして、上杉軍が簡単に山を下るかどうかは疑問である。山が峻険であれば、山頂から攻撃するほうが有利であり、下からの攻撃は不利である。したがって、全軍とは言わ

ず山に留まる可能性は高い。また、山を奇襲したら、きつと敵は反対方面に山を下り、きつと雨宮の渡しを渡河して、きつと八幡原に進軍するという退路予想だが、敵が確実にそう動くとは判断して作戦立案した根拠が見えてこない。どう考慮しても非常に低い確率論の上になり立つ作戦であり、果たしてあの信玄がこのような作戦を採用するであろうか。一方、海津城から妻女山までの迂回路は約八キロ。しかしその行程は険しい山道であり、機動力を生かすことはほぼ不可能である。かつて信州大学のワンダーフォーゲル部が行軍実験を行ったが、途中で断念したという。同時に複数の迂回路を使って接近した可能性もあるが、どれも道なき経路であったことには変わりなく、分散行軍する意味はない。そうなる一万二千の軍勢が進軍したとして、先頭が妻女山に到着したころ、最後尾はまだ海津城を発進していないことになる。騎馬が加わるとさらに間延びする。したがって、この別働隊にこれほどの兵数を割くことは現実的ではなく、待ち受ける本隊兵数のほうが少ないのも理解に苦しむ。一方の上杉

⑤温泉寺所蔵「文書」永禄四年十月晦日付、京都清水寺成就院宛武田信玄書状

⑥恵林寺所蔵「雑詩」永禄五年武田信玄宛海川紹喜書状
これらの史料から考察すると、これだけは確実に起こったと判断できる事柄が、次の如く浮かび上がってくる。

六. 確実な史料から判断できる 確実に起こったこと

・永禄四年九月十日（グレゴリオ暦では十月二十八日）に大掛かりな合戦があった
・信玄の弟典厩信繁が討死した
・謙信が自ら太刀を振るって戦闘に及んだ
・郡内小山田衆が側面攻撃を仕掛け、上杉軍に甚大な損害を与えた
・合戦後、双方とも自軍の勝利を宣伝した

以上、一次史料から窺える当時の状況である。もちろん、啄木鳥戦法や車懸りなどの具体的戦術についての記述は全くない。次にこれから確実に起こった事実を踏まえながら、合戦の実像に迫ってみる。

七. 合戦の実像

まず当時の川中島の地理状況であるが、大軍が通行可能と思われる善光寺街道が縦に貫いており、それ以外は、犀川から流れ出る細い川が千曲川に幾重にも流れ込み、いわば湿地帯のような状況であったと説明する『市町村誌』がある。

すなわち万を超す兵力が行軍出来る道は限られていたという事は重要である。併せて妻女山布陣が架空であり、そうなるに当然啄木鳥戦法もありえないことから、第四次は凝った戦術を駆使しない普通の会戦であったと見なせなくてもない（無論、開戦までは相当の駆け引きがあった）。以前NHKの番組でやってしたが、濃霧の中、図らずも出会い頭に遭遇し、そのまま乱戦になってしまったという説を放映していた。三池純正氏も善光寺街道上での不意の遭遇戦という説を採っているが、一つ興味深い指摘をしている。それは「合戦場」という地名を持つ地域があり、『長野県町村誌』は、天文二十二年（一五五三）時の戦い（第一回川中島合戦）がここで行なわれたと記している。と同時にかつて「勘

助宮」という諏訪社があったといい、さらに今は開墾されてしまったが、数多くの墳塚があり、武器の一部もよく出土したという。このことから、この辺りで大掛かりな戦闘が行われ、山本勘助が戦死したのではないかと推論し、それは第一回のような小競り合ではなかったという。

もう一つある。この合戦場の近くにあったと伝わる横田城の存在である。周りの地誌から考え、要衝の地に立つ城と言っている。平安末期の築城と言われ三百年以上も存続していたとするが、川中島合戦にどうかかわったのかは文献の裏付けはない。ただ、非常に気になる城である。現在南側に「馬出」という字名が残り、その周辺の水路が半円形にカーブしているという。まさしく武田氏の城である。そこで筆者は、善光寺街道とこの横田城の近辺、つまり「合戦場」近辺で武田上杉両軍が濃霧の中、不意に遭遇して激戦になったと考えたい。もちろん、両軍の行軍目的が何であったかは推量できないが、双方とも川中島に着陣してすぐの事と思われる。すなわち、南の篠ノ井方面から海津城目指して進軍し

軍も、夜間雨宮の渡しを渡河したのなら、そこに繋がる整備された善光寺街道を北上してしまうのが当然と言う研究者もいる。あえて右折して八幡原に至ろうとすれば、当時は湿地帯であった可能性があり、非常に危険な行軍になると指摘する。危険を顧みずに八幡原を目指す強い意図が謙信にあったのなら別であるが、こうしてみると、上杉軍の妻女山布陣、武田別動隊の存在、下山した上杉軍の進路など、とてつもなく真実性の薄い定説と言っている。

五. 信頼できる確実な史料とは？

では、この第四次合戦における信頼性の高い史料はあるのだろうか。武田氏研究家の平山優氏が左記の史料が確実なものであると示している。

- ①『妙法寺記』永禄四年条
- ②『中条文書』永禄四年九月十三日付上杉政虎感状
- ③『上野文書』永禄四年九月二十六日付武田信玄感状
- ④『太田作平氏所蔵文書』永禄四年十月五日付上杉政虎宛近衛前久書状

ていた武田軍、北から善光寺街道を南下してきた上杉軍。視界不能の中、出会い頭に上杉が武田の横っ腹を突いた形となった。

しかも、たまたま突かれた位置にいたのが討死した典厩信繁の隊であったと考えたい。そうでもなければ、大軍の副将が簡単に討死はしないものである。一方で、突っ込んだ方の上杉軍も隊列が乱れ混戦となったことで、大将の謙信が自ら太刀を振るって応戦せざるを得なかった。

また『長野県町村誌』は横田城の城代が原大隅であったとしている。この原大隅守虎吉は、何を隠そう『甲陽軍鑑』に信玄謙信一騎打ちの際、槍で謙信の馬を突いた武将として登場するのである。恐らく、鬨の声を聞き、在城していた横田城から出撃したところ、いきなり謙信と遭遇してしまい、槍を合わせたと考えてもおかしくない。そのことが後世に別の状況で伝わったのだろう。その後、戦闘は激しさを増し、上杉軍が行軍後尾から波状的に新手を繰り出したことが、後世に「車懸り」戦術として伝わったと思われる。また、戦線が徐々に東へ移動、つまり八

幡原へ近づいていったと想定した場合、古犀川・小島川などの小さい川を渡河せざるを得ない。そうなると『紀州本・川中島合戦図屏風』が描いている川の中に馬を乗り入れて太刀を振るう両雄の絵は、非常に示唆的に思える。この屏風が、この地での遭遇戦説を傍証できる史料と言えるかもしれない。

最後に、武田軍の小山田衆が上杉軍の側面を攻撃したという史実につき、当時小山田家の棟梁弥三郎信有は病気で従軍しておらず、たまたま最後尾を行軍していた小山田衆が、回り込んで上杉軍側面を突いたというシナリオも十分考えられる。以上、確実に起こったことを相互リンクさせた「不意の接近遭遇戦説」を展開してみたが、如何せん史料の根拠はまだまだ薄いと云わざるを得ない。

八.まとめ

江戸期の儒学者頼山陽の漢詩にある「鞭声肅々 夜過河」というフレーズのお蔭で有名になった第四次川中島合戦だが、図らずもドラマでは「車懸り」は危ないと言わしめる演出をもって、その非現実性を訴えているように思える。

エッセイ

はじめに「コトバ

ありきか

色葉匂へど その5

ゲンさんの歴史幻想

宮下 元

◆コトバは心を通わせ合うツール
私は、今、傾聴活動をしており、言葉とコミュニケーションに興味がある。『傾聴』とは人間の心(感情・理性)をありのままに敬って聴くもので、私は『敬聴』と称している。『敬聴』はコミュニケーションの第一歩目である。まずは、お相手の気持ちを受け止めることだ。『コミュニケーション』とは、心や要件要望を通じ合わせ協力し合うことである。そして、コミュニケーションのツールが言葉(音声と文字・記号)である。

とはいえ、『コトバ』は単なる効率化ツールと捉えるべきではなく、心を通わせ合うためのツールと捉えたい。では、『コトバの成り立ちと

詳細を伝える同時代史料が少ない場合、編纂資料或いは軍記に頼らざるを得ない。仮にその文献が想像豊かで物語性があれば、世間から受け入れられて定着化してしまう恐れは十分ある。

わくわく感があって面白ければ、誰しもが好むものである。第四次合戦の全体像を細かく記す『甲陽軍鑑』はその代表的な軍記であると言っている。また、この内容を積極的に否定する史料が出ない以上、このスタンスは変わらない。

因みに“出会い頭の遭遇戦”に関しては、意外に根強い人気もあり、さらに発展した研究が示されることを期待したい。

〔参考図書〕

- 三池純正 『真説・川中島合戦』、平山優
- 『川中島の戦い』上下

は何か？ まずは、文字から追って見た。

◆きっかけは古代中国史4千年前
先年(2020/10)、当会の栗さん(栗光行氏)から製本版『私の中国史(古代編)』を頂戴した。以前、コピー版をいただいたので、読むのは二度目。人名は忘れていたけど、読み直しても面白い。司馬遷の『史記』(正式名『太史公書』)を基に中華の成り立ちの歴史ポイントを描いてくれた力作である。

史記は紀元前の中国二千年間の歴史正史であり、文字として伝わっているのがとてもありがたい。無実の罪(李陵を弁護した咎め)で宮刑(局部切の刑罰)を受けた司馬遷が、執念で書き上げた一級の歴史書(前漢、BC91年頃)だ。司馬遷のおかげで、中国4千年前の事が現代まで伝わったのだ。

『私の中国史(古代編)』の中で、補足『7. 人類と文字』項が興味を引いた。古代に文字を発明した民族は8つのみで、現在残って(使われて)いるのは『漢字』のみという。当初の文字は皆『表意文字』(絵文字・象形文字)だった。それが

アルファベットを中心とした『表音文字』に淘汰された。なぜだろうか？

◆漢字の起源は白川氏が解明
漢字の起源は、甲骨文字である。日本人の白川静氏の分析で起源・変化が解明されている。

甲骨文字はBC1500年頃古代中国の商王国(殷とも呼ぶ)で発明された。神のお告げ・占いを書き残すために使われた秘密言語だ。だから起源は占い関係の象形が元である。例えば『口』は祝詞(のりと)を入れる器の象形。『占』の字。祝詞を入れると『占』の字。

亀甲や骨に刻むため直線的な線刻となった。変化して更に記号化したのが漢字である。多民族・多言語圏では、表意文字の方が『コミュニケーション』がうまくいく。ただそのためには、統一され続けないと廃れる可能性が高い。既に現代中国、台湾、日本の漢字は変わってしまった。例えば、『习近平』氏は誰だかわかるだろうか？

なお、漢字の出現は具体的には宮城谷昌光著『沈黙の王』をお読みいただきたい。

◆シャンポリオンの執念
西洋ではどうか。最古の『ヒエログリフ』(神聖文字)とは、BC3500年頃からクレオパトラまで使われていた古代エジプト文字である。もう、誰も読めなくなっていた。1799年にロゼッタストーンが発見されて大勢が解読に挑戦するのに、シャンポリオンが成功する1822年まで20年も掛かってしまった。

その理由は、非常に複雑かつ多彩で、表意・表音が混ざっている為だった。しかも、ヘブライ語と同様に母音文字が無い事。つまり、正確な発音はわからず推定である。ただし、外国人名音などを頭すアルファベットの表音文字は持っていた。読み順も一定でなく絵の顔がある方から読む。2音字・3音字も多数ある。組合せて別の概念表意を示す、など高等で複雑だ。

シャンポリオン(Champollion、1790-1832年)の解読と、墓などに大量のヒエログリフ文字が残っていたおかげで(特に石刻)、我々は6千年前ということがわかることになった。ありがたいことだ。彼の類まれな多言語能力(25ヶ国語以



▲三池純正『真説・川中島合戦』107頁掲載地図を利用(矢印は筆者)

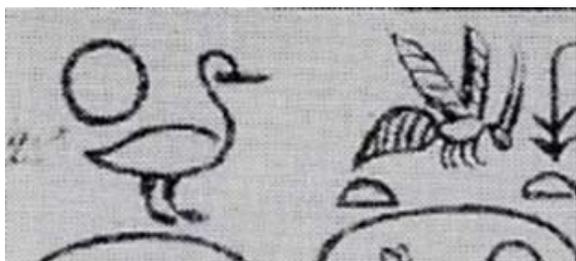
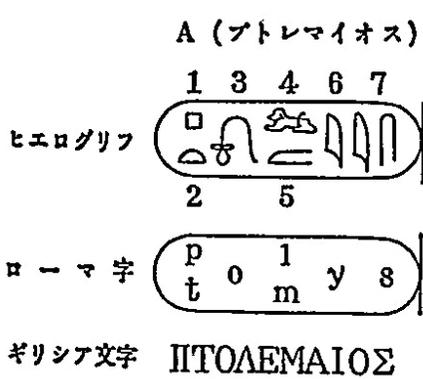
上)と努力とあきらめない追求心。フランス革命〜ナポレオン三世間の度重なる政変にもめげず、子供の時から「古代文明・人類の起源を知りたい。そのためにヒエログリフを解読したい」との意志を貫いた。それはなぞ解きのドラマだった。

◆ヒエログリフの解読ドラマ
解読の糸口は、ファラオ名。『カルトーシュ』という輪で囲まれたのが王名と気付いたこと。

ギリシヤ人系王の「プトレマイオス」「クレオパトラ」が表音で示されていたから、クレオパトラはローマ(ラテン語)で CLEOPATRA、ギリシヤ語で Κλεοπάτρα だが、Cに相当する砂丘マークは、CというよりKやQに近い発音。エジプト人発音はキルオパドラツ? かもしれない。文字順の左右の決まりは顔のある方から読む。また輪の前の葦(菅)の絵と蜂の絵が上・下エジプトを指し、全エジプト支配者ファラオを示すセット絵文字と分かった。

アヒルの絵は、①アヒルそのもの、②表音S(正しくはsa)、③の息子。太陽マーク(太陽神ラー)『O』とセットだと、『ラー

神の息子のファラオ』となる。



↑太陽マークとアヒルでラー神の息子ファラオの意味。葦(下エジプト)と蜂(上エジプト)で全エジプトの支配者ファラオの意味。カルトーシュの前で、ファラオは5種類の名前を持つ。

ライオンの横たわる絵は時に
①アルファベットL音(正しくは発音lm)であり、時に②ライオンそのものも指す。エジプト語にはLに相当する子音が無い。そこで、ギリシヤ人王の名を示すのに、音が近いライオンの絵で代用した。その発音mからみると、エジプト人は日本人と同様にRとLの区別がつかないのかもしれない。なお、記号『□』はマツト(or机)の象形でp音を指す。

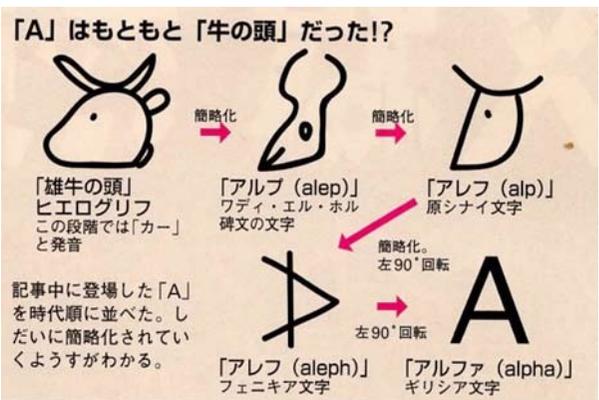
また、唇の絵 はr音でありアルファベットP(p音)の起源だ。こうしてみると、ヒエログリフの目的はファラオを称え後世に残すためのツールだった。

◆表意文字は表音文字に淘汰
表音文字(アルファベット等)はどんな複雑な発音や文章も表せるのだ。アルファベットの起源を辿ると、初めはエジプトの絵文字『ヒエログリフ』と近年わかってきた。ワディ・エル・ホル遺跡の発掘でわかったのは、エジプト都市の周辺で働いていた外国人(シナイ人など)が、自国語を表記するのにヒエログリフ(デモティック)の文字をベースに転用したらしい。それが、原シナイ文字となり、フェニキア文字に転用された。ギリシヤ人はフェニキア文字からギリシヤ文字を発明した。

ローマ人はラテン文字を、ギリシヤ文字とエトルリア文字をベースにBC6世紀に発明した。



〈出典:『ウィキペディア』〉



〈出典: Newton 誌 2008年5月号『アルファベット4000年のルーツ』〉

初め20文字のラテン文字が作られ(ABCDEFGHIJKLMNQRSTVX) 10世紀までGYZUWが分離追加され26字のアルファベットとなった。つまり、発音の基本種類は15〜26個でほとんど表せる。これが英語(English)のアルファベットに利用された。ただ、発音がヒエログリフとは殆ど一致していない。それは、意味(わかり

易さ)や描き易さや発音とか民族ごとに適当に転用したからと思われる。ただ、英語・米語は多民族混在化しており、単純・単音な表音文字ではなくなっているのだが。

◆コトバは人・地域・時代で変化
なお、アルファベットとは、牝牛の頭の象形がA||α(アレフ、アルファ)に、家の象形が□でB||β(ベート、ベータ)に変化したからという。

元が牝牛とか家とかは、今では想像出来ない程変化している。家のマークはエジプトでは『ba』(ブル)と発音していた。しかしシナイ(カナ人)では家を『bayt』(ベイト)と発音していたので、発音『b』の文字として家マークを選んだと思われる。エジプト(ヒエログリフ)での人名表音では『b』音に足のマークを使っていたのだが。

◆アルファベット推移表
抜粋だが、A〜G・L・Mの推移表を作ってみた。左端が起源のヒエロ

グリフで、右端が参考にヒエログリフ内での表音文字を追記してみた。ヒエログリフ(デモティック)を参考にしつつも、原シナイ文字が独自民族のアルファベット表音文字の始まりである。シナイ人(カナ人)の苦勞・工夫が見とれる。

◆漢字以外の表意文字が消えた
何故、漢字以外の表意文字が消えたのだろうか? もちろんその民族国家が減びたからだ。もう一つの理由は、人間のコミュニケーション能力が柔軟かつ複雑で、多様な表現に文字の追加が追いつかないからだと思う。しかも象形(絵)文字は描くのに時間が掛かり過ぎる。だから、どんどん記号化していき、絵文字ではなくなる。現代漢字も元の意味は殆ど推測できなくなっている。ましてや他民族にとってはとても難解で種類数も多くて覚えられないのだ。

漢字も拼音(ピンイン)という中国語音のアルファベットで表記されている。では表意文字は無くなるのだろうか?

私は、日本発の『EMOJI』が世界に広まると思っている。発音の決まっていない顔文字や絵文字だ。電子機器やネットの進歩でとても使い易くなったのだ。

◆人類の進歩は文字ありき

漢字と史記や、ヒエログリフとピラミッド建設など文字からわかったことは、古代人は現代人と変わらない知性と能力を既に得ていたことだ。現代人類（我々ホモ・サピエンス）は遺伝子進化は少ないのに、急速な技術進歩を遂げてきた。その要因はコミュニケーション力つまりコトバにあるかもしれない。

新約聖書ヨハネ伝福音書ではないが『初めに言（ことば）があった』である。

【引用・参考文献】

- 『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 『私の中国史 (古代編)』 粟光行 著 自費出版

〈注記：本来はギリシャ語で「アルケー（根源・原理・始源）」はロゴス（真理・理由・言葉・イエスの御言）なり〉の意味らしい

◆人類の繁栄は道具の進歩から

人類はなぜ繁栄できたのか？ 原因・理由は明確にはわかっていないが、まず、『道具の進歩』である。二足歩行で手と喉が自由になったのが大きい。そして言葉も道具で

ある。仲間が協力し合うのに有効なツールだ。

更に文字の発明で情報伝達が容易で正確かつ速くなった。広範囲でかつ後世にまで伝達できるようになった。ヒエログリフ発明からたった5000年、現代は誰でもノウハウの記録を見られれば、自らは創造・発明・発見せずに、最新兵器さえも作れてしまうのだ。技術進歩は文字ありきだ。そして、この飽くなき進歩意欲はどこからくるのだろうか？

【次号に続く】

- 『ロゼッタストーン解説』 アドキンス夫妻著、木原武一訳、新潮社
- Newton誌 2008年5月号「アルファベット4000年のルーツ」 ニュートンプレス社
- 『常用字解』 白川静著 平凡社 2003年
- 『沈黙の王』『歴史の活力』 宮城昌昌光著 文春文庫

追悼の辞

歴史研究会 主幹 吉成勇様
名誉会長 加藤導男

令和三年三月十九日、歴史研究会吉成勇主幹がご逝去されました。享年八十歳でした。ご葬儀は家族葬で営まれました。

二月に直腸癌で手術のため入院されたが、三月になれば出社されるとお聞きしており、安堵しておりましたが、突然の訃報に驚愕した次第であります。

昭和五十八年十月、新人物往来社（月刊誌『歴史読本』等）を出版。吉成さんが編集長を務めておられました。歴史研究会があり、当会初代大町頼勝会長が尽力され、横浜支部（後に横浜歴史研究会に改称）が発足し、その年、神奈川県歴史研究会等、十四の歴史研究団体がスタートしたのです。

歴史研究会は、懇談会（講演会等の開催）を開催し、私も何回か研究発表をさせて頂きました。

平成十二年には、吉成主幹は合

資会社（歴研）を設立、五反田に歴史研究会本社を移転し、業務に当たりました。

また、日本各地で毎年、全国大会を開催、その地域の歴史団体や県知事等を招聘し、全国の歴史愛好家との交流を図ってきました。

当方の想い出としては、平成二十一年の首都圏大会です。吉成主幹と高橋倭子さん（現江戸の歴史研究会会長）と当方とでプランを練り、その他の方と共に十数回の下見を行いました。

実行委員長には当会第二代八城東郷会長と、大会事務局長は当方が努めました。

品川プリンスホテルを主会場とし、東京・横浜を見学する三日間でしたが、永井路子さんが挨拶されるなど盛り上がった大会でした。

当会については、毎年総会・新年会には吉成さんにご来賓として

ご臨席頂き、当会への励ましのお言葉を賜りました。

また、当会の5年毎の周年記念行事の講演会の講師については十周年記念以来、毎回吉成主幹に仲介の労をとっていただき、著名な先生方にご講演をお願いできた事を、深く感謝を申し上げたいと存じます。

当会は来年、創立四十周年を迎えますが、これまで吉成さんによる講師の方のご紹介が叶うことができまので、これから検討しようと考えております。

これまで、当会についていろいろな面でご支援・ご指導を頂き、本当に有難うございました。

あの小太りで豪快な笑顔を忘れたいことはありません。

なんとと言っても、当会の「産みの親」が歴史研究会ですので、今後もそちらの世界からも、応援下さい。

どうか安らかにお休みいただき、様やご家族皆様が無事にお過ごしになれることをお見守りいただきたいと思っております。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

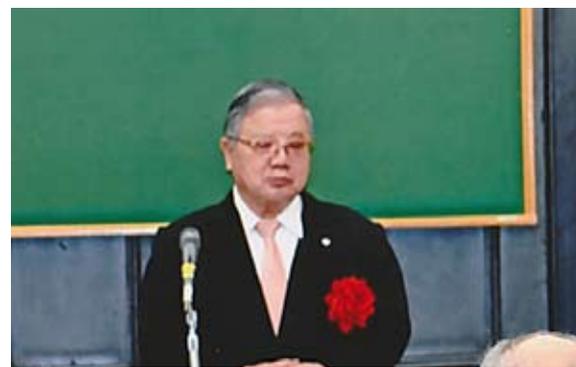
アルファベットの推移

ヒエログリフ	シナイ 呼び名 (意味)	文字	フェニキア文字	ギリシア文字	エトルリア文字	ラテン(ローマ)	英語	ヒエログリフ
𐤀 (alp)	alp (牡牛)	𐤀	Α α	Α α	A a	A	A	𐤀
𐤁 (bayt)	bayt (家)	𐤁	Β β	Β β	B b	B	B	𐤁
𐤂 (gaml)	gaml (ブーメラン)	𐤂	Γ γ	Γ γ	Γ γ	C c, G g	C c, G g	𐤂
𐤃 (dalt)	dalt (扉)	𐤃	Δ δ	Δ δ	Δ δ	D d	D	𐤃
𐤄 (hillul)	hillul (歌)	𐤄	Ε ε	Ε ε	Ε ε	E e	E	𐤄
𐤅 (waw)	waw (鉤)	𐤅	Ϝ ϝ, Φ φ	Ϝ ϝ, Φ φ	Ϝ ϝ, Φ φ	F f	F	𐤅
𐤆 (lamd)	lamd (鉤/突き棒)	𐤆	Λ λ	Λ λ	Λ λ	L l	L	𐤆
𐤇 (mu)	mu (水)	𐤇	Μ μ	Μ μ	Μ μ	M m	M	𐤇

https://ja.wikipedia.org/wiki/フェニキア文字とラテン文字



▲吉成主幹と筆者（平成30年1月）



▲当会総会で来賓挨拶された吉成主幹（平成30年1月）

追悼の辞

前副会長 三觜行雄さんを偲ぶ

副会長 熊本修一

三觜行雄さんは令和三年三月八日に逝去されました。享年七十三歳でした。

三觜さんのお付き合いは、私が横浜歴史研究会に入会した平成二十四年からです。

司馬遼太郎をはじめとする時代読物と酒席が好きな共通点から親しくさせて頂きました。

また当会入会間もなく大役を仰せつかった私に、当会の規則・慣習等々親切にご指導いただきました。兄貴分的存在で大変感謝しています。

三觜さんの研究発表は、「朝敵からみた戊辰戦争の真実とは」、「徳川慶喜・勝海舟・西郷隆盛の果たした役割」、「維新の傑物 江藤新平の栄光と挫折」「青い眼をした勤王の志士アーネスト・サトウの果たした明治維新への役割」等々

と幕末期の時代を背景にしたテーマで毎年冗談も混じえ分り易く発表され歴史の知識が浅い私にも理解出来ました。

また、屋外行事（歴史散歩等）の懇親会の設営では、事前に現地に向き飲食店を視察・値段交渉し、安価会費で開催出来るようご尽力頂きました。飲食店の選定と価格交渉には脱帽いたしました。

団体行動では、持ち前の統率力で取りまとめ役を勤め当会への貢献は偉大であり感謝いたします。

三觜さんは令和元年十一月にホームコースの鎌倉カントリークラブでホールインワンを達成し、翌二年二月にゴルフの「打球が左に飛んでいく、どうもおかしい」とご自身で体調不調を自覚し検査したところ、脳梗塞と判明しカテーテル挿入治療を実施し脳梗塞は無事

完治しましたが、退院検査で大腸ガンに蝕まれていることが判りました。ステージⅣと宣告されましたが、ご自身でガンの積極的治療は望みませんでした。

ご本人は生前、「葬儀は親族のみ、無宗教で施行、墓地はなしで散骨」と遺言されたそうです。

ご遺族はご本人の遺志を尊重し、無宗教の葬儀で祭壇の背景は、ホールインワンを達成した鎌倉カントリークラブ3番ホールの風景を配したとのこと。す。（奥様談）

余命を告げられてからの闘病生活中、種々の思いを巡らされたことと思います。

右下写真は例会後、さくら水産での二次会において会員の皆さまと談笑する一コマです。（高尾氏撮影）あぐらをかき、皆さまに歴史の話だけではなく、野球の話、故郷の話など和気あいあいと話しかけていました。話題豊富な三觜さんは、親しみ易い兄貴分的な存在でした。

今にも「熊ちゃん元気でやってるか？飲んでるか？」と声が聞こえてくるようです。

三觜行雄さんとは新型コロナ禍で



(82)

お会いすることが出来ず大変残念ですが、貴兄が築いた和気あいあいの雰囲気大事にしていきたいと思います。

梅の香りが去るように三觜さんも去って行きました。三觜さん「ゴルフクラブと司馬遼太郎の長編読物は持ちましたか？」お忘れなら後ほどお届けいたします。

安らかにやすみ下さい

【合掌】

例会発表の概要

（令和2年10月、令和3年3月）

*令和2年10月12日（月）例会開催。会場は横浜市開港記念会館講堂（定員481名）で新型コロナウイルス感染対策を施して実施された。参加者は94名。発表者3名。

▼大瀬克博氏 題『義和団事件の英雄・会津人柴五郎の生涯』

柴五郎の原点は戊辰戦争で、柴家を守っていた家族が自刃したという体験にある。五郎少年は親戚に預けられ、以降は下北での耐乏生活を経て、軍属として出世を果たす。そして、義和団事件において大活躍したのである。

▼高野賢彦氏 題『大王（おおきみ）を支えてきた大伴氏の最期』
神武以来、帝の側近として活躍した大伴氏がどのように衰亡していったかを解きほぐされた。介在したのは藤原氏であり、多くの豪族を

排除していく中で最後に残った伴氏（大伴氏）を、応天門の変で滅亡へと追いやり、以後、摂関政治を開始した。

家持が編纂に携わった「萬葉集」は藤原氏との覇権争いに敗れた名門貴族の無念を表す哀歌ではないかと説かれた。

▼清水 漢氏 題『赤備え 虎昌・昌景 & 直政・幸村』

武田に仕えた飯富（おび） 虎昌が赤で武装したのが赤備えの最初で、虎昌が信玄の嫡子義信の反逆計画に加担した疑いで切腹したため、この備えは弟 山県昌景に継がれる。以後真田家・井伊家に継承された。赤備えは高価な武器であり、赤は辰砂（しんしゃ）と呼ばれる鉱物から採られるものとのこと、鮮やかな赤い色を槍や徒士にまで装備させたかどうかは不明とのことであった。

*令和2年11月8日（日）例会開催。会場 横浜市開港記念会館。新型コロナ禍第三波の到来・質疑応答や会後の親睦会の中止等の悪条件下であったが86名のご参加を得た。発表者3名。

▼長谷川憲司氏 演題「近代日本が生んだ世界的細菌学者 野口英世の実像」

英世の才能・努力を評価する人は多いが、もう一步届かないという苦しさ、むなしさを感じる人生であった。生涯論文数204報という驚異的な活動であったがその学術的成果は3報のみという結果に、細菌学者として生きていく者の宿命を教えられる。研究中の黄熱病で亡くなり、「なぜ罹ったのか」私にはわからない」と言葉を残したという。

▼齋木敏夫氏 演題「宇佐神宮と八幡神」

宇佐や国東には古代の政治文化が栄えた。それは宇佐の秦氏による八幡宮の存在が大きい。京都に石清水八幡があるが、宇佐の秦が「やはた」になり、幾重にもつながる幡を立て大和朝廷の軍事最前線となった八幡神がルーツにあったのだ。演者の詳細な解説は現地のガイドに勝るとも劣らない素晴らしい講演だった。

▼高尾 隆氏 演題「間宮林蔵は善人か悪人か？歴史は後世に脚色される？」

林蔵は偉大な探検家で、日本の国防や内政に大いに寄与したとの評価があるが、林蔵の一つの行為が幕府の天文学と日本のために尽くした学者シーボルトを不幸に貶めた。その結果を後年の学者が二人の学者の悲劇として著した。しかしその原因の審議はなく、一方的な被害者擁護論である。この学者が著した林蔵の悪評が今日の定説となってしまう。歴史を語る際は個人的な思いや信条を持って表現してはいけないという教訓である。

*令和2年12月1日（火）例会開催。会場 横浜市開港記念会館・講堂。新型コロナ禍第三波のただ中という状況下、厳重な三密回避対策を施して開催された。参加者は85名。発表者は3名。

▼小林道子氏 演題『金印発見』
「志賀島の甚兵衛は何処へ消えたのか」

天明4年（1784）、筑前志賀島で発見された金印は、甚兵衛と

「百姓が見つけた」と記録されているが甚兵衛の存在が怪しい。志賀島の歴史的・地理的検証、金印の真偽、鑑定人の藩校学者亀井南冥の立ち位置等を示し論じた演者の結論は南冥が金印鑑定による名声を得るのが目的だとした。魅力的な歴史ミステリーであった。



横歴の例会では初発表の理事・小林さん

▼中村康男氏 演題『明治新政府 勢力闘争と近代化の歩み』「旧土佐藩士大目付下村銈太郎盛俊の経歴から読み解く」

明治新政府は欧米列強に負けないう国造りに着手し、全国統治と近代化をめざしたがその統治の行政

システムの構築は多彩な人材でなされた。近代化の道のりは、決して平坦ではなく、多難であったが、それを演者の高祖父である下村盛俊の役割から読み解かれた。演者は落語や講演の会「楽笑友の会」を主宰されているが、さすが弁舌さわやかな説得力あるご講演であった。

▼長尾正和氏 演題『元禄期大名：良将・善将・悪将・愚将』「土芥寇讎記」

全43冊の和綴じ毛筆書きで全国諸大名243藩のお国事情やお殿様の人物評価が記されている。編纂指示は綱吉とされる。

綱吉は生真面目で好奇心の強い將軍だったのではないかと思われる。諸大名たちもそうだった評価の動きがあるのではないかと考えていたのではないだろうか。綱吉治世の輪郭が見えるようで興味深いご講演であった。

*令和三年一月〜三月は新型コロナ対応の緊急事態宣言下であったので、例会はやむなく中断としました。

受贈図書

木村高久

全国各地の歴史研究団体より、会報等をご惠贈いただきました。紙上より厚くお礼申し上げます。（令和3年3月31日現在の到着分を掲載いたします。）

◇兵庫歴史研究会
「歴研ひろば」
第279〜281号

◇岡山歴史研究会

「歴研おかやま」第29号

◇岡倉天心市民研究会

「天心報」第36号〜第37号

◇宮城県歴史研究会

「歴研みやぎ」第105号

◇神奈川県立図書館

「郷土神奈川」第59号

◇歴史と中国の文化を学ぶ会
「ちゅうぶん」第三十四号

会員活動報告

●村島秀次事務局長の活動

・三月二十四日 村島さんは学習院大学院生を引率して静岡県浜松市博物館・伊場遺跡で木簡調査を実施された。近く、学術論文の発表予定との事です。

●寺田隆郎会員（鹿鳴家河童さん）の活動

・十月十一日、寺田さん主宰の「第五回ルミナリエ落語会」が、お江戸両国亭で開催。演目は亀八・亀次郎の新内流しから始まって、鹿鳴家河童の『湯屋番』、射水亭ぼんぼこの『紙入れ』、朗々亭笑声の『へつつい幽霊』、参遊亭遊月の『八五郎出世』、そして参遊亭遊若の『たがや』、POO坊のマジックの後、空々亭木製の『お神酒徳利』。

・十一月一日、NPO法人フォーエヴァー主催の「第十回落語国際大会IN千葉 記念落語会」が千葉文化会館小ホールで開催。寺田さんは『前提灯』で参加した。これは過去の大会の入賞者のうち、近隣居住者から選ばれた。

・十二月一日、浅草公会堂和室



にて行われた英語落語の会で『Fire Drum（火焰太鼓）』を披露し、翌二〇日（日）にはお江戸両国亭で『掛取り萬歳』という大ネタを、金原亭龍馬師匠のハメモノで演じられた。

・一月三十一日、鎌倉の老舗料理屋、八百善で落語会を主催して『夢金』を口演された。

・二月十一日、浅草公会堂和室で英語落語『ガーン』を三味線、ハーモニカ、リズムボックスを使って端唄・都々逸・軍歌・ジャズを唄いながら、派手に演じられた。

左は五月十五日（土）に江戸両国亭で開かれる予定の「第六回ルミナリエ落語会」のチラシ。寺田さんは「江戸落語」を口演。

●中村康男会員（浮世亭寿八さん）の活動

以下の自主事業のイベントを主宰された。（◎はオンラインによる動画配信。他はライブ）

・十月八日、さつきが丘ケアプラザ

自主事業「歴史講座」

・十一月六日、美しが丘ケアプラザ

自主事業「午後の落語会」

・十二月五日、大場ケアプラザ

自主事業「浮世絵講座」

・十二月十六日、町田市ことぶき

大学「江戸の話」。“今の東京から

江戸時代にタイムスリップ”と浮

世絵から江戸の文化と庶民の暮らし

ぶりをみる。

◎一月一日、山内地区センター

自主事業の山内オンラインわんぱく

寄席「山内笑いのお年玉」動画配

信

・二月十一日、鴨志田ケアプラザ

自主事業 浮世絵講座「浮世絵の

イロハ」（写真参照）

・三月十一日、鴨志田ケアプラザ

自主事業 浮世絵講座「北斎VS

広重、二大巨匠の魅力を探る」

・三月十三日、山内地区センター

自主事業「山内楽笑寄席」

三月十四日、桂台コミュニティハウ

ス自主事業 浮世絵講座

「浮世絵から江戸の歴史や文化を探る。」

〜北斎、広重の二大巨匠と国貞、国芳のライバルが描いた浮世絵から学ぶ！〜

◎三月二五日、山内地区センター

自主事業「山内オンライン作品展」

で中村さんが動画作成などプロ

デュースを担当され公開された。

・東急沿線のケーブルテレビ・イツ

コムテレビより、中村さんが講

師を務める鴨志田地域ケアプラザ

自主事業の浮世絵講座が放映され

た。

■イツコム地モトNEWS》(10

分番組 iscom 1ch

三月十九日(金)二回、二十日(土)

三回の計五回の放送。

(編・記)



会報第83号 原稿募集

本年十一月末日発行予定の会報第83号の「特集テーマ原稿」と「一般原稿」の募集を行います。また表紙写真も公募いたしますので皆さま奮ってご応募くださるようお願いいたします。

●特集テーマ原稿募集

特集テーマは「わが故郷の偉人」です。故郷の自慢話などを含め、幅広くとらまえていただければと思います。字数は会報誌4頁以内とします。(従来は2頁以内でした)。

●一般原稿募集

自由なテーマでの一般原稿を左記のとおり募集いたします。
○会員研究、エッセイ、俳句、短歌、詩など

【投稿規定】

○特集テーマ、会員研究、エッセイについての字数は、会報誌4頁以内(このスペースには題名欄、文字間の空白、写真、表、地図などすべてを含みます。ワードでの電子データでのご投稿ください)。

○俳句は5句以内、短歌は7首以内、詩は30行以内。

○原稿締切日 9月末日

○会員配付日 12月例会日

○原稿提出先

〒221・0834

横浜市神奈川区台町

9-2-501

山本 修司

☎045・323・0605

Eメール yamamomoy223@

gmail.com

訂正記事

.....
会報81号に誤りがあります。

訂正しお詫びいたします。

○29頁最上段4行目

(誤) 『北条氏の乱』

(正) 『比企氏の乱』

○60頁下段最終行

(誤) 石路の花

(正) 石路の花

○63頁1段1行目

(誤) アルペジオ

(正) アルペジオ

○65頁2段15行目

(誤) 難波の春は夢なりや

(正) 難波の春は夢なれや

編集後記

先ずは会員の市川康夫さんが本年より当会の永年会員になられたことを心よりお喜びいたします。

永年会員の条件は在籍五年以上かつ満年齢で九十歳以上です。永年会員になると、年会費無料になるため、横歴会員を事実上は退会しにくくなります。

市川さんご本人のお話では、喜寿(七十七歳)を迎えられるにあたって短歌を始められ、昨年から俳句も始められたとのこと。今号では歌壇・俳壇・エッセイにそれぞれ秀逸なる作品をご投稿いただいております。まさしく老当益壮(ろうとうえきそう)の生き方をされ、会員の羨望の的であります。市川さんの益々のご活躍を祈念いたしております。

次号(83号)の「特集テーマ」は上記に登載のように「わが故郷の偉人」とさせていただきます。ここで、「故郷」の定義を幅広く取っていただき、「自身はもとより、父母・ご先祖の故郷でも結構です」、あるいは極端に「故郷」＝「日本」と拡大解釈していただいても結構です。また字数も従来の特集テーマは二頁以内でしたが、これを一般原稿と同じの四頁までとさせていただきますので皆さま奮ってご応募いただきますようお願いいたします。

(編・記)

